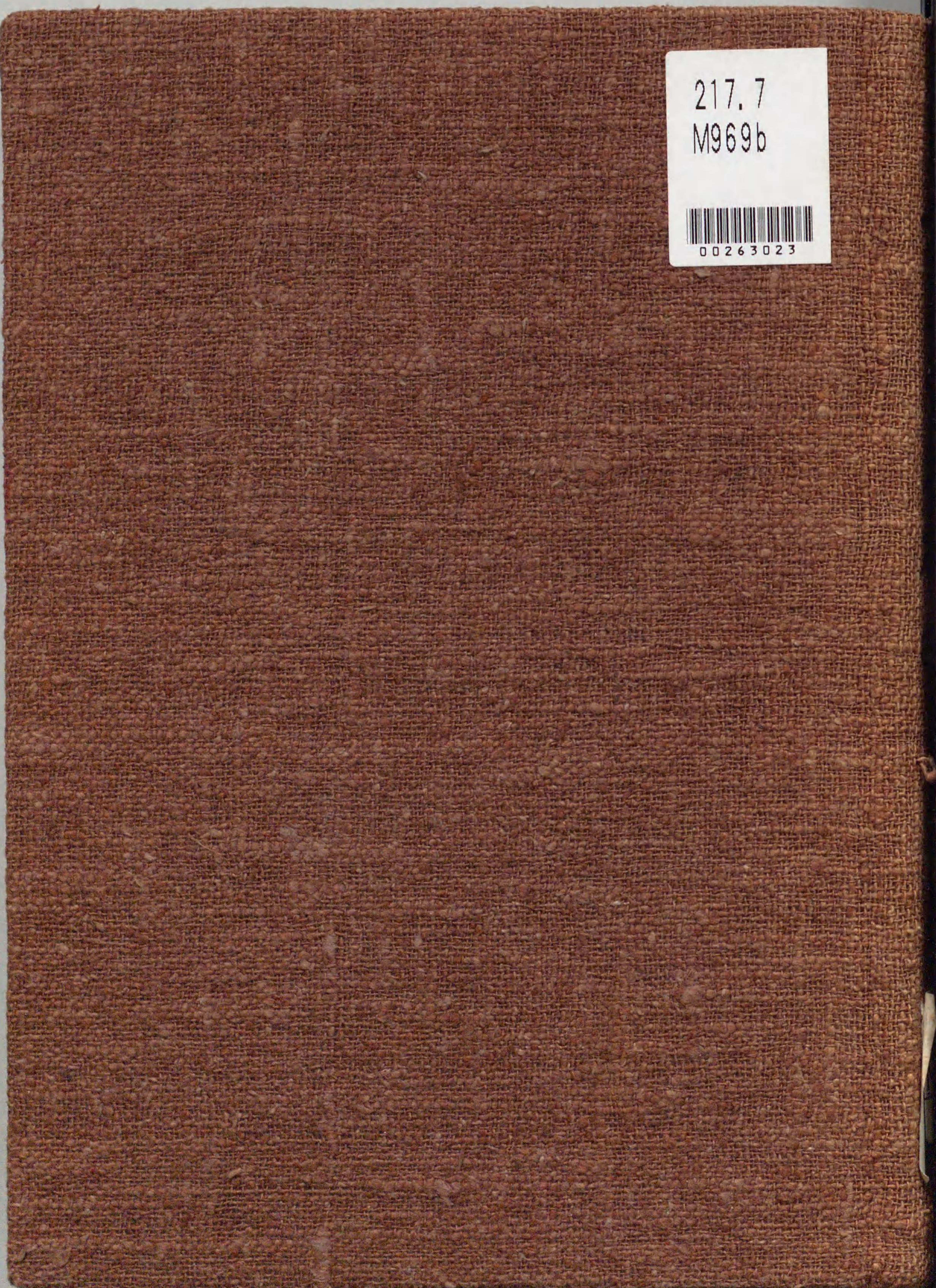


217.7
M969b



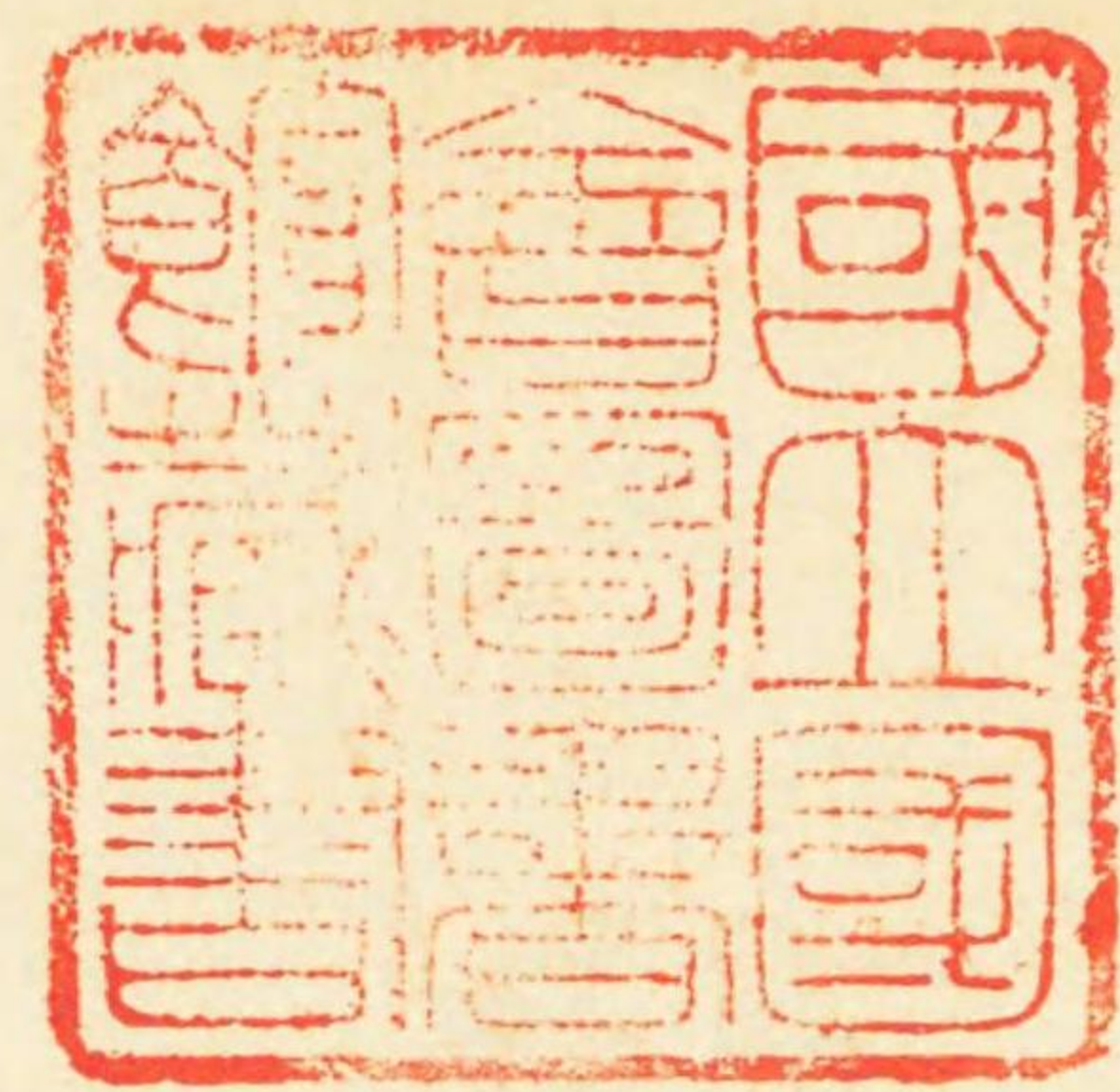
00263023





防長文化史概略

防長文化史概略



443.24

263023

徵古
視今



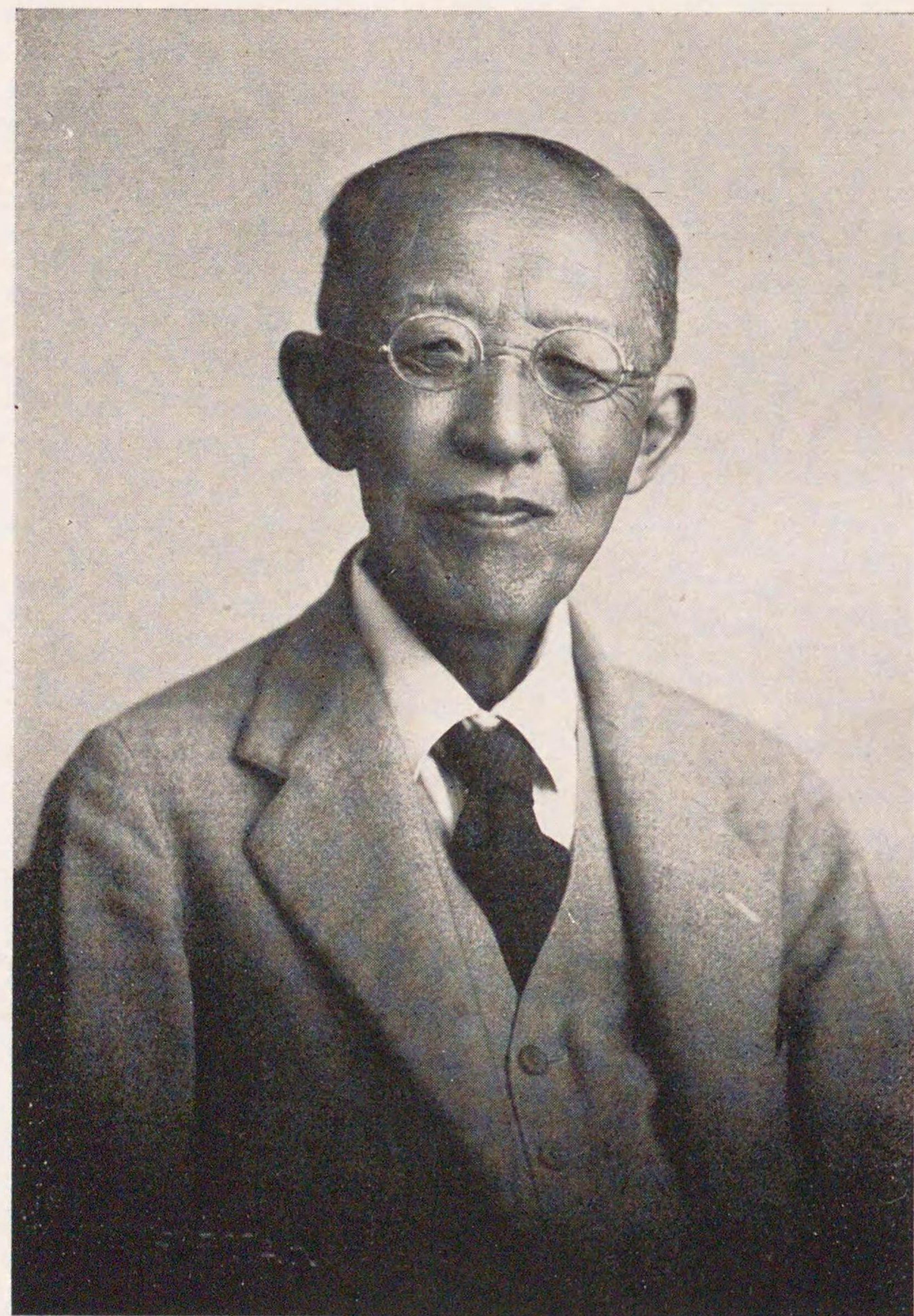
皇紀二千六百年初夏

湯淺倉平題





影照五十八者著



著者八十五照影

217.7M9696

序

古來歴史の展回せし迹を繹ぬるに、多くは夢幻の如く、或は演劇の脚色に似て、この事實は決して既往のみにあらず、將來も亦同一光景を繰返すへし。徐に世相を観るに、不可思議なる力に倚つて、幾多吉凶利害の常に交替し變轉せる状態は、恰も月の盈虚、潮の干満の如く、また風の東西南北より吹起りて新陳代謝するに似たり。彼の萬世不虧と思へる地球と雖も、屢次驚くべき異變ありしは、地質學考古學に據つて證明せらる、況や人事の消長輪回代謝極りなきに於てをや。そもそも長期間に涉れる社會各般の制度文物が、自然的或は人爲的に變轉するは、固より數の免れざる所にして、舊物破壊の現象は吾人の常に觀るところなり。故に若

し史實の記録なければ、争てか古來變遷の迹を窮めて、能く事蹟の湮滅を禦き、之を永久に存續するを得んや。これ文獻の尊重すへき所以にして、吾人が古事來歴の探究に怠らざる次第なり。小生少時より多く諸先輩の舊話を聽き、また諸書を閲して尙ほ記憶に存するもの少からず。これを後人に傳へんとするは、貴重なる史實の湮滅防止に勉むる微志に外ならず。然るに粗笨多き拙講に對し、諸君の懇切なる贊助を辱うしたるは、幸慶殊に甚し。

拙話は一昨十四年六月より、昨十五年三月に至る十回を以て終了したるも、頽齡既に八秩を踰え、記憶衰乏のために、迂愚重複の箇所多かるへし。幸に老朽の没字碑兎園冊として寛恕せられ、所謂甘瓜苦蒂の味外の味を攝取あらんことを冀ふ。

人或は、不全不備の陋話を敢て述ふるを難するものあらん。然れ

ともこれ小生性來の好古癖また史癖に發したる、已まんとするも已む能はざる狂態にして、而もこの癖話を聽ける諸君も亦奇癖なしと謂ふへからず。眞に傾蓋如舊の好因縁ならん乎。

顧るに拙話中遺漏少からず。就中上古に於ける防長人の外國交通、また古代民族の北海南洋への進出作動、更に中世期に於ける遠海出漁、巨材造林、鑛物掘採、農作經營その他尙ほ數件の補ふべきものあり。爰にその謬闕の訂正を辱くせは無上の欣快なり。本居宣長大人は『ふみよめはおほやけはらもた、れけりひとりわらひもまたせられけり』とうたへり。偏に讀者諸君の鴻教を禱る。

本會開催に當り、伊本直樹君は深くこの舉を感悅し、奮然橐囊を啓きて、刊行費全部を負擔せられ、また西村虎太郎君は當初より斡旋の勞を吝まず、深切に校正のことに竭されたり。諸君の好意

寔に謝するに辭なし。茲に刊成に際しいさゝか鄙見を述へて序と爲す。

皇紀二千六百一年辛巳四月三日神武天皇祭日に當り東京世田谷の掃葉村舎に於て識す

看雨居士 村田峯次郎春信

時年八十五

防長文化史概略

目次

甲篇	上古攝取文化の體制……………	一
乙篇	奈良平安時代を經たる文化の進勢……………	三
丙篇	中世生産業の開展……………	五九
丁篇	鎌倉初期諸政の經緯……………	八九
戊篇	鎌倉以降戰國時代を経て錯綜せる事變……………	二五
己篇	戰國時代の防長文化の態勢……………	一四七
庚篇	防長に於ける毛利氏の政道行爲……………	一八三

辛篇 防長藩政に映發せる精華……………二二三

壬篇 近世防長の國策運動……………二四三

癸篇 維新事業を構成せる防長精神……………二七三

看雨居士三吟稿

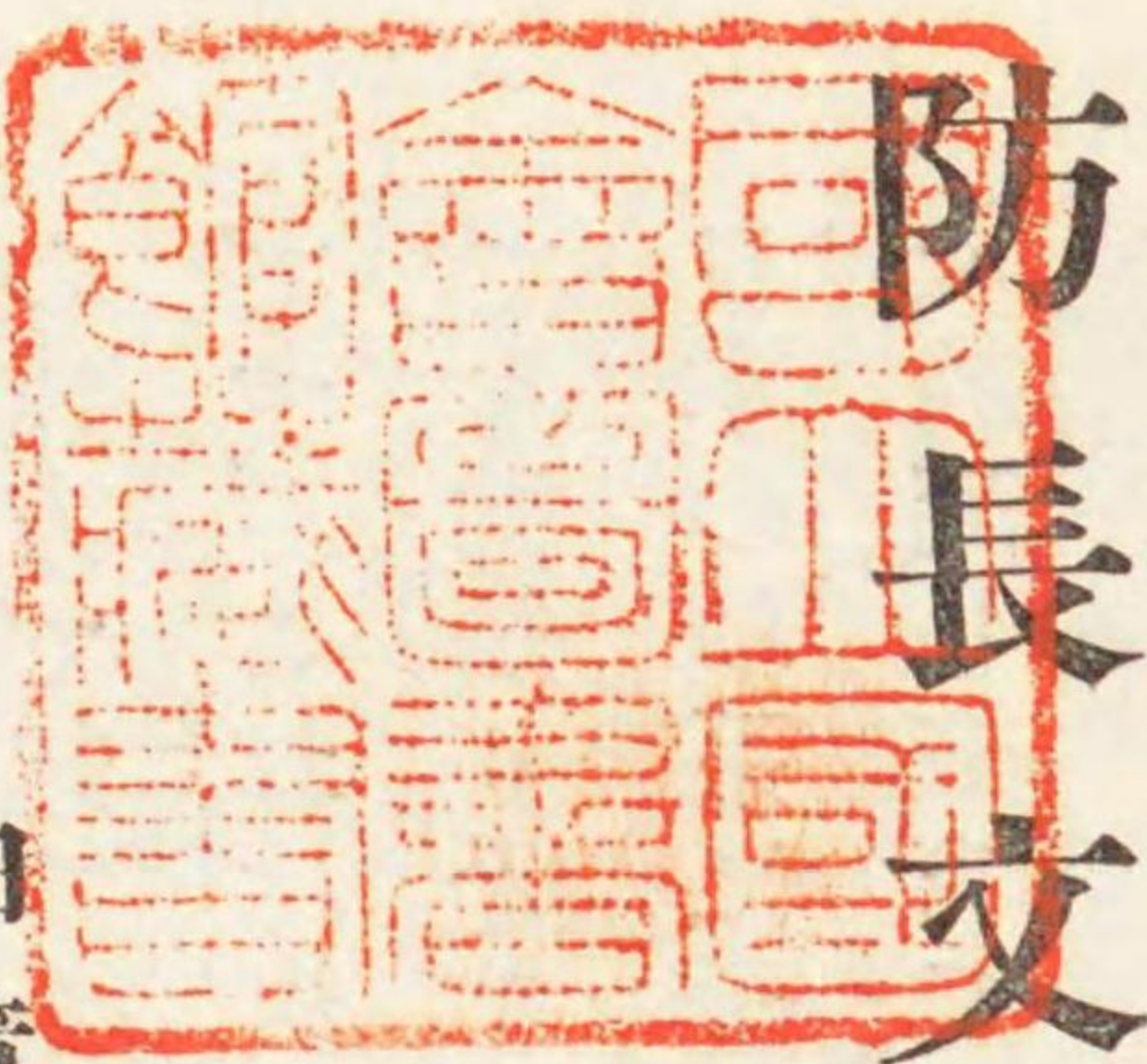
看雨閣詩稿……………一

聽秋草盧吟詠……………一七

柳外漁莊俳句草……………一五

防長文化史概略

村田峯次郎講述



甲篇 上古攝取文化の體制

昭和十四年春の頃かねて深交ある防長の親友より、君は今年八十三歳の老人であるが何時不歸の客となるか分からぬ、どうか吾輩同志のために暇乞の置土産として、思付いた昔話を聞かせて呉れぬか、いづれ君の話は明年まで續くであろう丁度明年は皇紀二千六百年と云ふ記念すべき嘉節であるから、かた／＼面白いてはなにかとの相談があつた。仍て僕は、『御勸めの次第は正に感佩したが、淺學短才加ふるに老軀衰朽一向御役には立ちませぬけれども、それで御承知下さるゝなら早速訥辯ながら拙話を始めましょう』と御挨拶したら『何でも宜しい然るべく頼む』との回答であつたから防

長文化史の概略を主題として、唯今から御話を始めることと致します。古人も甘瓜苦蒂物無_レ全美と申した通り、拙話の中には御役に立たぬことも多いかと考へますからマスクメロンも内身だけをあがつて、苦蒂は御捨てなされて下さい。左様にして御聞きなされるれば幾分なりとも御耳に残り、何かの御用に立つことも、あろうかと存ぜられます。防長の事蹟として永久に記憶すべきことは多いが、重要な事柄と思はるゝものが、次第に堙滅して今や全く忘れられたものも、決して少くない。防長人として忘れてならぬ大切な事は、別して承知して置かねばならぬ。また防長出身の人が遠い他國に出掛けて行ふた事蹟も澤山にあります。それ故に防長内で起つたことも、藩外の遠方で起つたことも、すべて防長人に關係深きことは充分に研究して置きたいものです。これは決して防長人のみに知らせるばかりでなく、折角他國他縣の人たちにまでも御知り置きを願ひたい。わが防長即ち山口縣の北方は總へて日本海に面して、裏日本の地系に續いてゐるから、朝鮮その他對海方面を経て古き昔から大陸の文化が滾々放流し來つて神代より上代に、出雲文化の傳統が、潮勢に乗じて浸潤して來た。さすれば長門の阿武郡、大津郡、豊浦郡が先づ古い話を傳へた事になつて居る。私は阿

武郡の萩で生れ大津郡の三隅に本籍を有し、四百年以來祖先の墓地を置いて居ります關係よりして、自然とこの方面に流露した古代情緒を述べたいと考へます。

静座兩眼を閉ぢて徐に防長の古史を考察すると面白い事蹟が多い。惟ふに曉天黎明まだ雲霧の全く消えやらぬころ、旅行者が「雞聲茅店月」と高吟した心地がする、其上にこの地の人々は高山の巔より曉景を俯し窺へる様なもので、山麓の低地に住む人家は、猶未だ鴉の聲をも聞かす穩に殘夢を貪つて居るのに、山上では朝暾既に雲表に輝き、天地開明いづれも清爽なる快氣分を呼吸する概がある。

さて素盞鳴尊は餘程武勇に過ぎし御方であつたが、また國土の經營には段々御功績が多かつたから後世その神靈を崇敬して諸國に神社を設くるものが多くなつた。

尊は伊弉諾尊、伊弉册尊の御子にして天照大御神の御弟である。御名の素戔。また須佐と書けるは事に進むの意にて、鳴。また男と書けるは雄々しいといふのである。出雲には須佐の地名があつて、須佐神社が鎮座されてある。

長門の北方にも、古き昔より須佐と云ふ名區がある。これも尊が對岸の大陸に御往來の砌に、御葺を繫泊せられたる緣故なりと言傳へられて居る。尊を祀る神社は長門にも周

防にも諸方に多く設けられて居る。以前はすべて祇園社と申したものであつたが、今日では八坂神社と稱する様に改められました。萩の祇園祭、山口の祇園祭、殊に京都の祇園祭は、何人も熟知せらるゝ何時も大評判で賑やかな行事として數へられて居ります。その祇園社と云ひしは、むかし平安朝時代より、寺僧が本地垂迹の説を唱へ、神佛混合であつた爲め、この神の武勇より附會し、祇園精舎の守護神として、牛頭天王と申して居つたが、今日では維新以來神佛兩部の混淆を廢し、神社正祀の復古となり、八坂神社と改稱さるゝことゝなつた。

防長でも山口と萩のみならず、仙崎の八坂神社の祭典は非常に繁昌したのです。この外にも同じ名稱の神社が、防長諸方に多數あることと考へられます。また尊の御事蹟の關係よりして、他府縣處々に同様に祀られてある。その内にも武藏大宮の氷川神社は、關東の大神にして、實に尊を敬祀して、祭典祭禮等が、頗る古式を以て、盛大に行はれて居ります。

それより大國主命も、少彥名命も、力を盡して産業開拓を勵まされ、各地の民衆は、洽く愛撫の化育を受けたものである。また對岸地より貢獻歸化したる、天日槍のみならず、

幾多民族が、わが優遇を喜びて來化したのは、洵に治國政策の良効果と申すべきであつた。その對岸大地との交通は、わが民族生業のために、幾多の福利を將來する幸運であつたが、海上を渡るには、丸木舟であつたか、筏を組んで波上に浮んだか、また巨大重量の物資を運搬するには、新たに長大の舟筏を改造し、席帆を順風に飽かせ、潮流に任かせて渡航したもので相當に苦心の迹が見へる。

勿論古事記や日本書紀また萬葉集その外に於て、思知ることが澤山ありますけれども、最も慥なりと考へらるゝ、昔の傳説や後の學者に依り、書殘された冊子の内に、往々如何にもと思當る記事が見出たされ、隨分感服すべきことがあります。

わが防長の土地は、本土關西の西端に位し、東方は關西諸國、山陽山陰の山嶽に連接して居りますが、南も北も西も三方とも海に取捲かれて、周回沿海の長さは百里である。南の方は瀬戸内海と稱して波濤は實に平穩にして海上の動作は、至極容易ですが、北方の海となれば、即ち所謂日本海であつて、冬期に當り北風の吹荒れるときは、怒濤激浪を捲揚げ、その壯觀は、詩人は洪濤の打寄する様子を形容して、雪山頽るとか、白馬天を蹴るなどゝ、吟賞して居る。大津郡の川尻岬より遠からぬ汐吹きの雄偉なる壯觀は、

都人には逆も知られぬ大風景である。朝鮮なる向地に渡るには、大津郡と阿武郡が、何處よりも一番近いのであります。昔より今日に於ても仙崎や萩の漁船が、毎日毎夜勇敢に彼地に向ひ往來して居るのでありますが、丸木舟であらうとも、筏舟であらうとも、大昔の海上に於ける唯一の航通機關であつて、民衆は之を美稱して浮寶と申して居り、出雲の某神社に古の丸木舟が、寶物として藏傳されたとの記事を読んだことがあります。また昔は仙崎の祇園社にも、丸木舟が藏められて居つたとの舊話が、嘗て山田愛山の回浦日記に見たことがある様に思ひます。

わが大帝國の古代文化は、早くも立派に開けて居つた様に考へられます。神代であるとか、何千年を隔てるとか申しても、宇宙造化の變移より考へたならば、餘り長い期間ではない。百年や千年の歲月は、僅に石火電光にして、一瞬間に消磨したものと思はれます。然らば今日より神代に遡るは、そんなに遠き昔ではありませんまい。故に造化の開展より視るときは、神代は案外に近いのではありますまいか。而して從來の學者が、神代は蒙昧の時代であり、その期間は短かゝつた様に書いて居りますけれども、決してそんな譯ではない、わが神代に於て、民族生活の上には、既に立派な文明が創造されて居り、

且つまた神代と申したのは、随分長い間のこと、考へられます。この神聖なる開化の「デヴェロップメント」を尊重して、私はたまたま壁間に『東西通萬里。上下幾千年。世業皆歸一。人生推食眠』と拙詠を題したことがある。世界の古國の興亡の跡を閲すると、わが日本帝國の神代の聖業が分かる。即ち今の古を視るは、猶ほ古の今を視るが如しと云ふ、昔の懐しい情景が追想されます。

如何に大昔の古族と雖も、苟もこの世に生活するからには、一日でも無くてならぬものは、食物である。防長も固より御同様である。凡へて天地の間に生を寄するからには、天これに食を與へ、また互ひに自から働いて、食物を得んと二六時中勉強して居る次第です。故に防長人も同く、太古よりこれがためには、御同様に奮勉したこととせう。農耕でも、漁業でも、また林産でもわが生命を保持するに必要な産物は、原野でも山林でも海中でもあらん限りの努力と發見に依り、收穫して服用したものである。これ等は、大昔より地名に残された辭の上に知られるものが少くない。

それから神代に早く知られたのは、病人に對する醫藥の療法である、自個一心の工夫を以て病氣を療治することもあるが、原野を探り山林に入りて、草木や鑛物から薬を採つ

たのも、頗る多かつた。所謂草根木皮と申したものは、決して後世に開けた醫藥ではない。古い昔から自然と感得して採用したものであります。古來多くの圖書記録、また繪畫などに、神代人種の相貌を寫したのを見ると、大抵は、幹軀長大に容貌雄偉にして、概ね敬仰すべき健強の、體格を備へて居ることが分かる。これでその常に衛生保健のため深く心を盡して居たことが知られるのです。

その時代の住宅も、天の岩戸や賤の岩屋のみならず、また草葺や柿葺の、矮屋に限られた譯ではない。向岸の大陸より傳來せる開化は、相當の進歩を印したに相違ない。朝鮮の奥の支那は、その頃は周の時代であり、また戰國時代であつたから、今日から考へると思付かぬ異彩の進歩的事蹟を遺して居るものがある。然らばこの長き尊き神代にありては、食物にも、家屋にも、衣服にも、藥方にも、優れた史實があつたにちがひありません。その外わが國即ち防長人が、古代に用ゐた武器の如きも、頗る優れた物がありましたろう。太古より防長周圍の民族が、能く外敵を防ぎ、戦へばいつでも勝利を得て、嘗て敵より辱めを受けたことのなかつたのは、いかにも大昔からの名譽で、血脈精神の依然として今日尚ほ將來永久に亡びないのは、わが神代祖先のありがたき傳統で、この

民族なればこそ、この國家なればこそと、いつも數千年の昔を感仰して已まぬ次第であります。

古事記も日本書紀も、すべて重要な古典であるから、吾等は深く尊敬を以て閲讀して居るのでありますが、太古の人類處世の始末を悉く陳述されて居る譯ではありません。漏らされたる上古の社會情態は、後人が善く考察して、恭く補足すべきである。これは古人に對して忠實なる報酬かと思はれます。神代に於ける曆法、算術また種々の工藝の如きは、あらまし知つて置きたい、研究的題目と考へられます。これ等裏日本に渡來した古代文化は、いづれも防長の地に這入つて來たでせうが、何れもその地勢と時代に於て、逐次同化の趣を窺ふことが出来ます。

神代のお話を節略して、神武天皇御代になりますと、南方又西方の文化系脈が西國九州に入り、逐次東漸した譯であります。天皇御東征に因り、瀬戸内海より舊畿内方面に向ひ諸方にて起つた物語は、如何にもその情景が察せられる。凡へての事物が清爽となつて北方の話とは異なるものが多い。

然るに北方の沿海地帯は、對岸の廣地とは日本海潮流の進勢に促され、出雲習俗の分派

を形成するものがある。この邊の説話は、迎も短い時間では遺憾ながら、前後の連絡を申述べる譯に參らぬ、この地の先住民族は、コロボツクルやアイヌではない。故に石器もなく、貝塚もなく、穴居の跡も、決して残されて居りませぬ。

近頃、土中よりの發掘物によつて、いろ／＼古い時代の沈黙した史料を、知るやうになりましたが、古い時代の防長を知るのに、なか／＼立派な證據物が現はれたのでございます。その古物には、漢土からも、蒙古からも三韓ルートを経由して來たのが多い。まさか埃及やギリシヤの物ではありませんが、印度、西藏、ペルシヤの物は、これに混入して、西方經路から來たかと思はれます。古代を探討するため、隨分古い人の墓か、何か珍らしい記念物を無闇に動かしては、大切なものを掘り當て、それを證據として研究するやうになつて居るのですが、山口縣で發見されるのは墳墓でなくて、寧ろ全く清淨な武器その外室内器具その他の珍品であります。それは西北海岸の山際の崖地、若しくは沿海の濱邊より掘出されるもので、いづれも餘程古いものです。支那の周末より秦漢の頃に至る物が、珍らしくも來て居るのではなかつたか、これは二千年、三千年を遡るものであらうと存じます。大津郡、豊浦郡邊りから現れて來る、武器の破片もあるが、

また古い時代の鐵鐙が、大津郡深川の土中より現はれ、また川尻附近の某家には、銅劍を珍藏して居ると云ふ。これは漢時代の古物であると思はれます。山田愛山の回浦日記にもこの事が載せてあつたかと存じます。又燈籠型の鐵鐙は、奈良の法隆寺に傳へられたる物と、相前後する古物です。また實に神功皇后の三韓御征討の、前か後かと考へらるゝ物が、段々出まして、如何にも珍らしい物であります。惜いかな今後この邊のことが次第に湮滅するやうになりますから、今の間に誰か學問と趣味に堪能な人が、實地に就いて詳密に詮索せられましたならば、こゝにこういふ水成岩で、こんなものがあるというて、地質學からも、防長の有史以前の御話が精く出て参りませう。又神代に關する事に於ては、神武天皇以前の面白い事蹟が、續いて現はるやうに考へます。

苟も我國の古史を読む者は、先づ神代史を學ぶがよろしい。諸神皇祖の、開闢草創の御勳績は勿論であるが、彼の國土經營の鴻圖も、實祚無窮の神勅も、三種神器の神授も、いづれも天照大御神の大聖斷に因るもので、御稜威の雄偉なことが知られる。神武天皇の大業は、悉く此大神の御聖訓でないものはない。斯く天照大御神の御偉勳は、國民の均く感謝歎美する所であるが、何人も此神の御祭日を知らぬのは何事である。伊勢では

必定例の御祭があらうが、此神は全國一億民の奉祀すべき大神である。されば政府に於て伊勢大神宮の祭典を國祭と定め、之を曆本に掲げて全國民に國旗を掲ぐることを命令せられて然るべきである。これは私の持論であるから此際一寸申上げておく。此事に就いては他日更に申述べるつもりであります。

さて彼の北畠親房は、その神皇正統記の卷頭に「大日本は、神國なり、天祖始めて基を開き、日神長く統を傳へ給ふ、我が國のみ此事あり、異朝には其の類なし。此故に神國といふなり」と申された。神代は、存外に長期間であつたから、決して太平無事のみではない。随分不逞の徒が諸所に蜂起し、騷擾の異變があつたけれども、幸に統治者の正心誠意に據り、いづれも善道に復し、良化されたものが多かつた。神武天皇の御代には皇化のさま、實に旭日天に輝き、革新開明の麗はしき光景が發展されたのである。他邦にても、この盛化に隨應せる趣のあつたのは頗る面白い。天皇の三十八年に、釋迦が生れ、また五十七年には、老子が生れた。それから皇運の進勢に準して、綏靖天皇の三十一年に孔子が生れ、垂仁天皇の二十六年には、基督が生まれました。これみなわが日出國に向へる、順化の外護とも申すべきであらう。

天武天皇の頃に、稗田安禮といふ人があつて、頗る記憶力が強く、いろ／＼古い話を覚えて居りました。それが餘程大昔の話を聞き傳へて、役に立つ話が多かつた。それで朝廷から太安麿といふ人に申付け、稗田安禮の話を、何とかして纏めて置いたらよからう早くせぬと段々判らなくなるからと命ぜられて書き記さしめられた。やつと出來上つて献上したのは、元明天皇の時でした。これが古事記と申す名前で、今日に傳はつて居りません。即ち神代より推古天皇までの事を記したものである。後また、元正天皇の御代に、舍人親王が、太安麿などと、日本書紀を撰述せられました。これは神代より持統天皇までの事を述べてある。その後には續日本記、日本後記、續日本後記、文徳實錄、三代實錄が、それ／＼出來て、この中に防長の史實が澤山記入してあります。また萬葉集の如きは、上古名家の詠歌を多く載せられ、四千首以上あるので、防長兩國に關する詠作も往々見受けられる。室鳩巢の駿臺雜話の中に、燈臺下暗しといふ題で、面白いお話があり、悟道尼といふ尼僧の詩があります。「盡日尋春不見春。芒鞋踏遍隴頭雲。歸來笑撚梅花嗅。春在枝頭已十分」と、春色を捜しに出掛けたが春景色は一向判らないといつて歸つて來たら、却つて自分の家の庭を見ると、梅の花が己によく開いて居る。春は遠方

でなくとも却つて自分の庭の梅の花で充分に見られたといふことです。吾々防長のこと
に就いても、裏日本の外來文化を、細かに關すると、足元から鳥が起つと云ふ様なこと
が多いのであります。

神代と申さば、餘程邈然として、蒙昧であつたかの様に、考へる人も多いですが、宇内
事變の推移より見るならば、案外経過の早いものであり、それほど遠き昔ではないこと
、思はれます。またその時勢は、随分風俗文化の進んで居つたものであります。そし
て神代は神代で、既に文字や文章も立派に出來て、交通便利のために、十分役立つて居
つたに相違ござりません。これは新文化の入り來つたため、新陳代謝、前者はいつとな
く漸次湮滅したのに相違ありませぬ。何とならば、この頃既に内地は相等に行届き、海
外交通はなか／＼開けて居りましたが、これは言語文字が上下に内外に、十分に開けて
居なかつたならば、迎もあれほどの力を現はして、外交や討伐を行ふことは、出來なか
つたでせう、さすがに神國なれば、神代上代を通じて、神人相睦まじく、國運ます／＼
隆昌に赴き、上下互に和らぎて、萬世一系の聖天子を奉戴し、天地と俱に窮りなき、堅
剛不磨の國體を永久に傳ふことを得たのは、實に何と云ふ幸福でありませうか。これ

わが君子國なればこそと、感喜して居る次第であります。

對岸渡來の文化の、流動せる運行に従ひ、新物資の海を越えて、不時に搬入するものが
常に絶えなかつた。縦令考證すべき文献はないにせよ、周圍前後の情勢より考へ合せた
ならば、思半に過ぐるものが多いのであります。その上代の文化は、裏日本たる日本海
の沿岸地に打寄せたので、勿論長門の北海岸に於て、何物も温室的化育を受けたことは、
決して今更討論を要せぬ筈であります。

神武天皇の御東征になりますと、一般の形勢がすっかり替りました。明年は丁度 天
皇御即位から紀元二千六百年記念といふ、寔に意義深き年で、いろ／＼な御偉蹟が調査
になり、又十分にその重大なる聖業を、後世に示すやうになるであります。其の御聖
蹟として隣りの廣島縣の方には、彼の埃宮、一多祁理宮とも申して居りますが、これ
は詮議中になつて居りまずので、何れ十分に證跡を究め、何か記念物でも出來はせぬか
と思ひます。

扱て山口縣は、どうであるかといふに、これまで書いたものはございませぬが、更に御
東征に就いては、縣内の何所かに必ず御立寄の聖跡が、あることゝ考へられます。それ

は、この御航路當時にあつては、餘程暇の取れた骨の折れたこととせう。日向の高千穂宮を御出發で、ずつと御東行になり、豊ノ國の宇沙へお立寄になり、それから筑紫の岡田宮（筑前遠賀郡山鹿港）に暫く御留りになり、岡田の宮から安藝の埃宮——（多祁理宮のちの高宮）を経て云々とあるからには、御船はどうしても穴門、周芳の海を通つて、途中何所かに御繫泊ありしに相違ない。決して筑紫から埃宮まで、泊りなしに直航は出来ぬ。然らば夜中の航行は危険なので、御船は必ずその間長防の海村或は島嶼に、御泊りありしに相違ない。若し御泊舟があつたとすれば、何とか研究して地名を知りたい。我が縣内に於ける御東征聖蹟の地名が、知れるなら、二千六百年を記念するに至極結構の事業じやと存じます。若し分らぬならば、宿題として永く研究せられたい。岡田宮から埃宮までは、あんなに遠距離であるから、休みなしに船を走らすことは、到底出来ませぬ。ですから何處か——あの周防灘の途中で幾回か御繫泊になつたに違ひない。航海業専門の人に聞きますと、如何にも拙論の通りだと申して居りました。それで土地の名前やら、また何か遺物によつて、もう少し證據立てることが出来れば、何より結構なことと思ひます。天皇は、岡田宮に一年位御逗留になり、それから埃宮においてに

なりまして、其の次には吉備の高島宮——これは高島宮といふ行宮が出来て、長くおいでになつたので、とてもお船が急には進みませんでしたから、中々早く大和までお進みになることは、出来難かつたのでありました。その間の御關係のことが、山口縣に何かあるに違ひないと思ひます。それから浪速の浦にお進みになつて、河内の方からおいでになる筈でございましたらうが、彼の長髓彦といふやうな暴れ者が出て、邪魔をするので、急にはおいでになることが出来ませぬ。それで御船で紀州の方においてになつて、紀州から大和にお入りになつたのですが、其の御東征の御道中のことを、もう少し何かによつて、お調べを願つたならば、山口縣に關係の事實が屹度出て來はせぬかと思ひます。それより 神武天皇の後ち、綏靖、安寧、懿德、孝昭、孝安、孝靈、孝元、開化の各 天皇の御代には、防長に關係のことは餘り記されて居りませぬ。併し孝靈天皇の五年に、富士山が爆出したことがあり、諸國とも非常の大震動でござりましたから、防長の方も相當震動したことと思はれます。

崇神天皇の御代には、これまで御代々の聖志を繼がせられて、やはり造船のことを諸國に命ぜられたことが、書いてございますが、この頃の朝鮮關係の話は、山口縣地方には

深い関係を以て居ります。とにかく長門の北海岸は、朝鮮には何處よりも一番近いので、通船がいつち早く到着する様です。其頃任那から貢物を奉つるやうになつてゐたのでありましたが、これらの者が直ぐに、京都へ行く譯に參らぬので、必ず長門の海岸を經由したものであります。當時日本海の航路を往來した古船は、果してどんな型式のもので通ふたのか判らぬけれども、とにかく朝鮮交通のため、頻に造船を命ぜられたことは確である。日本書記、故事類苑、工藝志料その他の諸書に、いろ／＼のことが出て居ります。垂仁天皇の頃には餘程日本の威力が強大になつて來ましたが、その往來の便路は、今も同様ですが、昔は尙更長門の海を通らないと行かれなかつたのです。

垂仁天皇の時に、大加羅の王子、都怒我阿羅斯等が歸化して來ましたが、これは穴門に來た——穴門と云ふのは長門の昔の名前です。その當時の朝鮮は、北の方に高麗といふ大きな國があつて、前の方には、西に百濟東に新羅があり、百濟の下の方にあるのが任那であります。任那は小さい國ですから、後には百濟に併合されて、つまり新羅、高麗、百濟の三國となつたてであります。その前には三韓と申して、馬韓、辨韓、辰韓といふ三つの國があつたのです。丁度新羅の所に辰韓、任那の邊に辨韓、百濟の所に馬韓

がありました。後に高句麗——高麗と申したのが、非常に大きな領土を持つて居まして、それが中々勢力が盛んになつて參りました。その距離を申しますと、長門の北海沿岸また出雲からは、新羅が一番近いものですから、新羅との關係のお話が、多くなつて居ります。新羅を相手に戦をしたとか、新羅の王子が日本に歸化したとかいふやうなことがありました。

それから垂仁天皇の時に、田道間守といふ者に言ひつけ、常世の國に行つて何か捜して來いと命せられた。田道間守は、景行天皇の時に至り、何か良い果物を持ち歸つたと云ふことでありますが、結構な香果とありますから、香りの良い果實——案外夏橙の元祖かも知れませぬ。何時の頃からか、西北海岸にあつたんだらうと思ひます。江南の橘を江北に移せば枳殼となる、江南で美味しいものも、江北に移せば、味が變はるといふのですから、常世の國（今の南洋）の方で美味しいと思つて持つて來たが、何年か経つ中には次第に中味が酸ばくなつてしまふといふこともあり得ること、随分時代が替れば長生きして居る果實ではないかと思はれます。

それで高麗（コウライ或はコマとも讀む）は後になつて高句麗と書いたので、句は句と

なるので、高句麗といふのをコクリと讀むやうになつたのであります。これは後世のことです。けれども、今日でも方言として遺つて居るのは「コクリモクリ逃げる」といふのは高句麗や蒙古の兵が敗走した、即ちそれ等の兵が敗走する有様をいつたので、これは他の所ではとんと通じませぬ。山口縣に行かなければ申しませぬ。それから「くだらぬことをいふ」「くだらぬことをする」と申しますが、これは百濟のことをいつたので、新羅の後は主として百濟から文化を輸入し、百濟が文化の取次の地になつて居りましたので、多分彼の新羅、百濟邊りの言葉には、山口縣に通ずる言葉がいくらかも残つて居るだらうと思ひます。例へば「そうけ」「そうら」といふのは、主に萩でいふ方言ですが、これは今でも朝鮮に行けば直ぐに判ります。然るに出雲で十六島と書いて「うつふるい」と讀み出雲村と書いて「あだかい」と讀むのは、どこの詞であるか、それから任那の所に韓といふ國がありました、韓の國から何々して來たといひますと、外國との交通の名前になつて居る。外國を「カラ」と云ふたのは、伽羅島から來た。カラの人カラ物などは舶來の物を指したのです。韓の字をカラと讀ましたのも、三韓交通のため、伽羅より轉化して、韓をカラと訓し、その後支那の唐朝に交通盛んになつと時には、唐をカラ

と呼び、外國をカラと云ひ、外國人を凡べて唐人トウジンと云ふことになりました。後年になつて韓は任那になつて、任那は更に百濟の中に入つてしまひましたが、或る時代には任那は日本の交通の爲には、非常な便利を與へた所なので、暫く日本府を置かれたことがあつた。

古くから一番數多く書かれて居るのは、船のことです。住吉神社のお祭を見ると、祭典の行列には必ず船を引出します。或は繪馬堂に行つて見ても、軍船漁船の額が掛つて居る。これは戦争や漁業の勝利の御祝の意味で書いてあるのであります。總べて専ら航海獎勵の爲に船の繪を掲げたものです。

大昔は、軍船も漁船も、いづれでも兩方に使はれて居りました。軍船、漁船とも各所の住吉神社に於て遺物が記念せられてありますが、特に萩は朝鮮一目と云はるゝため、濱崎の住吉神社には船の額が澤山にあり、お祭りの時に必ず船に車をつけて挽回す。彼の楠乃村の住吉神社の楠樹は、實に大きなもので、木質を鑑定する人から見たら、無論二千年以上の老木と申すてせう、案外神功皇后御手植の記念物かも知れませぬ。

それで三韓交通時代以後の、山口縣に於ける造船と造林には餘程苦心努力を盡したものと

で、今日でも山林の専門家が山口縣に行くと、造林方法が非常に善いというて居ります。これは上古よりの舊制を詳細に考へなくてはならぬ。豊浦郡に豊田村といふ所があります、そこから華山に登る。これが華山杉の名所で、下山の杉は老木が多く、その伐り倒した跡を見ると、切株の太さが殆ど八疊敷位あるといひますが、如何にも老大木の切株です。全く上古に於ける造船用の巨材を、仕立てられた山林でして、二千年か千年以前の用材が、この山から出されたものです。伊勢の神路山の杉でも古い物は千年以上、殆ど二千年位の老木が、損木拂下といふので、今日も稀に出て来るやうなことがあります。華山のもは或は神路山の物よりも古いかと思はれます。上代に於てそれ等の老木は船舶のみならず、外の建築用に使はれたのは、固より不思議ではありませぬ。その附近の天井嶽、一位嶽もすべて老木の森木で、名高い材木の産地でありました。

この林木を切出すには、利巧なことを考へたもので、海邊の山崖、島嶼或は水量多き谷川を利用して、造林伐木をしたので、すぐに高い所から、下に向けて切り卸すから、造作なく運べたものでした。崖の上から轉がし海岸に引摺り下ろし、また島山の伐木をそのまま海上に浮かして、何處へでも持つて行くのであります。山川も大川なれば、筏に

組んで流しました。後世都濃郡の笠戸島の官林などは、海上に切落すのに頗る好都合でござりました。それ故に岩國川、佐波川、厚東川、厚狭川、樫野川、吉田川、阿武川の如き、昔は皆それ／＼林木を流したものです。それで山林を育て、船を造ることが非常に上手で、これは實に神代からの物語りになつて居り、又神武天皇以來、景行天皇の頃まで、始終そのことが書いてありますが、厚狭郡の船木といふのは、あの邊が入江になつて居つて、林木が澤山生ひ立つて居る、それで船を造るため堅木良材を多く此處から伐り出されたので船木といふ名前があるのです。又萬倉といふのは空が見えぬばかりに、眞暗に鬱々として山林が繁茂して居つたからだと申して居ります。とにかく防長は大昔から造船が上手であつたと申傳へられて居ります。

そもそも大津郡の油谷灣は、廣大の港で、古より船舶が澤山輻輳した所です。この灣は大津郡の西端、また大浦とか久津、向津具とか申して、灣内には漁港に商港に便利なる津浦が多いのです。それ故に木材の外に種々の物資を貯藏したものでありますが、朝鮮方面の航行には、非常に便利な場所でした。赤間關の方は、大瀬戸、小瀬戸ともに、潮流の急なるため、風の強き時は危険でしたが、それに換へて油谷灣の方は、海門が濶大

で、繫船泊船とも、頗る平安でありました。景行天皇の時に至つて、筑紫の熊襲が反亂を起したので、天皇が九州の熊襲を御親征になりましたが、その時に彼の周芳の娑磨（今の周防の佐波）においてになり、その行在所に暫く御逗留になつたことが、日本書紀に出て居ります。これが今の大崎村宮城の杜が、その御遺蹟であつて、一の宮の玉祖神社の附近でした。最初は萬一賊徒のために、御危難があつてはいかぬといふので、佐波の方に御滞在になつて居られました。その中に、頭立つた者が歸順したり、悪い者は誅戮されたので、最早お進みになつても、決して御心配はあるまいといふので、それから天皇は筑紫の方においてになつた。それから日本武尊が熊襲征伐においてになつたのでありますが、さて日本武尊は熊襲征伐においてになつて、女装して川上梟師を御誅戮になつたのは、この時のこととあります。

斯様に、景行天皇が佐波——今の防府に暫く御駐輦になつて、それからゆつくりと、彼方においてたといふこととありますから、其の間に様々なことがあつたに違ひない、です。それから山口縣が、何か御遺蹟に記念標を設けて置くべきが當然のことだらうと思ひます。それから 成務天皇、仲哀天皇の御代に進みますと、新羅がまた、だん／＼日

本に反抗し出し、頗る穩かならぬことになりましたが、殊に當時九州には、土蜘蛛とか熊襲とかいふいろ／＼名前の附いた不逞の徒が、澤山居つたのですが、これを征伐なさるなければいけないことになりました。仲哀天皇が御親征になりましたが、仲哀天皇の御聖蹟は山口縣にちゃんと傳へられて居るので、更に誠意を表する爲に一層整理して置かなければいけないことだらうと思ひます。此上とも一層力ある敬意を彰したいと思ひます。

仲哀天皇御親征の際、穴門の國に行幸があり、豊浦の津にお泊りになつたのであるが、これは長門の長府の邊においてになつたのであります。そのあとから息長足姫命、即ち神功皇后が是非彼方へ、おいでになることになつて、やはり豊浦の津においてになつた。その際海中から、如意珠を二つお取り上げになつたといふことです。干珠の方を海に投ずれば海の潮が干く、満珠の方を投ずると、潮が満ちて敵の船が沈没するといふやうな寶珠として、これが今日でも長府の沖に見へる、干珠、満珠といふ二島の物語の起る所以でございます。その際仲哀天皇は豊浦に假宮をお造りになつてお住ひになつた。これが豊浦宮であります。その後筑紫の樞日宮においてになりましたが、こゝで天皇は崩御

遊ばされましたので、神功皇后はその御遺志をお継ぎになつて、男装をして御出征なさることになつたのであります。熊襲がいろ／＼な暴慢なことをするのも、新羅がこれを暗に援けるから、その勢を借りて熊襲が暴れるのです。それ故に熊襲を平げるには、先づ禍根たる新羅を早く討つやうにしなければいけない、といふので三韓征伐においてになつた譯でございます。それで、仲哀天皇の時に筑前の熊罥といふ、土地の相當の素封家でせうが、同勢を引連れて周芳の浦までお迎へに来て道案内をして、向ふに御進幸になつたのであります。向ふの人達も、どうも吾々共の力ではいかぬ、天皇の御親征があればそれによつて謀反人も降伏するだらうとのことで、お進みになつた譯であります。それがため防長の勇士が、奮發して従軍した者は、無論多うかつたに相違ありません。

熊襲にもいろ／＼あつて、筑紫の方面のものは筑紫の熊襲、それから肥後の球磨郡に熊襲といふ名前がありますが、あの邊も當時熊襲の居つた所であるし、薩摩も大隅も日向も熊襲が居つたので、筑前の方には筑紫の熊襲、これを征伐の爲に、穴門の引島（今の彦島）まで九州より曩に歸順した者共が、天皇をお迎へに出て、道案内をしたといふこと

とでございます。

神功皇后は、武内宿禰等をお隨へになつて三韓征伐においてになり、首尾よく何も彼も征服されてお歸りになつた。さうしてそれまで、天皇の御大喪を秘しておいでになりましたが、今度豊浦宮に皇宮もお移しになり、一旦此處で御殯殮を行はせられ、その後御本葬儀は河内國の山陵に、お遷しになつたのござります。

こゝで神功皇后の御遺業として、ありがたく記録に傳へられてあるのは、今の長門の一ノ宮、即ち住吉神社であります。これが三韓征討軍の御先導をせられた住吉の荒御魂の靈神、即ち表筒男神、中筒男神、底筒男神を祀り、戦捷を感謝あらせられて、永久に天下國家の鎮護神として、この神社を御創建になつたのであります。また翌年住吉の和魂の神を、和泉の堺に祀られました。其社格を見るに、後とから出來た和泉の方の神社は、官幣大社であるのに、前年に出來た長門のは官幣中社である。何故に前後顛倒して社格に等差があるのか。順序としたら、長門の方こそ特に勅撰の正史に於て、深く神徳を説かれてあるから、その事歴より考へても、きつと早く官幣大社として祀らるべき筈と考へます。古史の正條に載せられたる大神社に對し、かく差別錯誤があつては、如何にも

遺憾至極であります。さて神功皇后の御征伐で、新羅國王は全く降伏した。その際彼より奉呈した書面は、日本書紀に載つて居りまして、頗る面白いものですが、長いから全文を読む譯には行きませぬ、そこで一寸その概略を抜いて申ますと、

新羅國王が遙に望んで考ふ。この度日本から大兵が、將に我が國を亡ぼさんとして居る。恐懼して申すには、東に神國あり、日本といふ、また聖主あり、天皇といふ、必其の國の神兵なり、とてもわが兵を以て防ぐことはできぬ、白い旗を建て、白布で面を包み、皇船の前に降伏した、地に頭を伏して申すに、これからは、海の遠きを煩はず、毎年春と秋とに、必ず澤山の貢物を差上げます、決して間違は致しませんと、堅く誓つて申す、假令東から出る日が、西から出ますとも、阿利那禮河が逆さまに流るゝとも、また河の石が天に上つて、星にならうとも、春秋の朝覲と、貢物の献呈は必ず怠りません、もしその言を誤ることがあつたならば、天地の神祇は、屹度厳しく討罰して下さいませう。

云々と書いてある。斯様に新羅王波沙寐錦が色を失ひ降を乞ふたから、高麗、百濟の二國も、とても敵し難きを知り、「今より西蕃と稱して、朝貢を絶たぬ様にしますから、その罪を許さるゝ様に」と願出たので、それならばと御許しになりしことが、正史に見えて居ります。

乙篇 奈良平安時代を経たる文化の進勢

我が防長の地は、帝國本土の西端であつて、前回にも申す如く、長門の北部は實に裏日本の海流に浸し、纔に一葦水を隔て、朝鮮半島と相對してゐます。北方の隣地は石見出雲であります。石見は地質地形の景狀よりして、入船に便利な港灣がない。濱田の外浦は、面白い袋のやうな細長い入海でありますけれども、這入り口が窮屈で、風波の強い時には、容易に這入れませぬ。出雲の方も、大昔は地形も宜しかつたてでありました。然るが、今は地勢が變つて船の出入には、餘り便利ではありません。宍道湖の方面も、古い時代には杵築の方が、ずつと打開いて、船の出入が宜しかつたかも知れませぬが、これは相當古い時代に潰れてしまつた。彼の境港の方に廻つても、風波が荒れると、今では中々容易に入船は出來難いのです。

長門の方は、仕合せに、大津郡の油谷灣、彼處には大浦、久津、向津具、といふ浦津もあつて、漁業の盛んな所で、凡べて船舶の出入に便利な所でもあります。御承知の如く

今では軍艦が何十隻這入つて來ても、あの灣の中で勢揃ひして、すぐに沖合まで繰出すことが出来るといふ、洵に都合の良い廣大な港灣になつて居ります。それから仙崎港も湊港も船舶の出入には都合が宜しい。その先に萩がありますが、今日の市街地は、慶長以來毛利氏の城下となり、灣内の水面を埋立てられて、あの様な市街が出来ましたが、古い昔は所謂樅浦で、樅は「ツハキ」にして樅ではない、津脇と書くべきである。彼の濱脇とか津端などの地名と考合はせると能く分る筈です。あの邊は非常に緩やかな廣い入江で、船を澤山入れることが出来たといふことが古記に書遺されて居りますが、皆船舶の出入りの盛んな所でした。その外に、小畑港また須佐港なども、船舶の出入が便利であります。

さて日本海の朝鮮に近い所で、船を自由に繫泊するは、長門の外にはないのです。それで大陸西部の文化が朝鮮を経由して、どんどんこの方に這入つて來るものが多かつた爲に支那印度の南部文化があの方から、澤山に海を超えて參つたのであります。

前回到申残した一項を、ちよつと遡つて申し上げます。天照大神の岩戸入りの際、岩戸の御前に群臣歌舞して御祭をした。そのとき玉祖命が八坂瓊勾玉を作り云々、後世三種の

神器と申すのであるが、玉祖命を祀れるは周防の一ノ宮である。これが今の玉祖神社である。即ち防府の大崎村にある神社であります。彼の仲哀天皇、神功皇后の御時に、三韓征伐の戦勝祈願祭、また凱旋祝賀の感謝祭を盛に行はれたのは、正にこの玉祖神社の神前であつた。その折に神功皇后より、澤田の長に命じて、祭器を造らせられたことがあります。今でいふ佐野村の村長のやうな人でせう。それに言ひつけて、祭典その他の諸事の世話をさせた。平瓮や土鼎を作つたのが残つて居ります。

我帝國が東亞振興のため、世界平和回復のため、今や絶大の犠牲を拂つて、外地に構戦しつゝあるのは、天下内外の注視し居る所で、防長人固より戦場に奮闘し、忠烈なる多数生命を捧げ居ることは、頗る感喜欣賞の至である。それに就ても、前に申した住吉神社は外征大勝の神靈であるから、今や眞成の信念を起し、特に官幣大社に昇格せらるることとならば、神徳赫著、靈威感應して更にこの神の靈驗あらたなるものあらんと信じます。」わが防長の日本海に面する方では船掛りの都合がよいのと、航路の近距離であるために朝鮮向の往來が、一番頻繁でありました。萩の十八里沖に、見島といふ大きな島がある。能く晴れた好天氣の日には、この島から、肉眼で朝鮮が見えると、昔から申して居りま

す。又現に見た人もあるとの話ですが、私も確に見えるだらうと考へます。それは日本の諸方に、蜃氣樓が見られます。その中で、蜃氣樓が一番長い時間空中に映射するのは、佐渡の金山が一等よく見えるさうです。また越中の魚津は、蜃氣樓の名所であります。併し蜃氣樓には、餘り一天拭ふが如き青天白日の空合では、却て宜しくないかと思はれる。五月頃のドンヨリとした空氣に太陽の光線が調子能く和合したのが、絶好の光度かと思はれます。最遠距離の風景を、強度の光線で、望遠鏡に見るのも、結構であるが、寧ろ蜃氣樓の方では、空中氣層のレンズを透し、凝縮的空氣でなく、濃厚なる膨脹性の空氣を印畫紙として、これに映寫するもので遠方の景色を、太陽の強烈光線と、清朗なる空氣のレンズを借り、眼鏡を備へて凝視するも、無論結構である。これはその器械さへあれば、何時でも見られる。されど蜃氣樓式の方は、時期と天候、その他が適合せぬときは、見ることが出来ぬ。若し幸に蜃氣樓の力で見られたならば、見島から朝鮮は鮮明に見られるに相違ない。故に見島と申す名稱を考へるならば、思半に過ぐるものが多いのです。

古往今來この防長の沿海地に押寄せる潮流の力は、非常に強いもので、その潮勢に逐はれ、朝鮮より長門の沿岸に、思ふたよりも早く來られます。山口縣では古い時代から、漁船に工夫を凝らして、特別堅牢なる漁船を造つて居たのです。それで明治二十七八年の日清戦争の時に、萩附近の改良漁船數百艘を徴發して、渤海灣まで乗入れ働かせましたが、さういふ船で、朝鮮の沿岸位は何でもありません。容易なことでした。今では人力で行くのと發動機で行くのとありますが、兎に角前晚に出て行つた漁船は、翌晚にはちやんと魚類を満載して歸つて來ます。私は先般仙崎の方に参りました時に、何かと話を聞きましたら、漁夫はこゝから朝鮮に往來するのは、非常に早いといふて居りました。又海上で風波の爲に災難に遭ふた、漁夫の話を聞きますと、船が引つくり返つたとか、波にさらはれたといふ位のことでは、決して溺死するやうなことはしませぬ。引つくり返つたら、直ぐに船を元の通りに引き起して、中の潮水を掻出して、又乗つて行く。けれどもこれが幾度にもなると、非常に身體が疲労して、空腹に堪へられぬことゝなり、その爲に死ぬるのです。決して溺死ではない、空腹疲労に殺さるゝのである。此あたりの漁夫は、何んと強いものではありませんか。全く河童や魚族の様である。いま沙水を掻出せば、また直ぐに引つくり返るといふ工合に、熟練の勞役に盡果て、根氣も勢力も

なくなつて斃れるのであります。

ちよつと御話が脇道になります。紀州の熊野神社は、仁徳天皇の御時に出来たのではないかと思ひますが、古い時には出雲の熊野村に熊野神社といふのがあります。此れが朝鮮文化を持つて来た系統で、前にも申し上げましたやうに、上代は新羅も任那も百濟も皆朝貢を致して居りました。その頃にいろ／＼な織物其他のもの、また外國風の珍奇な工藝品は随分輸入して參りましたが、夫から判らないのはその頃の人の食物とか、また通貨であります。通貨といつても、支那の漢の頃からだん／＼錢貨が用ひられ、時代を追うて後に珍しい形のものが出来たり、金銀で造つたり、その外種々の貨幣が出来て用ひられることになりましたけれども、それは後の話であり、古い時代には誰も國民全體が普く使用するといふことは、到底出来ないのですから、それでは何で用を足したかいづれ物と物とを交換して、自分の入用の品を整へたのでせうが、この方の御話には面白いことが澤山あることでありませう。

防長人はやはり他の地方の者よりも早くから外國を知り、亞細亞大陸の方から来るものは、時代を追うて朝鮮を経て取入れた。これは疑ひのないことでありまして、日本海の沿岸では長門が船舶の出入に一番都合がいゝから、どうしても船舶の出入が多かつたのです。

それから後世になりました、防長地方にもいろ／＼俗説の物語があるやうですが、先づ私が不思議に思ふのは、用明天皇の御事蹟です。彼の蘇我氏が非常な横逆を極めたので、天皇は御讓位をなさつて御在位は僅か二ケ年でありました。それがどういふものですか、周防の熊毛郡の伊保庄の般若山の般若寺に關係した傳説が傳はつて居ります。彼の般若姫の供養のため毎年某月某日の夜半に、海から龍燈が揚がり、今日に至つてもその龍燈が絶えぬといふて居ります。用明天皇の御話に就ては、全く小説的のいろ／＼な物語がございますから、何處までが正確のものか、如何なる點を信じていゝか、私共には判りませぬが、委しくお調べの方から承りたいものだと思つて居ります。

龍燈といふのは、龍宮から般若山般若寺の般若姫の供養の爲に、龍神が献燈するといふことであります。これは近江の三井寺のことを書いたものにも、三井寺の龍燈献納式といつて年中行事で、湖水の中から龍燈がすつと上つて、觀世音佛前の燈籠について献上する。而してまた紀州の紀三井寺の方にも龍燈の奉献式が書いてありますが、これは和

歌浦の海から龍燈が上がるといふことです。そこで伊保庄にも龍燈が海から上つて、般若寺の境内にある老松のてつぺんに燈光が点く。それを拜んだものは眞に後生が善い、成佛して極樂にも行かれるといふので、思ひの外に彌陀淨土の願をかける俗人が集つて来る。しかしこれは不思議なことでも何でも無い、「セント、エルモ」と申して、遠洋を航行する船人は、屢々出會ふことで、不意に檣の尖端に明りが点くのですが、皆空中電氣のためであります。これが珍らしく熊毛郡の般若山にあります。用明天皇のお話に何か關係を持つかどうか、他日何かの機會に伺つて置きたいと思ひます。

推古天皇の御時は、支那では隋の時代であつて、此方から多數秀才が彼國に出掛けて行き、向ふからも珍らしい物を以て來聘し、交通が盛んでしたが、この頃來目皇子が、征新羅大將軍といふ御役目を以て、筑紫の方へ御出征になり、遂に彼方でお隠れになつて御引返しになり、周防の今の防府の桑ノ山——に御埋葬になりました。初めは桑ノ山と申したのを書體の書き違ひで、桑ノ山と讀むやうになつたこととあります。一旦こゝで御葬儀があつて、その後河内の方に御本葬が行はれたこととせうが、此方は此方であり深い由緒がありますから、今では宮内省で皇室のお墓を調べ、又記念すべき所は

皆記されてありますから、この桑ノ山について十分なお調べが出来てゐれば、洵に結構であります。調べて記念すべき大切なものならば、どうか捨て置かれませぬやうに、お調べを願ひたいと思つて居ります。

神功皇后の御時から、この佐波の邊りは、土焼即ち陶土がよいといふことで、今に至るまで盛んであります。やはりこの來目皇子の御葬儀の時に御用を命ぜられたのが、佐波の佐野の焼物師であります。さうすると焼物師は、御葬儀の御用で、正しく土棺を造つたに違ひない。山口縣には土棺或は石棺等の發掘物が、いくらもありますから、それに據ると來目皇子も必ず佐野の土師の骨折で、立派な土棺が出来て、桑ノ山に御埋葬になつたでせう。あの邊にはまだ外に土棺の遺物が出るだらうと思はれます。

其の後 孝徳天皇以後になると、防長の地方に種々珍らしいことがありまして、例へば厚狹郡と——美禰郡の境から白雉が出た、それを献上したところ、如何にも珍らしいといふので、年號を白雉と改められ、それからは穴門の國境の所には、一切鷹を放つて狩獵をしてはならぬ、鷹を放つと雉を捕つてしまふので、萬一絶やすことがあつてはいかぬといふので、厳しく禁獵の御沙汰になつたこともあります。又 天智天皇の御時に

は周防の國に、赤い龜が出たから朝廷に献上したとか、それから文武天皇の御時には、山の中から白い鹿が出たので、周防のより献上した。又その翌年には、長門から白い龜が出たから、これも珍らしいといふて、献上したといふやうなことが記されて居ります。

さて古い時には方々に、佛教が盛んに弘められたのですが、これも三韓の方面より早く渡來したものであります。

天智天皇の時代と言傳へて、周防に現存の古物があります。それは徳山や下松に近い、花岡八幡宮の境内です。昔は兩部神道といつて、大きな神社には、必ず別當と稱して僧侶が附いて居る。その寺坊である。阿伽井坊に多寶塔があります。私も見て參りましたが、その作り方は下が方形で、上が圓形に出來て、二重塔ですが、その下層は昔のまゝで古いが、上層は、後世に造り換へたものと云ふことです。天智天皇の時の建造物であるといふことになつて居りますが、如何でございますか。古代の建築物を書いた、他の著書にも載つて居りますが、若し國寶になつて居れば、それに違ひないものでせう、如何にも稀な珍らしい古塔であります。

それから下關の觀音崎にある永福寺の觀音堂、これが何時頃ですか、貞觀であるか、大同であるか、何れにしても千年以上のものですが、さういふ建物があつて、その爲に土地の名前を觀音崎といつたんじゃないかとおもひます。それからもう一つ山口の附近、矢原の川向に平井といふ所がありますが、そこにある平清水八幡宮の神殿が、千年以上の建物であるといふことが書いてありますけれども、若し珍らしいものならば、國寶となつて居る筈でせうが、昔のものが今日まで焼けないで遺つて居るかどうか、その邊はよく分りませぬ。

紀州の熊野神社は、今でも名所見物の好きな人は、大阪の方から汽車や自動車に乗つて參詣に行きますが、これと防長とは牛王寶印のことよりして關係がありますので序にお話致しますが、その熊野の牛王と云ふのは、今日からいふと甚だ分りにくい話であります。これは、行基、最澄、空海の如き名僧等はいづれも、本地垂迹の説を唱へ、日本の諸神は凡べて佛體の化身である、故に僧侶が佛教の勤仕を以て、神を護らぬと神様の權威がない、そこで別當として神に事へ、神様の御世話を請合ふて遣ると頑張り、神主の職を奪ふことになり、遂に印度佛教を附加して祈禱をする、護摩を焚く、牛王寶印を發

行して、之を何よりの御守りと信じさせた。これを熊野牛王と云ふて、古くより日本中の各地に弘めたものであります。

祈禱の御守りは、固より紀州の熊野神社から出るのであるが、護摩を焚き、神勤をしてこれを頒布するのは、全く別當僧の營業として行ふて居つた。そこでこれを牛王大明神と稱して、その札には大明神の御使として、鴉の様な飛鳥の群飛する圖を印行してある。

そこで護摩焚といつて、祈禱する時に必ず火を焚くのは、西方印度地方の宗教、また波斯の火教などから來たのでせう。

それからまた高野山の佛界は、眞言密教で繁昌を見ることゝなりました。さて、熊野の神を熊野權現即ち牛王大明神と申して、諸方に手を擴げた。それから熊野ばかりでなく畿内地方の大神社には、牛王寶印の發行を許され、また神社のみでなく、諸國の寺院にても、牛王寶印の頒布が出来ることになりました。併し地方が異るとおのづから牛王寶印にも異式を見受けることがあります。如何なることか熊野牛王を、信仰する者の多くなり、病氣でも他の災難でも吉凶禍福何でも彼でも、善いことも悪いことも、それぞれ

熊野に祈つて幸福を受くるよう、護摩の祈禱の力によつて治すといふのが、絶対の願であり、何でも切迫する災を掃ひ、また同時に幸福を祈り、吉凶禍福を右に取つたり左に捨てたり、實に牛王寶印の信仰には、金錢以上の尊敬を拂はれたものでした。

防長でも諸國と同様に、熊野の信仰が深く、凡べて熊野の牛王を頼めば、何より安全だこれに頼めば決して間違ひはないと云ふ所からして、起請誓紙を證明する神文は、必この牛王寶印の祈禱札に、裏書きをすることになつた。その起請誓紙は皆これから出たもので、彼の源義經が梶原等の讒言の爲に、頼朝から大層憎まれたので、これはたまらぬ私は決して寸毫の悪意はない、最初から誠意を盡したのであると更に牛王寶印の守符に據り起請文を作り牛王寶印に神文を裏書きし、署名血判で長文句を並べたことは、委しく源平盛衰記等に書いてあります。また土佐坊昌俊が、京都の堀河に源義經を襲撃しやうと企てた所が、武藏坊辨慶の爲に押へられて、厳しき糺問を受けた時に、彼は平蜘蛛の如く頭を伏して謝罪した。然らば誓紙を書けといふので、昌俊は七枚起請文を書きました。昔は一枚ぢや足りないからといふて七枚も書いたが、それどころか、中には十枚も百枚も、起請文を書いた人があつたが、戰國時代の偉い武家の起請誓紙は、諸書にも澤山

載つて居ります。

中にも珍らしいのは、毛利元就から、吉見正頼に宛てゝ遣はされた起請誓紙です。嗣子隆元が亡くなられて、その折嫡孫輝元がまだ弱年であるから、萬事宜しく頼むといつて依頼の爲に、認めた立派な誓紙である。それから關ヶ原前後の武將の書いた起請誓紙は、幾らも世間に残つて居ります。

江戸時代に於ても、鎌倉時代から、戦國時代の舊習に倣ひ、諸侯の藩中でそれ〴〵起請誓紙を書き、又長州に於ても、役人その他重要な職掌を持つ者は、皆書きました。これらは主として牛王寶印の裏書であります。前書といつて、前の重要な事柄をずつと書き、「右之條々相背くに於ては」と認め、次に神文として、「梵天帝釋四大天王惣而日本國中六十餘州大小神祇殊伊豆箱根兩所權現三島大明神八幡大菩薩天滿大自在天神部類眷屬神罪冥罰各可罷蒙者也」と書き、その後、別に別紙を繼ぎ、年號月日姓名を認めこれに血判または書き判をしるし、次行に先方宛名を鄭重に認めたものであります。後世は熊野ばかりでなく、諸方の社寺から牛王寶印を出しました。先日山口の善福寺から出した牛王寶印を見ました。また長門の方では萩の春日神社から、これは武人の神様として舊藩時

代に、大切に祀つたものですから、この神社の守札は、頻りに起請誓紙に用ひられた。如何に信仰の厚い牛王寶印でも紀州の熊野神社から取寄せやうといふては、日本全土何處でも急に澤山入用となつては、逆も熊野からでは到底間に合はぬ。そこで諸方の信仰高き大神社大寺院などが、官許を得て出すことになつた。それで他の社寺より出すのも、多くは牛王寶印としてありますが、中には牛王にあらずして、たゞの神社佛寺の大札を用ひてこれを牛王寶印に宛てゝ、それ〴〵代用したものと思はれます。

江戸幕府時代には、武家教育の外に民間習俗に行はれた道徳は、町家にも、農家にも嚴重に行はれ、嘘を言ふことは、人生最大の罪惡である、起請誓紙に背く者には、衆人稠坐の中に引出してその悪行意を責め付け、この寶印の處をちぎり、之を水に浮かせて吞ませると、罪惡ある者はきつと、血を吐いて死ぬると申して、牛王の御札の威力は、全く詰腹を切らせらるゝやうな氣分になつて、恐しき氣に吞まれ、血を吐いて瘞れる人が、往々あつたと聞いて居ります。

かくの如く、諸國に牛王寶印が信じられて居りましたが、これは熊野の牛王の繁昌から來たものであります。本來は熊野神社の御祈禱で護摩を焚くのですが、大昔は西部亞

細亞の火教から印度佛教に入り、火を焚いて祈ることが傳はつたのでせう。その後高野山その外眞言宗の諸寺、また後世成田の不動尊、その他諸宗の佛前にても、護摩を焚いて、威勢を加へることに致して居ります。

牛王寶印の御札は版に刷つたお守ですから威力が薄い、本統の護摩の祈禱でないといふ靈験が足らぬと申して居つたが、交通不便の熊野まで參詣するのは、迎も容易でない、それ故とても熊野大權現の本護摩には、手も足も届かぬから、いつそのこと遠方の人には、護摩の灰を此方から頒布するが宜しいとなつた。

それからして、御祈禱の護摩の灰を信仰する人々には所望に任せて、紙包にして配つた。そうなると非常に便利であるから、所望する者がなかく多い、熊野の方でも諸方に取次所を設けて、僧侶が頻に護摩の灰を賣つた。護摩の灰は、旅人の間に大評判をする様になつたので、熊野の坊主や比丘尼が護摩の灰を賣りに出て來るのみでなく、東海道路筋では無頼の雲助などが往來の旅人を捕へて、護摩の灰を無闇に押賣をする。中には不正の無頼漢は、竈の中の灰をかき集めて、それを包み、これが有難き護摩の灰なりと押賣をして、旅人の懷中を脅かす者が少くなかつた。發源地は、もと紀州の熊野でありま

すけれども、それから次第に遠く諸方に傳はつて、防長方面にも無論やつて來たものである。況や牛王寶印となりては、防長の諸社寺にて複製を許され、これこそ大切なる起請文に、なくてはならぬ寶印ですから、鄭重に作られたのであります。

文武天皇の頃から、周防でも、長門でも、鑛産の採掘が餘程盛んになつて居ります。周防の國から銅、また長門の國からも銅や鐵を掘出して献上したことが、たしかに古史に書いてあります。無論他の地方からも澤山出ましたらう。元明天皇の和銅年中に、武藏の國から銅を掘つて献上したので、これを御祝しになつて年號を、和銅と改められたといふことは有名な話であります。和銅年中に銅で通貨を造られ、それに、和銅開珍と申しました。珍とは寶、また寶と書きたる寶の上のウと下の貝を省き中の珍を取つたのであるのに、いつよりかこれを珍と讀み誤り、珍とすべきを、珍と讀む學者が出て、今日でも大切な書類に開珍としてある誤字を氣附かぬのは氣の毒至極であります。これは珍にあらず、寶の字から來た珍の間違つたのであるから、銅貨の表面にある文字は、全くたからと云ふ意味なるに因り、和銅開珍と承知して下さい。近來諸方面の新しい著書に幾つもの誤謬がありますから、特に申上げて置きます。

さて聖武天皇の天平年中に、大和の奈良の東大寺に、金銅丈六の盧遮那佛が出来ました。今日彼の大佛殿に坐つて居られる大佛がそれである。この時に防長の諸方から、大佛殿建立のために種々御用を務め、後には周防國に、東大寺の寺領までも宛行はれ、中々因縁が深いのであります。

それから萬葉集には、周防や長門に關係を持つ和歌が、澤山載つて居ります。柿本人麿は、歌聖と稱せられる程の高名な人ですが、この人は石見介に任官して、大和國から石見國に參り、勤めてゐたといふのです。衆人の崇敬を以て高津に人丸祠がありますが、同人は此地に參つたものではないとのこと。また長門の大津郡の、人丸峠にも人丸神社があります。これも學者の説によると、やはり長門に來たことはない。昔から歌人は居ながら名所を知ると申す如く、人麿も長門の油谷灣の向津具あたりは頗る風景に富む、その評判はかね／＼聞いて居りましたので、

向津具の奥の入江のさぶなみに、のりかくあまの袖もぬれつゝ

の作歌が傳へられ有名であります。この歌が大に喜ばれたので、彼の尤も景色の勝れたる高地に、人丸神社を設け、その地を人丸峠と呼び、今以て文人、墨客などが絶えず、

賞遊して特に名高き名所となつて居ります。

それから後人が、更にその地の風景を稱揚するため、彼の俳人の大家、松尾芭蕉の

によき／＼と帆柱さむき入江かな

の佳句を、石に彫り付け、社畔に建て、その名所をたゞへて居ります。

聖武天皇の天平時代には、諸國に國分寺が出来て、長門にも周防にも設けられたのであります。長門の國分寺は、今日ではもとの所に跡方が残つて居りませぬ。更に下關の方に一寺があつてその跡目を繼いでゐるといふことですが、周防の方は、宮市に立派に國分寺といふ建物が存在して、國分寺の舊物も多少残つてゐることと思ひます。

その後、清和天皇の頃になつて、方々に四王寺といふ寺が出来ました。その四王寺のことは、私は詳に存じませぬが、山口の奥の長野といふ所に、頗る大きな文字で、何か佛道の方に關係ある五六字を書いた石碑が立つてゐる。それは大石だからどうも遠方に抱へて參る譯には行きませぬが、頗る名物だと言傳へて居ります。

前に申上げた通り、神武天皇御東征の御船が瀬戸内海の防長沖を御通りになつたことは、間違ひありません。その後、様々な人物が、支那とか朝鮮とか印度とかへ行く時には、

いづれも難波の浦から船が出て、瀬戸内海を通るときは、固より防長領内の海を通らなければ行かれませぬから、いろ／＼の出来事があつたらうと思ひます。彼の宮市の松崎神社は菅原道實を祀つたものですが、道眞が九州の彼の太宰府に貶謫になつた時分に、その船が防府の鞠府の濱に泊つたと云ふ、これには古來學者の疑問がありますけれども、私は道眞の乗船は繫留されたに相違あるまいと思ひます。十分な遺蹟として記念すべき文書は判らないかも知れませぬけれども、船は無論此所を通らなければ、九州へは行かれぬのです。航程が長距離なるが故に、この邊で一休みしなければ行かれなかつたと思はれます。

それから室積にまゐりますと、普賢寺に性空上人の石碑が建つて居ります。又平判官康頼は平家を亡ぼさんとして謀反を企てたが、その罪露顯して鬼界ヶ島に流され、後ち赦免になつて、都に歸る途中室積に立寄り、普賢寺に禮參りをした。性空の石碑は、山田原。欽の撰文で、康頼の石碑は、山根華陽の撰文であります。

延喜の頃には、いろ／＼な産物や貢物が諸國から出て居ります。延喜式を見ると、長門の物も段々として出て居りますが、あれを見ても當時産物が盛んに澤山出されたものと思は

れます。殊に上古より、あの邊で盛んだつたのは牧畜です。今でも地名にだん／＼残つて居ります。美禰郡の眞木は牧で牧場であつた。瀬戸内海に馬島といふ所があり、その他馬に關係あるやうな名前が、豊浦郡、大津郡、美禰郡邊りに残つて居ります。又牛の方は、瀬戸内海に牛島といふ島があります。豊浦郡の特牛（こつとい）また肥中（牝牛の草書）角島といふ地名も残つて居ります。これは牛馬その他の牧業が盛んであつた時の名残りでございませう。前にも申しましたやうに、豊浦大津の濱邊からは、今でも金屬類の武器の破片が、いくらも土中から掘出されます。これにて昔の戦争の跡も偲ばれますが、また、金銀銅鐵の如きものも可なりに産出したのではないかと考へられます。この頃、阿川から金を採掘する様子ですが、これはむかし慶長寛永時代に、採掘したものの、残餘であります。毛利家の古記録に、阿川金を貯藏されたことが書いてある。三百年も前に、どれ位の分量か判らないが、たしかに黄金が出た。

又一ノ坂方面でも古い時分に銀が出た。一ノ坂の天又銀と云ふことがありますから、古い時分に幾分用をなす程度の金や銀が出たでせう。あゝいふ大戦の時代が永く續いたので遂に金銀はおろか、銅鐵の如きも影を潜めてしまつたのでありますが、今日でもその

面影は、美禰郡の長登に、山の縁に銅屑鐵屑の土手を築いてありますが、あれが多年掘り捨てられたかな層で、自然に残つて土手と成つたものでありますから、それを考へると、古い時分には餘程盛んに金屬が採掘されたことが判ります。

さて昔は、蘇我氏横暴のため、用明天皇の御難儀をなされた御話もありますが、それから藤原氏の横暴を極めた時に、花山天皇が、御難儀をなされ、僅に二年の御在位で、早くも御讓位になつた。これは藤原氏がその血統から進めた中宮即ち皇后宮の御腹の御子様をお位にお即かせたいばかりに、その爲め花山天皇は早くも御退位になり、京都の近所の花山寺に御落飾になつた。それが發端となつて、佛道に入らせられた。さうすると政治の方に御關係はないといふことになるから、藤原氏は我儘を増長し、それならば何所へでも、佛道の修業にお歩きになつても宜しうございませう、といふことにしてしまつたのです。そこで播州の書寫山に御登りになり、性空上人について御修業になつた。この性空上人は周防の室積の普賢寺にも住職をした有名な坊さんです。

その後花山院は、御巡錫の後、終に長門の美禰郡の伊佐の櫻山の南難波羅密寺即ち後の南原寺に御入りになりました。この所に何年も御隱遁あらせられ、遂にこの地で崩御

あらせられた次第と承つて居ります。それで今日櫻山に行つて見ますと、土地の人はその御事跡に非常の尊敬を捧げ、こゝが御陵であらうといふその山の下を通る時は、必ず數十間も前から履物をぬいで、跣足になつて腰をかゝめて歩く。そいふことで誰いふとなしに、數百年間全く花山天皇の御陵であると、固く信じ切つて居ります。その下の所に當時扈從いたした十四人の者の墓石があります。これは如何にも古めかしい石の五輪塔で、草の中に埋められて居りますが、この花山天皇の御事跡は、宮内省に十分の御詮議を願つて、果して此處が當時御埋葬になつた最初の御陵であるなれば、速に崇敬の手續きを執つて鄭重に整理せねばならぬとおもひます。それから又右の扈從の人々の墳墓こそは、縣廳にも内務省にも、文部省にもそれぞれ相談をして、果してどういふものであるか、一度内部を調査して見なければ判らないから、土中を鄭重に調査して、重要な遺物が存して居りますれば、十分に研究し、確實安全の手續を取つて跡を保存するやうなことにしたらよからう。宮内省では花山天皇の御尊骸は、ずっと前に京都の紙屋川の御陵に移したから、今は何も跡に残らぬといつて居るのですけれども、初めが櫻山で、後に紙屋川にお移りになる迄は、屹度こゝにおいてになつたに違ひない、さ

うすれば何か後世に記念すべきものが残されて居るかも知れませぬから、さういふものを始末して置いたらどうかと思ひます。

それからこれに陪從して來た陰陽師の話であります。私はこの陰陽師の事蹟を研究したら面白い話があるだらうと思ひます。花山天皇が甚だ畏れ多いことですが、草鞋や菅笠で御巡錫になり、御供の中にはかねて玉體御養生のことを氣遣ひ、宮中より陰陽寮の陰陽師が數人附いて來た。この陰陽師が祈禱をして、運勢を神に祈願し、また醫藥を作つて、病を療治することをも務めた。この山中の御旅行であつたから、天皇の御不例を御療治するため、種々の御藥を差上げ、また時には祈禱の力を以て、御惱を扱つたものである。これが陰陽師また陰陽（おんによう）と略稱して、後世は全く服藥を作ることのみとなつた。これ等の人々は、悉くこの地に居残りて永住し、遂に戰國時代また藩政時代を経て、一般大衆と交際を絶ち、賣藥を以て榮ゆる別種の生涯となつた。陰陽はもと朝廷直參の種族である、決して武家の家來ではないと、威張つてゐたから、世間から嫌はれ此方からも遠ざけたてせうが、何か南原寺の古い物を御覽になれば判ります。もと大内氏からも、毛利氏からも相當に寺祿を與へてありましたけれども、武家の力が次

第に強くなつたので、陰陽師の勢は衰へて急に縮まつた。これから後は一生懸命で、農作製藥等に力を盡し特に賣藥を以て伊佐の陰陽の名を廣めることゝなりました。伊佐の賣藥の評判は、全國に知られ、高名になつたのであります。越中富山の賣藥の話をお聞きますと、その置き藥の方法その外の事が、どうも伊佐の方に似て居るらしい。伊佐の方が時代が古くて製藥法、賣藥法が伊佐の方から傳授したやうな風に見える。第一に置藥の方法ですが、古い時の交通不便の時代、毎年藥をたゞ置いて、翌年同じ頃に廻つて、前の藥の代金を受取るやうにして、古い殘品を新しいものと取換へて廻る。これは伊佐の古代の遣り方であつたらしい。富山の藥は御承知のやうに元祿時代に初められたが、伊佐は戰國時代を遡り遠く八百年も前から、始められたとの話ですから餘程古いのです。それから、外郎と言ふ名物があります。これは山口、小田原、長崎等に知られて居りますが、これも昔は藥でしたが、後には菓子となりました。山口御堀に名高いのも、元は藥でした。小田原のは北條氏の時に、支那の歸化人が傳へたもので、江戸では菓子でありました。徳川時代に江戸の町に賣られたのは藥もあり、また菓子もありました。小田原の方の藥の外郎も弘められてありました。昔は將軍より大名に賜はつた

が、これは菓子でありました。世間一般に賣られるのは、昔から薬でありました。とにかく山口の外郎は、戦国時代より今日まで引續き繁昌して居るのでございます。山口の外郎はむかしは薬であつたが、後世全く菓子と變り、今日に繁昌して居ります。東海道の名所圖繪や、外の書に知られた通り、昔ある時に旅客が、小田原に泊つて、旅館の番頭に命じ、自分は外郎が欲しいから求めて来いといつて取りにやつたが、迎も臭くて喰はれない。これは變であるぞ、全く薬の匂ひがするといつたそうですが、それもその筈です、例の八ツ棟造りの外郎屋藤右衛門と云ふ有名な薬屋があつて、その薬で全く薬と菓子との間違であつた。この外郎屋は昔から薬屋で、透頂香(とんちんかん)と書いてあります。それから後は、すべて物の間違ふことに對して、透頂香或は頓珍漢と書くことになりました。

兎に角に伊佐の薬は、餘程古いので、今日でもあの方面の人が、賣薬の方法に引續き、懸命に努力を盡し良法を以て營業したならば、富山の如く繁昌したてでありませうに、現今では如何にも衰微して、何とも残念至極でござります。今でも田舎で薬を賣つて、非常に繁昌するのが諸方に段々あります。江州彦根の附近にある、某薬屋の如きは、舊式の賣薬としては、立派に營業して、今に能く繁昌して居ります。また東京附近では、野州高根澤の宇津權右衛門の救命丸なんかは田舎にありながら、今日の時代に、非常に繁昌をして居る。むかし、花山天皇の御威徳を仰いだ、伊佐の陰陽の子孫が、若し明治、大正、昭和と引續き今日まで、製薬を止めなかつたならば、きつと全國に廣まり、相當に外國にまでも賣出して居ることゝ考へられますが、如何に時運とは云へ、現に廢業して居るのは、如何にも惜しいことと存じます。

丙篇 中世生産業の開展

上古の防長人は如何なる言語で對話したか、如何なる文章を以て、互に意見を通報したか、若しこれが知れたなれば、昔の事も今日餘程知られるでせう。中古の「ヲ」點のみてない、彼の菅原點、清原點の訓詁讀法も、今では已に分りかねるではないか。況や二千年以前に遡ると、言語文章とも到底文献の徴すべき資料はないが、たとひ全貌にあらずとも、多少の側面片鱗を窺ひ得たならば、そこに古文化の足跡が現はれるであろうとおもひます。

歴史家の古代を語るもの、神武天皇即位紀元前、また耶蘇降世紀元前と申して居るが、これは決して分らぬ。日本でも西洋でも、紀元後ならば年次が書傳へてありますから明瞭と言はるゝであらうが、紀元前となりては、何を目當に何年と數へてあるか、頗る不審の話ではないか。右に申す如く言語も文章も、今日からは全くわからぬ、上古にありてその史實のことを、あれは紀元前の何年にあつたと、はつきり記してあるものは、そ

もく、何を證據に計算したのか、更に信憑し難きことと考へる外はない。われ等防長人が、古史を研究する上に、最も注意すべきものは、右の紀元前と云ふことを深く用心せねばならぬ。これは古今東西の史學に疑惑を起すであろう。單に紀元前と云ふは妨なきも、それを明かに紀元前何年と書いてあるのは、困つたことではありませんか。

前にも一寸申しましたが、支那に遣唐使が參るとか、又學者、僧侶、醫者、商人、藝術家など、それ／＼支那の本土を指して、學問技術、その他すべての研究のために行つた人が陸續と絶えなかつた。その往來の船は必ず防長の島々海岸等に立寄つて行かぬものはなかつた。また航海者は安全の港灣と見たら、屹度船舶を繫泊して、風波を避け汐時を待つたに相違ない。現に今日航海に慣れた専門の人に聞きましても、必ず此方より海外また遠洋に渡る船舶は、何れも防長の要港に寄つたに違ひない。無論當時の舊話や品物などが、たしかに防長の内に幾分か残つて居りますが、只今の俵山の能滿寺の如きがそれです。今日いろ／＼の寶物が保存されて居りますが、その中には餘程舊いものが大分残されてあるやうです。何も無言の物品ではありませんが、みな空海その他の人の將來し

た、置土産が多數にございます。

舊い時には、蘇我氏の權力が盛んで、頻に朝威を冒して横暴を極めたが、その後は藤原氏の世となり、藤原派の權力者は、長く上下に對して不遜の行爲が多うかつた。それから子孫の繁榮のために、諸方に領地を與へ、莊園と申して居つた。それがずつと全國に擴張されて居りましたから、防長でも相當土地を占領されて居たに違ひありません。その内に、武家が起るやうになりました、朝廷の門閥家や、政治家が、頻に權勢を爭ふと何時でも、やはり兵力がなければ、相方對抗することが出来ませんから、諸方の寺院までが、武家に倣ふて雜兵を養ひ、寺領を護衛することゝなりました。斯く武力競争のため源平武士が出来て、互ひに覇を爭ふやうになりましたが、これは元から皆權勢擴充のためなのですから、無論政治のため權力を爭ふ喧嘩も起りまして、甚しきに至つては、宗教道德を蔑視したる僧侶などが寺院に武人を養ひ置き、僧兵と稱して、奈良の興福寺や、比叡山の延曆寺の僧侶が本分を忘れ、武器を携へて馬鹿けた戰爭を始めました。元來、そんなに坊主が澤山あるわけはありませんから、寺院の運動で、方々から浪人者やら、野武士やら武藝の心得ある者を、頻に雇入れて宗旨争を致しました。道德を守り、

教法を説くのが本職でありながら、恣に兵隊を養つて戦争をすることになつた。防長の土地は、洵に有難いことには、奈良とか京都とかいふ、中央政權から遠く離れて居りまするし、又後世鎌倉以後の武家政治の喧しい頃にも、それと遠く離れて居りましたので、畿内地方の都會ほどに、禍を蒙ることが少うございました。そのかはり九州長崎の方面には、近くて便利でありまして、外來文化の都合の能いことはありましたが、時には外寇やら外教やらが來て、民族を悩ましたことがありました。しかし朝鮮支那に航通の便利が多いので、大陸への通商であるとか、殖産であるとか、早くから便益のことが記されてあります。

私共常に切望して居るものは、精細なる地圖である。日本全圖も世界全圖も悉く、必要ですが、直接入用なのは、防長の地圖です。昔は繪圖方の役員に作らせた着色地圖、また例の有馬喜三太の土圖の如きは頗る結構である。又折り疊みの圖もあるが、二枚折屏風の立地圖もある、なかなか詳密な、善い防長圖があつた。然るに今日の新地圖としては、何が宜しいか、防長地圖の好いのはないか、御知らせ下さる様に願いたい。

中國方面の國道として山陰道山陽道があり、この道筋は誰でも知つて居りますが、別に

山間道踏も今日はつきり残つて居ります。平安朝の末頃から、山間道路が非常に役立つて、これが後の戰國時代の、物資輸送の役にも立ちましたし、又産業開發のためにも便利でございました。今はこの山間をバスが通つて居りますが、馬の鬣のやうな所をずつと貫通して居ります。産業用また軍時用として、山間部落を連結する絶好の便道であります。これは長門、周防から背骨を傳つて、隣の廣島縣の方に行く山中の道路で、その筋には、山代とか鹿野とか、徳地とか、その他幾多の山間の名部落があつて、今日でも相當に繁昌して居ります。今は自動車が通つて居ります。

近世美禰郡の大嶺の無煙炭が發見されて後には、大變に繁昌して來たものですが、無煙炭の話もずっと古い時から、山家の口碑に傳はつて居ります。何時頃からさういふものを、使用したか分りませんが、むかし美禰郡の於福の山の峠を越える時、茶店に休むと、茶店の婆さんが、お茶を上げませうといつて、背戸の裏山から何か黒いかたまりを拾つて來て、それを茶風爐に入れて茶を湧かしてくれたといふことを、老人に聞いて居りましたが、これが即ち無煙炭であります。彼の越後の七不思議のお話に、圍爐裏の隅に竹の筒を突込んで、それから天然瓦斯を使つて茶を沸かすといふことでしたが、今日

はそれがだん／＼世の中に知られるやうになり、文明の進歩のために、使ひ方も非常によくなつて、繁昌するやうになつて來ました。

それからまた美禰郡からも、阿武郡の奥の方からも鐵鑛を掘出したり、銅鑛を掘出したことも舊くから云はれて居りました。又燒物にする陶土を取るのでも、千年前に長州の南方から燒物を朝廷に貢物として、納めたことが史上に記してありますが、なか／＼鑛産物も良い物が出たわけでございます。

今日は小野田にセメントが出來ます。又明治の中頃ガラス會社の分工場を起して、あの邊で頻に、ガラスを造つたことがございましたが、これは嘉永年間に山口から阿武郡に通ずる宮野の奥から、原料を取つて、萩の南園で硝子器を上手に造つたことがあります。これは當時江戸から宇都宮留次郎といふ工人を連來り造られたのでござりました。

この硝子器の製造は、實に米國から、ベルリの來ぬ前でした。また古い時から藏目喜櫻郷からは、銅鑛その他の良い金屬が盛んに採掘されました。

戰國時代には、周防の方面で刀劍の製作が盛んでした。これは二王と稱して名工が、長く數所に分れて繁昌して居りました。さて岡山縣備前の長船が、舊い時からの刀劍の職人の上手なものが多く居りましたが、その長船の附近と山口小郡邊の模様がよく似て居ります。

長船は作州或は伯州の鐵地金即ち沙鐵を、東大川即ち西大寺川から受入れて、長船の鍛工に供したのであります。防長の鐵鑛は奥地即ち阿武郡、美禰郡より來るものを榎野川また美禰郡より流出する川筋を筏下して、吉敷、小郡方面の二王の鍛工場に送つて居りました。又美禰郡の秋吉から秋吉川が流れ、厚狹郡に入れば厚東川となつて居りますが、その兩方の川流の便を得て、工場の仕事をやらせたものでした。

榎野川は、舊い時代は黒川、平井から海岸までよく船を通じたのですが、今は船は下だりません。もとは鑛業の原料を、あの山奥から取出して筏や船で川を下だし、昔はこの川筋の部落で刀劍工が繁昌をしたものであります。

それから外の武家領内では、大抵戰爭を繰返してゐた間に、防長の地は寧ろ戰國氣分を他に轉嫁して、頻に拓地産業のために努力して居りましたから、決して住民が生活上に苦しめられたやうなことはない。

今でも防府の中關は舊式の鹽田地としては、日本で一番大きな面積になつて居りますが

前にも申ました様に、大昔の 崇神天皇、景行天皇の御時代から防府附近の、鹽を作る繁昌のことが書遺されて居ります。又毛利氏時代になつて、特産物としては、鹽の外に紙が出来ました。紙は今でも方々に用ひられて居りますが、前には大變に繁昌をして、紙の原料に依つて普通の紙ともなり、織物にもなり、また種々の用品に使はれて居つたものですから、紙を作ることは早くから防長には繁昌して居りました。それだから山代の奥に参りますと、紙祖と云ふ地名があり、紙祖神社と申す神社もある。紙を以て納税に充てたり、朝廷幕府への献上物にも致して居りました。

それから珍しいものは、美禰郡の秋吉の大理石です。これは舊い時から使用されたのでせうが、今日は秋吉の大理石こそ、日本第一の良質であると、賞評されて居ります。それがため東京にある帝國議會の、建物の内部には、多く秋吉の大理石が使はれて居りますが、洵に立派なものであります。

秋吉から伊佐の方にかけて、通つて参りますと、家の廻りを大理石の石垣で、ずつと築いたのを見受けます。これは他の地方にはとても見ることの出来ぬ光景だと思ひます。實に贅澤な話で、大理石は迎も容易に得られぬものであります。然るにこの邊は、彼

の秋吉の大理石の細工をするので。そのかけ屑の捨てられた廢物、三角にも四角にも碎けて不用なものを集めて、それを石垣の中に混ぜて築いてあります。向ふでは捨てられたものを活かして使つてゐるのですが、遠方から行つた人は一見して非常に驚くばかりです。丁度彼の木曾の山中に行きますと、小さな物置小屋でも便所でもすべて、檜で普請をして居ります。便所を拵へるのに、檜を使ふなどといふことは、贅澤にも程があると思ひますけれど、木曾の山中では他の木材を使へば費用が高くなる、却つて遠くからもつて來なければならぬが、檜の使ひ屑ならば、その土地全面が皆檜を植えてゐるのですから、製材の切り屑が澤山あるので、決して贅澤ではありません。美禰郡の大理石も、それと同様の譯でござります。

山口縣の地名に且といふのが諸方にありますが、昔は團の字を書いて居りました。これは舊い時の制度で、軍團を置かれたその團兵が方々に配置されて居つた名残で、團といへば團兵の置かれた所だといふ意味でせう。それで三田尻の附近に大海の且、岐波の且、船木の且、沖の且、大津の且、通村の且、その外にも且といふ地名が澤山ありますが、又人の苗字にも團また且といふのが、幾らもあります。

それから且即ち團の附近には、日の山と申すのがある。これは、もと火の山として、昔の烽火燧火の名残です。みな團兵の用を爲した所です。近代は火を日に改め、すべて日の山と書きます。岐波の日の山、下關の日の山、その外どこの日の山といふて、諸方に日の山の名がありますが、これは古代の信號所で火の山でありました。

火を燃やして遠方に合圖をするのは、設備に手間取るので急ぐ時はこまる。そこで海岸筋は昔から旗を振つて、旗信號とすることになつて居ります。白い布を出して、どういふ風に振つたら何の印だ、赤い布を大きく上げたら何の合圖だといふやうに、五色の旗に依つて知らせる信號となりました。これは關東の方でも安政の時に、米國人が來て、幕府との條約を結ぶ話が迫つて來て、愈々條約の調印が濟んだならば、神奈川に居る米國領事に速く知らせてくれといふので、その時に旗信號をやりました。旗をこちらで上げると、その信號を受けて、それから向ふはその旗の合圖を取次いで、先方に知らせるといふ方法で、終ひにそれを神奈川で受けましたが、江戸から神奈川まで僅に二分間で、知らせることが出來たと、書いてございます。

それから私ども子供の時から、防長に於てよく聞いて面白いと思つて居たのは、鹿島の事觸です。これが防長の國內に澤山やつて來たものであります。これは百科辭典等を御覽になれば、一通りの解釋は出て居りますが、常陸の鹿島大明神の御神託で、毎年世間の吉凶其の他種々の事柄を豫報するために、全國に社人を廻はらせたもので、決して新しくはありません。

防長の方でも古來言傳へに、何か人がわけの分らぬことを長くしゃべると、さあ鹿島の事觸が來たぞといひます。鹿島の事觸は翌年の農作が、豊稔とか凶作とかいふやうなことを始めとし、その他人世の禍福を占ひらしく觸れて歩くものでございます。中には書いたものをお守りのやうにして持つて歩くものもあります。後世になると、幕府の穩密の手傳ひに使はれ、諸方の事情を探偵すべく政治探偵にも使はれ、兎に角鹿島の事觸といふことが、舊い時分から全國に涉つて知られて居りました。

それからまた、曆といふものは、昔も今もどんな家でも、一年中必要なものでありますから、伊勢曆、伊豆の三鳥曆、東北地方には南部の繪曆がある。伊勢の曆は昔の通り、今までも全國に頒布されて居ります。繪曆は面白い思付きて、字を讀み得ぬ人のために、字でなく繪にして分るやうな曆を、一枚摺りにして柱や壁に張付けるやうに刷物に

して配つたものでございます。

この外には、花曆、農家曆、航海曆、佛曆、食曆など、それ／＼の職業に用ゐるために、便利な曆が作られて居たのであります。明治の初に、從來の太陰曆を廢して、太陽曆を用ゐられてから、頻に舊い歴史上重要な記日を太陽曆に換算して書かれ大切の事蹟を混亂することがあります。これは洵に誤解を招き易い氣遣はしいものです。數學の専門家に尋ねましたら、曆日の算法には必時刻の端數が残る。決して割切れるものでないと申します。必多少の喰違ひが出来る筈じやと思ひます。曆は推古天皇以來いろ／＼の曆が用ひられて居りまして、元嘉曆、儀鳳曆、大衍曆、五紀曆、宣明曆、貞享曆、寶曆曆、寛政曆、天保曆、それから明治五年の冬になつて、西洋の太陽曆に變つたのでありますけれども、一寸私ども氣のついただけでも、十遍程曆を替へられてゐるのですが、これがどれほど日々の差が出来るものか、太陽曆の算法でも一年三百六十五日といふやうなもの、最後がきちつと割りきれて安心するやうに行かずに、何か少し残るやうなことになるかと思ひます。百年も二百年も経てば必だん／＼に差が大きくなる譯ですが、何しろ最初は支那から傳はつた曆法に依つて、それを用ゐることになり、後々は

日本の學者の力に寄つて作つて用ひられることになつてゐるでせうが、東西南北の遠近に依り、きつと差異が出来ることかと考へられます。よしや陰陽兩曆換算と申しても、奈良、平安、鎌倉などそれ／＼の時代の曆から換算したのと、江戸時代の曆から換算したのとは、その相違は大變なものです。今日でも兩曆換算のために種々の疑惑を生ずることがあつて、随分困ることがござります。

こゝに一例を擧げて申さうならば、明治天皇の御誕辰は、嘉永五年の九月二十二日であるが、換算して十一月三日とせられ、御在世中は、十一月三日を眞個の御當り日と定め、全國小學校の修學兒童は、明治天皇の御降誕日は正に十一月三日と考へ、そこで明治節また明治神宮の祭日など、これは十一月三日で、實に天皇の御降誕日と思ふものが多い。それ故にもはや九月二十二日は、殆ど忘れられて居る。更にまた孝明天皇の御話を申うさうならば、慶應二年十二月二十五日の崩御であるが、それを一月三十日と改めてある、もし之に年號を書いたらどうなるか。往々政府公刊の書籍に、慶應三年一月三十日と書いてある。併し崩御は正に慶應二年であるから、慶應三年には、既に御在世ではない。慥に右二年の十二月二十五日である。明治天皇の御降誕も、孝明天皇の崩

御も換算のために、間違を起しますから、矢張もとの様にして置き、換算せぬのが安全であります。

室町時代より東山時代に至る、即ち應永頃より文明頃までの間、山口地方は、學藝技術がなかなか奨励されて居つた。美術的工藝の鑒賞されて好評を残したものは少くない。防長内には絹織物も綿織物も盛んに産出されたが、就中錦繡の機織は上手に出来て、大内。錦。や。山。口。錦。の名は今尚ほ茶道好事家の喜ぶ所で、數多き錦の中で頗る上品のものであつた。後世山口地方に廣く綿を植え藍を作り、態毛、玖珂、大島、の邊まで綿織物の旺盛に作り出たされたのは、つまり大内時代の遺澤と申すべきである。周防南面の廣地に綿花の齊く吹出されたときは、恰も數里に涉つて雪景色を畫かきたる様であつた。これに附帶してむかしから、山口で巧妙に出来たものは、染物である。「山口の鹿の子染」と云ふことは、足利時代の名物帳に記されて居ります。紅染、紺染、くちなし染、すわう染、紫染、淺黄染、鳶色、柿色、草色、空色、鼠色、その外餘程勝れた色染を以て、好評を博したものでした。これは京都の染物が加茂川の水に良適し居つたと同様、山口を貫流する椹野川、宮野川、一ノ坂川の水が染物に宜いのでした。これは獨り

染物ばかりでなく、むかし山口に酒造業者の多かつたのも水が良いからである。染物にも酒造にも、この地の水が宜しかつた。また煎茶にも適して居る。法泉寺の柳の水、讚井の臙の清水は皆その名水でござります。その頃明國に研學のため、渡航する人が多かつた。中に醫術を修めた者も多かつたが、藥法を習ふた青年輩もあり、そのため山口附近には、珍らしき藥草を澤山栽培したものです。近世木津屋とか、宮竹とか云ふて、繁昌の藥舗のあつたのは、きつとその名残りであつたでせう。

古來識者の説に鑛山のある所には、温泉が湧き、温泉のある所には鑛山があると申して居りますが、防長の各所には、鑛山も鑛泉も多い。戰國時代に多くの武將等が、この邊の温泉に浴游したことが書いてある。鑛泉には温泉もある冷泉もあるが、固より昔も今も變ることなく、賞用されて居る。深川、俵山、川棚、湯田は、凡べて温泉なれど、都濃郡の湯ノ野、厚狹郡の持世寺、湯ノ峠、阿武郡の湯ノ瀬、大津郡の湯面は、冷泉なれども、焚き温めて浴用する人々が頗る多く、美禰郡の温湯（ぬくゆ）湯ノ口、豊浦郡の湯玉の如き、今日は休泉となつて空く地名のみを残して居るが、古き昔は屹度多量に湧出て浴客の雜沓したことでしたらう。また古い時代を考察したならば、われ等の氣付か

ぬ所に、案外好い温泉があつたかも知れぬ。とにかく防長は温泉に恵まれたる一地方として喜ぶべきである。

防長に於て、平安朝より大内時代に至る、長期間の古事古物は、頗る學者を喜ばせ、温故知新の研學に益することが多い。研究者のためには、存外趣味の深いものです。近藤芳樹、山田愛山、(亦介) 布施御墻、(虎之助) 近藤清石などは、好古研究界の恩人であつた。

明治三年に中央政府から、舊物廢棄の令を發せられたので、諸藩と共に防長に於ても、折角古來の名物を悉く破滅することゝなつたのは、如何にも残念で、防長の古社寺に傳はつた、工藝品などは、無法に擲棄されたのである。それより天文二十年に遡ると、山口に反亂起り、大内氏の亡びし際、さすがに廣き全市街が、凡べて兵燹のため、烏有に歸した。この時大内氏襲藏の寶物類は、哀れに灰燼と變じ、東山時代の重要な名物を失ひました。

防長も天文の戰亂と、明治の廢舊令がなかつたならば、古代の國寶並に重要美術品は、多量に存傳された筈と考へます。

明治の初に、跋扈した舊物破壞令のために、萩城に在つた大内氏傳來の古記録、また明倫館の文庫に在りし平安朝末期の古本類を反古紙と爲し、神社佛寺の寶藏の古文書、願文證文までも捨てられたのは、何とも残念至極で、國家のため惜むべきことであります。

防長の古い寺院には、名作の佛像、佛畫、佛具類があり、明國、古版の書籍、平安朝の古寫本、古製の名器など、後世に誇るべき珍物がありました。今は皆滅となりました。周防の國分寺であるとか、長門の國分寺、或は俵山の能滿寺、伊佐の南原寺、下關の永福寺、同阿彌陀寺の如きは、澤山に奇品があつたのでせう。また牟禮の阿彌陀寺、室積の普賢寺、伊保庄の般若寺、岩國の永興寺などは固より善い物が傳つて居つたものと存じます。

防長にある神社としても、延喜式の神名帳にある、即ち式内の神社には、崇敬すべき貴き古社が多いから、これらの神社には必貴重の寶物が多かつたが、これは神佛兩部を廢止されたので、これ等はその際古來寺傳の寶物は、大抵なくなりしました。

防長古代の建築は、城閣、神社、佛殿、武家式家屋の造營には、重要な用材はケヤキ

であつた。瓦も稀には碧瓦もあつたらしい。

若し朝鮮に行き平壤、扶餘、慶州の邊を探求したならば、必や思半に過ぐる古物を見附けるであろうとおもひます。山口も前に申した天文の戦亂と、明治初年の廢舊令と兩部廢止令がなかつたならば、建築物よりは、寧美術工藝品が、澤山残されたことと思はれます。

室町時代に於ける、大内氏の古樂はどうであつたのか、山口氷上山の舞樂は、その傳來は古いものでしたろう。また問田の樂匠は固よりその分派を汲めるものかとおもはれる。氷上の舞樂は古調を奏して面白かつたが、問田の樂匠も、新調ながら歌曲が通俗文句であつたので、正月の賀禮には、萬歳と同様に樂匠を呼んで新年を祝したものである。神樂歌、催馬樂、今様歌などの雅調を脱出して、樂匠は洽く、俗間に歡迎されたのでした。

それから長門琵琶の歌樂であるが、これは盲人の琵琶法師が平家物語を語つた。それが後世に流行した平家琵琶であります。長門は平家に因縁の深い所でしたから、こゝが平家琵琶の發源地である。然るに厚東氏が厚狹郡一面に武運を扶植してから、長門琵琶の

根據は、いつの間にか宇部に移り遂に宇部座頭、宇部琵琶の名を傳へた。それを上歌（かみうた）下歌（しもうた）と別けて、秘傳ものとして居りました。上歌は平家物語を専門に演奏し、下歌の方は厚東氏霜降城に關するもの、城山崩れ十二段は洽く知られたものである。

その外種々の雜曲俗謠を弾して、宴席の遊興を助けたのです。それから土用座頭また土用琵琶と申したのも、右の下歌座頭を招き、土用の季節に荒神棚の前で土用經を琵琶に合せて讀唱させたからである。應永、長祿、文明、天文頃の防長地方で唄はれた俚謠が何處かに残つてゐたならば、さぞ面白い時代考證の文句があつたこととせう。

周防の臺道の某寺に、應永佛と申して塑像の懸佛がある。應永年間の遺佛もあり、また後世の塑像も交つてあります。また長門の棚井の東隆寺の附近には厚東氏時代に、蟹供養のために田圃に廢埋された八萬塔と稱するものが出て来る。この應永佛も八萬塔も凡べて古代名物として、今日の好古家は頗る珍重して居ります。

永正前後には、山口で天文、算術、醫療、製薬が案外開けて居つた様であつたけれども何分遺聞が、纏つてゐないのは、遺憾至極である。若し大内氏の居館が、天文の兵火に

罹らなかつたなら、必珍らしい古記録が見られたでせう。當時は東山でも山口でも茶道が盛で茶人の名手も少くなかつた。その人々の日記手帳の類があつたならば、會席料理の献立附があつたでせう。如何なる山海の珍味を割烹したものが、屹度衛生的の好い食料品もあつたに相違ない。むかしの庭訓往來その他の往來物、古狀類の中に、往々散見するのを見ると洵に懐かしい。

長門の石炭(いしずみ)は、無論大昔より埋藏して居つたけれども、むかしはこれを何に使ふのか、その使用の道が知られぬから、空しく遺棄されて居た。田舎道中で、茶店の婆さんが、折々炭塊を拾つて、茶風爐の釜の下に投込み、旅人を接待致したものでした。然るを今日では石炭(せきたん)と申さば、文明資源の要素とせられ、宇部でも小野田でも大嶺でも、非常の活動振りで採掘されて居る。近世五平太と云ふ船頭が取扱ふたとの事で、藩政時代には、石炭の異名を何人も五平太と申して居た。石炭よりは五平太と云ふ方が、一般に知られ易すかつた。こゝでちなみに申しますが、往々名物の別稱を人名地名その他よりの異名で呼ぶ方が、本名よりも分り易いのが澤山ある、それは大茶碗を五郎八、陶器を瀬戸物、陶器店を唐津屋、黄な粉餅を安倍川、饅頭を芋川、鱈汁

を柳河、菓子種を道明寺、味漬漬を金山寺、大根漬を澤庵の如きである、また織物には大島、八丈、結城、米澤、眞岡、久留米、と云ふならば、如何なる種類のものか、本名を聞かずして、直ぐに承知が出来る。

何と申しても、大内氏か山口に、天照皇太神宮の社殿を設け、その側に多賀社、祇園社を建造したことは、頗る感服絶稱すべき美舉であつた。當時武人等が動もすれば皇室の尊嚴を忘るるものある時代に於て文弱武愚の弊習を正し、國體を重じ皇室を尊ぶの誠忠を表せしは、大内氏奉公の本領、實に痛快雙手を拍つて喜ぶべきである。

天照皇太神宮は御本體は伊勢の一個所である。他に設けられたのは、固より遙拜の社殿である。故に天照皇太神宮と云ふならば、伊勢を冠しなくとも、日本中一個所の太神宮であるから、單に天照皇太神宮と申して宜しいのである。神宮と申す神社の多き内に最上の勝れたる太神なればこそ、太神宮と尊稱した。太は大にあらず。大は大小に比したる相對なるも、太の字は全く絶無比の敬語であります。故に皇太子、皇太后、太極、太陽、太平、太廟、太白、太陰、太守、太古などいづれも、太と書き、決して大としてはならぬ。われ等は伊勢神宮と云はずして、なにとぞ天照皇太神宮と申したきものであ

る。むかし各地に太神宮を設けたるは、伊勢が遠方であるので、諸國にいづれも遙拜所を設けたのである。然らば今日でも必諸方に太神宮を設けて、その御祭日並に年始祝日等には、日本の國民たる者は、是非とも參拜し、各戸に國旗を掲揚して敬意を表すべきである。

山口地方に往來する旅客の深く注目すべきは、室町、東山時代の藝術が、能くこの地に傳習されたことである。文學、書畫、工藝の外に、大内氏が深遠の趣味を持つたのは音樂である。その眞意が敬神尊王に基づくものの多かつたのは、如何にも感服であつた。むかし氷上山興隆寺の舞樂臺に於て、妙見社の祭禮に、舞樂を奉納したのは、古式の雅樂であつて、萬歲樂あり、太平樂あり、羅陵王をも舞ふた。この舞樂も長く續いたが、後には雅樂の變遷を見るに至つた。問田の樂匠の如きは、氷上舞樂の分流末派を汲めるもので、固より毫も舊態を存せず、恰も宇部座頭の下歌を演ずると同様となつた。

大内氏はまた能樂を好み、築山の屋形に舞臺を建て、盛に演奏させた。天文二十年屋形滅亡の際は、恰も饗宴にて能樂を催し、謠曲田村を演奏中であつた。之になごりを留めたものか、後年何人でも築山の邸址を通るときに、名物月見の松の下で田村の一曲を歌

ふと、忽ち松の蔭に在る古井戸の中から、裝束姿の武士が白馬に乗つて駆出して來ると云ひ傳へられて居る。山口祇園社の祭禮には、大内時代の古式に依り、山車が澤山に出る、その主位に在る山車を、御上の山（おうえのやま）と申し、その前面に小舞臺を設けて、役者に舞はしめ、謠曲の名人を集めて、上手に歌はしたものである。夫故のちの世に「山口で謠曲を歌うな」と言はれて居る。これは山口には、謠曲の上手が多いから、他所から來て、下手の謠曲を歌ふと、耻をかくとの誠であつた。

慶長の初年、毛利氏が萩に築城せられてからは、城中に舞臺を造り、常に能樂を催された。但し大内氏滅後にも、氷上の舞樂を保存するために、なかなか心を用ゐられた。それは彼の翁面の物語にても知られるのである。爾來萩には能藝役者の藩祿を給せらるゝ者が、澤山に出來た。就中能役者の棟梁たる竹本某が、平安古河岸端に、廣い地面を貰ひ、藩主の援助を得て、大きな舞臺住宅を造り、年中定日を以て盛に能藝を教習したものであつた。右の竹本は喜多流であつたから、舊藩時代には、どうしても喜多流の謠曲家が多かつた。

下關を通過する人々の追感するのは、景天皇、仲哀天皇、神功皇后の御功業である

が、また安徳天皇の御事蹟を思起さずには居られない。安徳天皇は今の下關壇の浦で崩御になつたといふので、御陵も阿彌陀寺に立派に出来てありますが、或は長崎縣の對馬で崩御になつたとか、又は四國の伊豫でお隠れになつたといふ説があり、それぞれ喧しい考證を並べて、研究調査をして居る人がありまして、その議論はなか／＼むづかしくなつて居りますが、先づ下關を崩御の地と公定してありますから、こゝを正統の御陵と信じなくてはなりません。

近來古蹟は保存せらるる筈でありますけれども、中には無慘にも折角の名蹟を破壊して、失くしてしまふやうなものもあります。現に安徳天皇の頃に御縁故ある、下關に御裳川と云ふ流れ川がありました、私共昔はあの邊を通ると、これが御裳川であると佇立して、水の流れを見たものでしたが、今日でも何か形跡が残されて居りませうか、また平家の一杯水は、どうになりましたか、今ではあの邊を急いで通ると、一寸見當りませぬ。

また阿彌陀寺は、今は昔の建物はなくなつて、神社を設けられ、赤間宮と稱せられて居ります。現今その神社には、安徳天皇、その他に關係ある重要國寶が保存されて居ります。有名な屋島屏風といふのがありますが、これは國寶でござります。最初はもと屏風に出来てゐたものを、何時頃よりか、作り變へて掛軸になつて居ります。掛軸にすると解いたり巻いたりして、繪の具の塗つてある所が、みんな落ちてしまひます。これは史料になる面白いものだといふ評判になつて、屋島屏風を屋島合戦の様にいひますけれども、本來は安徳天皇の御一代記の繪傳でありまして、之を見れば安徳天皇御一代の様子に詳に分るといふのです。古寫本平家物語は國寶になつて居る、これは足利中世頃の寫本です、それから徳川幕府以前から參詣をした名人どもが残し置いた追悼の詩歌か何か、今でも阿彌陀寺の昔を偲ぶ名作を短冊に書き残したのが、餘程澤山あります。それから平家一族の、偉い名將たるべき人々の肖像畫、又平家一族の學問の出来た人の歌集などがあります。どうぞあゝいふものは大切に保存して置いて下さるやうに願ひたいものです。

むかし、平清盛が京都の都を攝津の福原に移しましたが、とてもこんな狭い所では動きがつかぬので、更にまた天皇のお伴をして平家のものが京都に歸りました。その後、木曾義仲の如き者が出て來て暴れるので、又それから福原の方に都が移され、到頭

源平の合戦となつて、お仕舞には讃岐の屋島に移轉され、結局長門の壇浦で平家が滅亡しました。

何としても防長の地には、平家の一族が多かつたから、戦後に残つた者も決して少くない。それで今日特に亡き後を偲ぶものは下關に、先帝祭といふものが行はれまして、毎年お祭をして、昔から安徳天皇の御追福を祈ることになつて居ります。

それから平家蟹といつて、平家の一族が怨を呑んで海に投じ、その亡霊が蟹になつたといふ傳説があるもので、そのためか蟹の顔が、いづれも人の顔に似て居ります。如何にも残念がつた悲しいやうな悲歎を極めた顔貌をして居る。今日この蟹を乾し物にして眞綿に包んだり何かして、お土産に持つて来る人があります。さてまた平家琵琶のことは前に申しました通り、平家の哀れを偲ぶ追薦の爲に、平家物語を歌曲として彈奏したものです。これは長門琵琶であり、また平家琵琶として知られたのでござります。今では京都の方に本家があるでせうが、薩摩琵琶よりも筑前琵琶よりも、傳統が古いものであります。とにかくに平家殘黨の遺族どもが、古き亡魂を追福すかため、忌日の佛前に、琵琶を彈して哀弔したものであります。

平氏も清盛の如き暴戾剛愎な人が出て、一代の怨府となつたけれども、忠盛や重盛の如き誠忠奉公の賢者も居つた。まだ隠れたる名士もあつたに違いない。それ故に平氏の武運盡き愈滅亡の悲況を演じ、遂に歿落の悲哀を残したとはいへ、大にその敗亡現狀を氣の毒に思ひ、痛憤して最後を遂げた人が澤山ありました。固よりその順逆成敗の如何を問ふに違あらず、これはその事へし人のために、良心至誠の限りを盡したのである。元來平氏の族類も防長の地より出て戦地に向ふた人々も多かつたでせう。惟ふに、防長に生れし人の氣象は二千年來、主君の爲に節義を盡すべき國粹の精神を養はれて居つたのですから國民として専ら節義のためには成敗利鈍を顧みず、外敵と見たならば、命の續く限り戦ふことは、傳統精神としてやつて來た武人なればこそ、幸にこの國に領土を持つてゐたので、平氏の一族は假令敗北したとは云へ、さすがに決して未練な最期を遂げては居りませぬ。薩摩守忠度、無官大夫敦盛、能登守教經、新中納言知盛など、いづれも武士道の良最期を遂げて居ります。無分別に降伏して捕虜になるといふやうなことはあまりありませぬ。自分の力の續く限りを働いて、立派な最期を遂げた勇者が多くあつたのです。そこに行くとき西洋諸國の武將などは、十萬二十萬の大軍を擁しながら、卑怯

にも旗を捲いて降伏をして、迎も腹を切る責任や勇氣はない。これでは雄圖を誇つた傲語は全く夢中の寢言で、虚。喝。空。嚇。の。偽。英。雄。と云はざるを得ないのであります。

この頃でも外國の武將には、國。辱。を耻ぢず、武人の面目に自から泥を塗付け、賣。國。行。爲。で大軍を率ゐながら、敵前に白旗を掲げて降伏するのは、愚劣も甚しき怯弱の極と云はざるを得ない。平氏の殘兵は氣の毒なる敗北にて百計破れ盡したれども、さ。ず。が。に。日。本。武。士。の。精。神。に。化。せ。ら。れ、良性の遺傳を受けしことゝて、最後の一人を残さず立派なる最期を遂げ、さすが武士の面目を失はず、士道に耻ぢざる最期をしたのであります。彼の經盛も、知盛も、忠度も、實に見上げた忠勇の武士であり、その外にも勇談佳話を留めた勇士が澤山に居つたのでせう。

天地間の生物は、物と所に因つて、色々様々に變はります。大。根。や。野。菜。は。この畑が宜しいが、梨。や。柿。は、向の山の麓が適して居るとか、雞。や。豚。を飼うのは、隣の農場では不適當だとか、魚。貝。類。を養殖するには、彼の方の海川でなければ出來榮が宜しくないなど、日用食品の材料を作り出すにも、品質と土性とは互に相違があります。人間と植物と動物とは、その形の上では餘程變つて居りますが、天地間の生理から見れば上下萬年間に、

に、共通性を傳來して居ります。故に上古より防長人材の發育も物質と土性に因つて、古今東西動き居る精神的。意。氣。は、遠き將來に於て如何なるかと、深くこの懸案を熟察研究したならば、屹度無限の興味を發見するであらうと信じます。

丁篇 鎌倉初期諸政の経緯

神代と申さば如何にも遠き蒙昧の時代の様に言はるるかも知れぬが、日月消磨の世情を鑒みるなら、決して邈然たる未開の時代でなく、案外自然的に近き、神人一和の事蹟が多いでせう。その内にも深く注意すべきことは、古代の言語と墳墓とその出土の遺物であります。

わが沿海地方の最古の遺蹟は、恐らく四千年以上にも遡るでせうが、深く熟思するならば、趣味多き貴重なるもの固より少くはない。況やわが國本土の西端に居る、私共防長人の祖先は、上古からの歴史を考へると、大に自重すべき民族だと思つて居ります。どうぞ御手透の節に、古事記、日本書紀、古語拾遺、出雲風土記、萬葉集、また延喜式やその外大内氏並に毛利氏の古記録等を委細に御覽下さると、大變に發明なさることが多いと存じます。これが所謂温故知新で、ずつと古い時代の防長民族の生活風俗、また神靈祭祀など、聞くべきものが屹度あるに違ひない。昔より早くからこの土地には、農

作、牧畜、殖林、海運等が盛んに興つたのであります。殊に航海業は餘程早くから進歩してゐたことが知られて居ります。その後、諸所に戦亂が續きまして、幾多の武家の興亡やら領土内の治亂盛衰を経て、——これは他の國も同様でございますが、平氏の滅亡までいろいろの變遷を、潮の干満のやうに繰返して來ました。

それから源平抗争の始末が濟むと、今度は鎌倉の政治が始まります。

鎌倉時代のことは、防長人に關係する話が澤山ありますが、元來鎌倉幕府創始の政策は後世の佐幕政治に行はれし如く、朝廷の權力を侵すやうな備を作る悪手段ではなかつたのです。然るを、後世覇道に迷ひしたため、いつしか武斷專權の政治が惜くも、國民より怨府と思はれる様になりました。

鎌倉幕府は、平氏を討伐した後、非常な大改革をやつて、無論平氏の領土は悉く沒收し、平氏の黨類は全滅しましたから、その土地は戦役に功勞のあつた源軍將士に分けてやつたのです。それが爲に鎌倉武士また關東武士の系圖を持つ人が、澤山防長に入り込むことになりました。今日でも防長人の中には、關東系圖を持つて居る家が澤山あります。

それで長門の方は、彼の佐々木高綱を國司に任し、周防の方は俊乗坊重源が國司に推されました。この重源は非常に勝れた名僧で何事にもよく働いたものと見えて、元亨釋書その他高僧傳には重源のことが書いてあります。先づ今日話に遺つてゐるのは、奈良の東大寺が、源平の戦火で焼かれてしまつたのを再建する爲に、頼朝がこの重源を大勸進といふ僧職に任じ、周防國に遣りました。今の牟禮の阿彌陀寺はその遺跡で、重源はこの寺に居つたのです。

それで東大寺建築用の材料を調達するに就いては面白い話があります。防長は元來平氏の領地であつたので、重要な資源が澤山ありますから、その資源を開いて、東大寺の建築用のために供用しました。

第一に知られてゐるものは、なめら山の森林から良い木材を澤山伐採して奈良へ送つたものが大變多かつた。これは阿彌陀寺の方面の奥地から出て、三田尻の側を流れる佐波川が大變に便利で、あの奥の山間から材木を筏に流して持つて行つたのが、餘程多量にございました。それから防長に産出する陶器紙類とか何か役に立つ物資を澤山持つて行つた爲に、東大寺が都合よく出來上つたものですから、重源はその功勞によつて、暫く

此處の政治民業までも心配してやつて呉れました。

鎌倉の開府以來、遠く關東武士の防長に來住したものが多かつた。それはその苗字、紋所、系圖等に據つて分つて居ります。武藏七黨、常陸、信濃、上野、下野、下總、相模、伊豆、その外の地名を苗字とした家筋が、存外に多い。關東と關西では、東西自からその地方に固有した地名がある。鎌倉時代に、關東に武人が澤山に出現したときは、先づ知り易きために、いづれも地名を取つて、苗字としたのである。爾來數百年を経過する間には、防長人の苗字、同地名、また物名などに、段々讀にくき名稱が、出來ることとなつた。現に今日では、諸方の人が自由に來住し、防長の各都會に參ると戶外の門標に、珍らしき姓名の表札が掲げられて居る。また遠方から、珍らしき地名物名を記した書狀や荷物、到來する。そこで防長人も、今では解し難き人名、地名、物名を一通り承知して置かぬと、差問ふことがあるから、多少は脱線の嘲はありませうが、後來少年のため、老婆心の一端を御話致しませう。

阿武郡の人で阿武と云ふ苗字をあむのと曰ふ。阿武の下に、のを添へてあむのと讀む。上をウエノ豊をブンノ太をオホノと讀む。それは昔の讀法でして藤原の鎌足、源の義經

平の重盛、大江の匡房と、その書法にはの字はないけれども、讀む折に、口ではのを加へて讀む、また大津郡の地名に中小野とあるが、この方は野があるのに、それを默殺して、なかをと讀む。これは九州の鯛生野鑛山も同様である。こゝに野の字があるのに、たいおと讀み野を殺す譯になります。そこで上古より、防長に聞へた人名、地名、物名、その後中世の頃より、知られたものが多いから。たとひ防長の讀法でなくとも、苟も防長にして、遠方の人と交り、他方に往來し、讀知り難き物名に逢ふときの用意に聊か研學のため、御聞取り下さい。

一口をイモアライ、東海林をシヨウジ、藥袋をミナへ、及位をノゾキ、蒞戸をノゾキ、左澤をアテラサハ、立賣堀をイタチボリ、生明をアザミ、十六島をウツプルイ、潮來をイタコ、太秦をウヅマサ、私部をキサイ、雀部をササベ、四月朔をワタヌキ、八月朔をホヅミ、一尺八寸をカマツカ、設樂をシタラ、刑部をオサカベ、善知鳥をウトウ、出雲村をアタカイムラ、菩薩池をミゾロイケ、續續をハナフサ、その他難讀のものが澤山にある。義訓借訓、この外に外來字源に因る難物も、時々防長地方に見られるのでありますが、今後と雖もまた新しく義訓借訓の人名、地名、物名が出來ることとせう。

頼朝の政治の本領は、固より皇室を尊崇し、それから諸政の經畫に留意したが、當初の創意の如くには參らなかつた。善いこともあり、善くないことも少くない。北條氏は歴代、幕府の執權でしたが、善い人物もあり、悪い人物あり、泰時、時頼は好評判を受けたのに、義時、高時は不忠不徳にして憎むべき醜類であつた。然るに時宗に至ては古今無類の大功を奏し得たる偉人であつた。これは鎌倉が、更に武士訓養に力を盡して、怠らなかつたためであつた。その武道訓練の經緯には、細心の脚色を演じた譯でありませぬ。とにかく鎌倉幕府は、政治の方面に強力を費し、従つて武備の方面に同様、手落のないやうに、骨を折つて進んで來たのでございます。それで一體政治の機關として、鎌倉に侍所と公文所と問注所を置きました。侍所といふのは、軍事に關係あること、また後の警察のやうな仕事をやる所であります。彼の有名な和田義盛が、其處の別當即ち長官となつて働いたのです。また公文所は、後に政所といひましたが、政治の中心となつて力を盡す所でありまして、これの長官もやはり別當と稱して、大江廣元がなりました。問注所といふのは、珍らしい名前ですが、これは當時の裁判事件を引受け、法律によつて人民の幸福を保護してやるのであつて、三善康信といふ非常に學問に勝れたる人

が、その執事となつて引受けて働いたのでございます。この大江廣元と申すのは毛利公爵の祖先で、非常に偉い人でありました。頼朝の事業を物語る時には、必廣元のことをいはないと何も分らないのです。頼朝は廣元を得て始めて、鎌倉幕府の組織が出来ることになりました。これは大切な話であります。折角鎌倉幕府が出来ましたけれども、一體頼朝は卓見家であり、十分な仕事の出来る人でございませうけれども、惜しいことには、一種の性癖として嫉妬深く猜疑心が強かつたので、それが爲に様々な不快事が起つて來たのであります。

頼朝が伊豆の石橋山に兵を擧げて、だん／＼出て來るといふ時に、大庭景親その他の者の爲に破られて餘程難しかつた。その際梶原景時に命を助けられた恩がありますので、その恩を忘れることは出来ぬ。それ故に景時の言ふことは何でも承諾しなければならぬと思ふた。さういふ良い性質も、もつと注意せぬとならぬのですが、然るにこの梶原は、如何にも悪性に勝つた人で、頼朝は俺の言ふことならば何でも聽入れて呉れるからといふので、景時は自分の邪魔になる人のことを、皆頼朝へ讒言で悪く言つて遠ざけるとか、討殲すやうなことをやらしたのであります。

又頼朝の夫人は平政子ですが、政子は北條時政の娘であります。所が時政は何人も一向感心せぬ不良性の人で、これも何やら彼やら邪魔をして甚だ面白くない人です。頼朝は時政には、非常に世話になつたので、その言ふことを肯かなければならぬし、梶原景時の恩義もこれ亦忘れてはならぬといふやうになつたので、それで後に、兄弟でありながら、義經、範頼、それから叔父に當る行家等を殺させるやうなことに至つたのは、皆これらの人の讒言を信じたからです。殊に佐々木高綱等ば、源平の戦争の物語をすれば、立派な功績が澤山にありますが、さういふ功勞者を讒言の爲に遠ざけてしまつた。高綱などは今日では何處で死んだのか死所が判らない。墓は信州の松本にあるとかいふやうなことですけれども、彼方此方身を隠して、本當は何處で死んだかはつきりしませぬ。又畠山重忠も非常な戦功を立てた立派な人でありましたが、これも讒言の爲に殺されてしまつた。實に惜しむべき人が皆殺されたのであります。奥州の藤原秀衡は、義經をかくまつて助けたといふことからして、彼奴は穩かならぬ奴だといふて、引つ捕へて殺したのであります、それでありますから人倫上の道德觀念から見ると、甚だ不倫極まる怨を遺したことが澤山にあります。

併しながら、他方に頗る感賞すべき善美の功績が、澤山あるのであります、あの通り國人の上に立つて、特に征夷大將軍にもなり、鎌倉幕府の大事業を建設し得たのは、畢竟先天的大頭腦の力があつたから出來たのです。その幕府政治は、前にも申したやうに、皇室に對して十分に奉公忠節を盡すべき政治を行はんといふのが本領であります。歴代の征夷大將軍になつた人を見ると、織田信長でも、豊臣秀吉でも、徳川家康でも、皆正一位を贈られ、別格官幣社になつてゐるので、然るに獨り幕政の始祖たる頼朝だけは何の恩遇もない。幕府政治を起して、彼の大仕事をしたことを考へると、實に皇室奉仕の誠意より起したものですから、決して異論を言ふ所はありません。織田信長などよりは寧ろ勝れてゐるでせう。さうすると同様に正一位を贈られて至當なことゝ思はれます。又神社も今あゝして白旗神社といつて、小さな祠がありますが、これもやはり別格官幣社に進められて宜しいことだと存ぜられま

す。頼朝の直ぐ後に、當時幕府の執權たる北條の話が出て來ますが、朝廷を苦しめ、天皇を無きもの扱ひにして大變御無禮なことをしました、これは勿論頼朝の罪ではない。鎌

倉幕府が朝廷に對し、殊に、天皇に對して非常な御無禮をしたのは、賴朝より後の話であつて、北條といふものが無闇に政治のことを扱つて、それが専らやつたことですから、賴朝の爲には飛んでもない迷惑至極の話です。

人事も不可解のことが多くて困つたものです。武内宿禰の如き大忠臣の後裔に、蘇我馬子、入鹿の様な逆賊が出たり、藤原鎌足の如き大忠臣のあとにも、朝威を侮る様な、不逞の子孫が澤山に現はれた。後世武家政治の時には、前にも後にも、朝威を侮蔑するものが、屢々現はれてこまりました。祖先が善くて、後裔の悪いのもあり、祖先が悪くて、も子孫が、立派な忠功を抽んでたものも、随分少なくありません。鎌倉幕政を繼承する爲政者には、不心得の者があつたけれども、開祖たる賴朝は、皇室に對し決して心得違ひはない。從來批難のあるのは、鎌倉政治の全體を混淆排撃の餘り、『坊主が憎ければ袈裟まで憎い』の、側杖を喰ふた譯でせう。

北條執權が鎌倉幕府の爲に專横を極め、皇室に對して大不敬をしたのを以て、賴朝に悉く濡れ衣を被せ掛けるといふことは、飛んでもない迷惑だと思はれます。然らば織田信長、豊臣秀吉、徳川家康と同様に、正一位の位階を贈られ、その英靈に對し、別格官幣

社を以て追祀せらるべきものと考へます。

徳川時代の幕政は、朝廷に對して、言ふに忍びざる不都合も多かつたが、うやむやに黙過された。徳川將軍はまだ死なない中から、從一位太政大臣になつて居り、死んでからは正一位になつて居る、殊に家康のためには、如何なる譯か、別格官幣社を、日光と久能山の兩方に設けられて居る。

久能山にあつた家康の遺體は既に日光に改葬せられたから、久能山の方は丸で空っぽになつて何物も無い譯です。日光の方に凡べて移されたから、その方が別格官幣社になれば、それで十分です。されば信長、秀吉と同様一箇所として結構であるから、一つを返上して、更に賴朝のために從來の白旗神社を改め別格官幣社を設けられたならば、頗る公平の御詮議と考へます。かくして賴朝の爲に宿冤を雪ぐべき御沙汰がありさうなものだと思つて居ります。

從來一方の學者どもが申すのに、賴朝を助け幕府政治を組織したのは大江廣元だ。廣元の入智慧であんな面白からぬことをしたのだから、全く廣元が善くないといふてゐるけれども、却てそれに反對論を唱へ今では藤原兼實、新井白石、賴山陽の癖見を退け、む

しろ廣元崇敬説を主張する學者が決して少くない。鳥渡序ながら申しますが、昔は各家とも苗字を言はず、姓氏の區別にて源の某、平の某と申してゐたが、戰場に参り味方の軍人も非常に多數になると、人名を呼別けるのに混雑するから、地名その外から取つて、名前の上に苗字を付けることゝなり、苗字と名前を連稱することになつたので、軍隊群集の時にも大混亂が止むことになりました。それで通常人の家にも鎌倉時代より、それ〴〵苗字を唱へることになりましたので、戸籍の登録も都合能くなりました。

右の苗字はいづれも出生の地名を用ひたものが多い。武藏の熊谷の出身だから熊谷次郎直實と云ひ、同く畠山より出た人だから畠山重忠と申した。軍人の功績などを調べるため、地名のみでは重複して分り兼ねるので、また別な事柄を擇び種々なる苗字が呼ばれることゝなりました。それから苗字や名前では遠くから見別する譯にまゐりませぬ。そこで旗や幟また武器などに一見して分り易きやうに紋を付けることになりました。それから屋外でなく、座敷に這入り席上に座しても、前からも、後からも、横からも、その人を間違なく見別けるために、衣服に家々の紋を附けたものです。廣い大座敷に、儀式

263023

あるとき多人數列座した際には、大紋を付けて遠方から知り易き様に致し、禮服には五ツ所に紋を附けた。これが後世の五ツ紋即ち定紋である。全く群衆の混雑を防ぐ便利な目印でありました。

何と言つても、戦亂戡定の後、大に名分を明にし、國政の基本を固定した。鎌倉幕府の創業は、全く廣元贊襄の力でありました。

廣元は方々に領地を貰つて居りましたが、相模の愛甲郡南毛利村はその一つでありました。相模川を遡り今では鮎を取る名所になつてゐる、彼の厚木の隣に當り、今でも南毛利村といふのがありますが、この領地毛利村にちなみ、遂に毛利といふ苗字を附けられ、今の毛利公爵家の苗字は、それから來たのです。

北條時政は、甚だ面白くない人物ですが、その子の義時は更に一層の厄介者で、親父の言ふことを肯かないし、何れ智能ある人ではありましたが、我儘な剛愎な人で、始終朝廷に對して御無禮を働き、遂に承久時變の大不敬が起りました。それを廣元の不行届の爲だと悪口を書いた者が居ります。

甚しきは獅子身中の蟲と書いて居る。これは彼の藤原兼實が廣元と同時の人で、その著

書「玉葉」に於てかくも罵嘲して居ります。後世徳川時代になつては、右の古意を受けて新井白石がその讀史餘論に獅子身中の蟲と書立て居るが、その後には、頼山陽が白石の意を承けて、その著「日本樂府」に於て、獅子身中蟲と誹謗して居る。

如何に批評するとも、獅子身中の蟲は餘り苛酷の怨言である。これは全く廣元の心中を知らないから起つたのです。それで毛利家に於ては、どうかしてこの宿冤を雪くことにしなければならぬといふ議が起つたのです。所が一方攻撃する人は、承久の亂を、廣元が如何にも黙認し居つた如く申すのは、何とも迷惑至極のことである。實に廣元はその頃最早老年でもあり、病人でもあり、且つ周圍には自分を援ける人がない。それに義時は親の時政の言ふことさへも肯かないばかりか、時政を伊豆の方に放逐する程の不倫不孝の人であるから、廣元の言ふことを迎も穩に聞入れる筈はない。廣元が懇切に言つても、周圍に居る人は、義時の暴威を懼れて、意志に逆ふやうなことは誰も言ふて呉れない。廣元は深切なる相談相手のないため困つて居りまして、最期は憤怨を吞んで病歿したものだと思はれます。

そこで廣元の嗣子季光は、父の晩年を如何にも残念氣の毒に思ひ、あれは皆北條氏が宜しくない、彼等が全く政治を悪化したからだ、大に父の爲めに義憤を發しました。この義時は固よりいけませぬけれども、その次の泰時は、義時の長男ですが、丸で打つて變つた善い人でした。この泰時の細君は三浦義村の娘です。然るに季光は三浦の一黨と話合つて、北條を叩き潰してやらうぢやないか、どうしても北條征伐をやらなければいかぬと、遂に已むを得ず、三浦と共謀して、大義親を滅するの大計畫をやられたのです。折角鎌倉幕府が出来て、立派な政治をやらうといふのに、天下國家を惑はす悪政治をやつては、朝廷に申譯がない、況や皇室を侮蔑する、不敬罪とあつては、天下に對し何とも相濟まぬ。是非とも北條一族を叩き潰してやらうと斯く義舉を企てたが、中途で發覺したので、残念ながら季光一家の家の子郎黨はみな鎌倉の法華堂で、一族四百何十人の者が、悉く自殺した。生きてゐれば皆北條の爲に殺されるに決つてゐるのだから、北條の手にかゝつて殺されるよりは、お互に潔く自殺した方が痛快じゃといふて、死んでしまつた。昔の人はさういふ場合になると、節義のためには思切つて壯烈な快舉に出たものでした。

右様の次第であるから廣元の功績を明に辨解し、また季光の義舉をも潔白に疏釋しなけ

ればならぬといふので、それが爲め後年兩方の墓前に石碑を建て、碑文を彫付けて後世永久に、正確なる勳功を傳ふことゝなつた。廣元の墓は、多年の搜索を経て、大藏山と決した。即ち頼朝の墓所の附近であります。季光のは鶯谷の方ときまりました。初めの詮議は、文化年中からでしたが、いよいよ建碑となつたのは、天保の中頃でしたらう。然るに現今は鶯谷の碑を大藏山の方に移され、廣元、季光の兩碑が併立されたのであります。

偕それから義時が、どうも朝廷に對して、不敬なことをしていかぬ不都合千萬だから、後鳥羽天皇は、御憤慨になつて北條征伐といふことが初まつたのです。

後鳥羽天皇は、安徳天皇の御弟に當られるので、それで平氏の末期に當つて非常な暴威を振つたのが、平清盛ですが、神武天皇から八十代目の天子様が、高倉天皇、その中宮は清盛の娘であつた。その御子さまが、安徳天皇ですけれども、安徳天皇は僅か三歳にして下關の壇の浦で崩御あらせられた。その御兄弟であるけれども、後鳥羽天皇は、お母さんが違ふのです。學問もよくお出來になり、又武藝もお嗜みになり、餘程御氣性の優れたお方と見えます。それで義時等のことに付き、これでは後にどんな禍が起るか分

らないと深思逆鱗あらせられ、承久の事變が起つたのでせうが、鎌倉からの暴威がひどいものですから、御子さんの土御門天皇に御位をお譲りになり、又土御門天皇も中御氣性の勝つたお方であつたから、御自分の御兄弟の順徳天皇にお譲りになつたのです。所が、後鳥羽天皇、土御門天皇、順徳天皇はいづれも逆鱗の御様子が、盛んに現はれたからして、今度は義時の方から申上げて、順徳天皇の御讓位を迫つた。この天子様がおいでなされては、何事も手に餘つて己が自由に參らぬといふので、遂に順徳天皇も御子様の仲恭天皇に御讓位になつた譯です。このやうに御親子三代の天子様が皆御隱居になつたので、段々喧しくなつて來た爲に、遂に義時が堪へ切れぬと見えて、甚だ御無禮な譯ですけれども、どうぞ遠方の島へお遷りを願ひたい、このまゝ都においてでは困るといふので、後鳥羽上皇は隱岐國に、土御門上皇は土佐國に、順徳上皇は佐渡國にお遷してしまひました。この時は皆御隱居していらつしやいましたので、固より後鳥羽上皇、土御門上皇、順徳上皇と申上げましたが、御憤慨の餘り、色々の和歌その他お書き遺しになつた文献の上に、その御心痛の模様が表れて居りますが、かういふ承久の事變を、大江廣元が見て知らぬ顔をして居る譯はないと、公卿側の一派から卑怯に

も嫉怨を嫁したのである。これは北條一派に發生し居る、深い眞情を全く知らぬ妬癖よ
り生じた誣告である。廣元に取つては、飛んでもない迷惑千萬な話です。

また奈良朝、平安朝、鎌倉時代に至るまで、色々の事變がありますが、この間に宗教の
經緯が戦さの前後に、織込まれて社會組織を飾られて居り、騷亂や戦争が永く續いた間
にも、宗教の力を以て國民の感情を深く風俗技能の上に乗せて傳導して居ります。例へば
美術工藝の如きがある。これはあれ程の騷亂やら何やらで、折角骨を折つて拵へた實物
を、皆焼捨て、しまつたり、打壞したのでありましたが、それにも拘らず、今猶ほ千年
以前の美術工藝品が澤山目前に存傳されてゐるのは、全く宗教といふ一つの信仰の力に
依つて保たれた爲であります。これは實に不思議な話で、奈良にも京都にもその外方
方にありまするが、それから足利時代の物でも、桃山時代の物でも、戦争の爲に打ち壞
されずに、妙に美術工藝品として今日まで残つて居ります。それは防長にも、山口その
他に古代の名物が遺つて居りますし、遠い東北地方の盛岡邊でも一種變つた古物が、思
ひも寄らぬ所にあります。奥州地方に種々見られるのは全く平泉から傳はつた物であり
ませう。平泉方面でも、幾度か激戦を交へ、形勢の變遷があつて、政治をする人も産業

を營む人もすつかり變つたり、倒れたにも拘らず、往々珍らしい古物が、今日遺つてゐ
るのを目撃することが出来ます。これは日本の國民性の嗜好、文化の尊重の面白い所だ
と思はれます。

それからこれに續いて鎌倉時代に現れた大事件は彼の元寇です。蒙古十萬の兵が、日本
に押寄せたといふお話で、丁度 龜山天皇の時でございますが、蒙古に鐵木眞といふ豪
傑が生まれて、これは成吉思汗といふ人で、亞細亞の大部分、歐羅巴の一部を征服し
て、大變な豪勢を張つたものであります。その孫に當る忽必烈といふのが、俺の前に頭
を下げぬものは天下に無い、日本の國が忽必烈の前に叩頭しないなんていふことは怪し
からぬことだから、是非歸服せよと屢々使者や書面を以て、申して來たのですけれど
も、この方で丸で相手にしなかつた。

さうすると文永十一年に蒙古の大軍が、對馬と壹岐をおびやかして、大變な亂暴をした
のですが、その後、建治元年に更に愈々大掛りに來襲するといふので、元は先づ杜世忠
といふ者を長門の室津に遣はしましたが、その時分にはこの邊は、外寇を防ぐ爲め、早
くから軍隊や豪族どもが、海岸を衛戍してゐたものですから、室津の海岸で右の杜世忠

を早速引捕へ鎌倉に檻送して首を斬つてしまつた。そこで向ふではこの重要な使命を以て送つた使者を、斬つたといふので、非常に激怒して、弘安四年の夏、忽必烈は大軍を九州の筑紫を指して送つたのです。これが例の國民唱歌にもあります通り、十萬の大軍で押寄せて來たが、こちらは關東關西より雲霞の如く筑紫の海濱に出陣した。わが陸上の雄軍も海上の水軍も強勇に防戦したので、その忠誠は天地を感じしめ、眞神嚇怒、大討伐の海戦が行はれた際、偶然にも大暴風で海が荒れて、向ふの船が木の葉の如く轉覆し、十萬の敵兵は、悉く海中の藻屑になつてしまつて、生きて歸る者は僅に三人といはれて居る位に不思議なる神國日本の大勝利でありました。昔から伊勢の神風は徒らに不義者の爲には吹かぬ、正義仁道を盡くし、鬼神を感じしむる、報公精神に富める日本君子國仁者のためにこそ吹起こして援けたのである。

所が後世では、この非常の大戦争には、筑紫附近の人のみが出て働いて、蒙古兵を討伐した如くに考へられて居りますが、決して九州方面の人ばかりではない。無論諸國の軍兵がいづれも加勢に參りました。我が防長の軍人も澤山に出征して戦に働いたのであります。

こんな偉勳も後世になると、いつの間にか湮滅して分らぬやうになつて、如何にも残念です。ですからどうぞ正確に、長く史傳に遺して置いて貰ひたいと思ひます。この困難に就いて、今世間に傳はつて居る繪卷物がありますが、前の方に言葉書があつて、竹崎季長や四國の河野一黨の勇戦振りが詳細に書いてあります。勿論竹崎や河野の働きはありませうけれども、防長人の戦功も決して忘れられてはならぬ。築紫と長門とは一衣帯水を隔つる向岸ですから、かかる大國難が眼前にやつて來たのに、九州の沿岸の人にはばかり骨を折らせて、防長人が知らぬ顔で、黙つて見て居る筈はない。必ず大群衆が出て働き、立派に討死した者も餘程多かつたに違ひない。この際の防長人の戦功は、昔から土地に残された傳説、また豊浦、大津、阿武、三郡の海濱より發掘せられた、當時の武器の破片また古墳その外の遺物を見て、防長人の忠勇の事蹟を追想することが出來ます。

われ等の尊敬する學者松下見林の著書「異稱日本傳」を見ると、それには支那の學者が日本人の歴史上の功績を書いたのを取集めて、これに轉録してあります。その内に元寇一件に關する日本人の戦闘振りを書き記し、防長人その他の人々が、奮戦撃退に參加したる出征の状況が窺はれるのであります。防長人の功績が日本には忘れられ、却つて支

那人に認められ、それが他方に轉傳して、後世に知らるゝことになつたのは、如何にも結構ではありませんか。

古來何時の時でも、博多方面の海または玄海灘に戦争があると、長門の豊浦郡、大津郡、阿武郡の西北海岸に敵の敗兵が船に乗つて逃げて來たことは、古い昔から書き記されても居るし、今日あの方面の海岸若くは山の麓を掘ると、いくらも武器その他の古物が出ます。それが日本の物でない。古い時の外國の武器の破片であるとか、何かその時代の外國用具の壞れた斷片が土中から出て來るのです。

私はその古物を見て參りましたが、前年大津郡の正明市の學校でも、その發掘物を集めて、——参考品として保存してあるのを見ました。實に三韓征伐頃の遺物を見ることが出來、あの豊浦郡、大津郡の海岸の崖地から珍らしい古物が掘出されて、中には征韓以前と考ふべき物も出る様です。

それから僧日蓮が早くから元寇の來ることを知つて、色々鎌倉幕府に進言したり、或は安國論を書いて、當時の幕府に差出したのでありましたが、どうも宗教の力といふものは妙なものです。一昨年私が樺太に行きました時に豊原の公園で、僧日持の銅像が建て

てあるのを見ました。この人は日蓮の弟子で、むかし彼の方に布教の爲に廻つて、樺太の北方からシベリヤまでも足を踏入れたといふ名僧ですが、僧侶の身で能くあれまでに深入をして、當時の日本國權威のために努力貢献した功勞者であつたので、銅像が建てられて居ります。

所が樺太の話に就ては、岡本監輔といふ人は幕末の時に、北樺太の北端まで行つて、極北の海岸が、これぞ、正に日本の領土であるといつて、天照皇太神宮の社殿を建て、置いたといふのですが、今日は例の五十度以北の地ですから、あの邊は既にロシア人の占有となつて居るから、今はどうなつたか、一向判りませぬが、岡本はもと、四國の阿波の出身の漢學者で、明治の初頃には、學者としても役人としても相當用ひられた人でしたが、岡本監輔の功績の記念碑は頓と見當らない、これは如何にも残念至極の闕點であります。

むかし元寇が襲來して、無禮に無法に九州を騒がした時に、案外隠れたる偉勳の武人が澤山に居りましたらうが、惜むべし無き人の功績は歲月と俱に漸次消磨されることとなつた。防長人の先輩が、元寇の防禦撃破に、どれ位の力を盡したか判らないのですが、

必相當に働いたに違ひない。今でも諸方から掘出される遺物を見れば、證據になりますから、どうぞ愛國者の淨財を以て、元寇撃滅の記念碑を、長門の西北海岸に建てられたなら、痛快千萬忽ち溜飲も下がることゝ存じます。折角なら航海者が遠く海上から、明瞭に見得るやうに、雄大不朽の大標を高く建設して戴きたいものです。

鎌倉時代の政治の組織する所の經緯には、細心を用ひたものが少くない。深く生活問題の重要に鑒み、農村制度に力を盡した形迹が多く見へる、これは獨り關東の僻陬にその遺制を見るのみならず、己が防長の農村にも、今猶ほその古風が存してゐるものがある。鎌倉時代より、滾々として戰國時代に奔流し來れる、農村の習俗には、なかなか吾人の模範として、永久傳へたいものがあります。苟も食物なくては、生命を保つことは出來ない。その食物の主要なるものは穀類であるが、これは専ら農作の功力に頼らねばならぬ。その耕作して得る所のものゝ中には水田の水稻が、五穀中の上種であて、畑地に作るものは、陸稻の外に、大小麥、粟、稗、豆の類數種である。又農家は田圃の耕作のみに止まらず、種々の副食物たる加工品を製する必要がある。紡織その外の内職業を勤むると俱に、納税兵役の義務を果たさねばならぬ。農村各家の仕事は實に容易でない。政

治、法律、宗教、教育より農家に浸潤する所の映象は綜合して、社會の骨肉と爲り、皮膚と爲るのであるが、防長舊時の世相も、克く是等の態勢を顯發したものであつた。

戊篇 鎌倉以降戰國時代を経て錯綜せる事變

前回は鎌倉時代に關係あるお話を致しましたが、前後の次第が随分錯雜して居りますから、補足すべき残りを爰に申し上げます。

頼朝の行爲は、多少世間の批評を免がれ難きこともありましたが、慥に偉い優れた人であつた。繪に描いた頭が大きいのですが、昔の川柳に「拜領の頭巾梶原縫ひ細め」とあるのを見てもその大頭腦なりしことが知られる。西洋でもナポレオン一世の頭は後方が張つてゐて大きかつたとか、明治四年に岩倉具視が歐米諸國を廻つた時、ヨーロッパの人が岩倉は頭の大きな人だ、あれは必異相な傑物だ、といつて感心したといふ話があります。やはり頭の大きい人はそれだけ腦の力が強大でせう。

いつの昔か、鎌倉に行つた人が、八幡宮で寶物を觀ると頼朝の頭蓋骨を見せられたが、『どうもこれは話に聞いたよりも非常に小さいではないか』と云ふたらば、これは頼朝公御幼少の折の、頭蓋骨じやと答へたといふ、滑稽話もあります。兎に角鎌倉幕府の

出來た時の權力の盛んであつたこと、それから幕府が起つて、あれだけに押出して行つたことは、全く當時の武力の養成の程が知れる。殊に風景と氣候の良い湘南地方に、天下を驚さんと、中央の大舞臺を建てたのは、餘程氣の利いた人が考案したに違ひない。殊に武人を養ふのには、關東平野を後ろに控へてゐて、中々好い場所であります。今日でも關東の平野は軍隊を訓練するには、最も勝れた廣闊な場所でありますから、この邊のやうな廣い場所は他の地方には決して求められませぬ。現に近頃出來た神奈川縣の座間の陸軍士官學校へ行つて見ますと、學校の敷地が二十五萬坪もあり、隣の相模演習場は百何萬坪もある。かういふ廣い地面を遠慮なしに使ふといふのは、やはり關東平野でない、これ程の地面が纏まつて居りませぬ。それでは、鎌倉幕府の出來ない前は、この廣い所を何にして居たかといふと、千年以前には大抵牧場に使はれ、現に東京の近くにもそれを證據立てる地名が多く残つて居ります。

乗用にする馬殊に軍用として役に立つ馬を飼育する爲に、頻に馬群を放牧したので、それに原因の名前が澤山にあります。例へば、目黒、目白、目赤、目青といふのがありますが、目黒は黒馬、目白は白馬、目赤は赤馬。

目青は青馬の産地であります。又馬込村は産馬集散の市場などがありました。それから牛込といふのは牛を澤山育てたのでございませう。

牛は古い昔から農作用や運搬用に使つたものです。向島の方に行きますと牛島とか、牛の御前、牛田といふやうな地名が残つて居ります。

軍馬を養ふにしても、此様に廣くて、牧草を自由に宛行へる所は關西には迎もありません。關東平野ならば、さういふものが無限に使はれるから、牛馬も餘程快く安心して育てられたでせう。

それです。源平の戦さの時に、宇治川の先陣で、佐々木、梶原が、池月、磨墨の名馬に乗り競争して渡つたといふお話がありますが、あれも關東平野で育つた馬です。義經が鶴越を乗下つたのも、決して弱い馬では出來ないので、これに従ふ多數の鎌倉武士は凡べて、關東方面から連れて行つた強い馬で、働いて手柄を立てたのでありませう。それで當時の鎌倉といふのは、今日鎌倉といつて居る所だけではない、古い時のものを見ますと、今日の大船とか、藤澤の邊り迄も皆鎌倉繁昌の区域内に編入してあつた。大磯邊もその頃の郊外遊樂地として、多くの鎌倉人が遊びに出掛けた休息場でありました。

らう。小田原、箱根、伊豆等總て鎌倉時代の有力者の別荘であるとか、逍遙地、遊覽地等に使はれて居りましたが、妙なものでこの頃、建長寺の近所の北鎌倉といふ方面は、大船町に編入されましたが、昔は大船の方が鎌倉に取入れられて居たのでありました。また重ねて、大江廣元の爲に一言申し添へて置きたい。廣元は學者であり、中々智能にも優れた人でしたらうが、詰り氣質が濃厚過ぎたでせう。元來公卿派の學者ですから、そういふ方面のことに囚はれてしまつて、例の北條に對する處置は、如何にも内氣に遠慮して甚だ因循な所が残つて居ります。これは北條義時は如何にも剛愎で、他人の忠告を無闇に排斥したものだから迎も廣元の忠告は用ゐて呉れない。むしろ彼が利巧な暴威の煙に巻かれて言返しが出來兼ねるやうな始末でありました。

廣元が憤慨して、若し自刃でもしたならば、却て他人より、これはやはり同謀であつたのかと疑はれたであらう。そこで板狹みとなつて、死ぬる譯に參らず、已むを得ず病牀に老軀を苦めたのであつた。實に聖德太子の蘇我馬子に對する如き感がありました。けれども、やがてその子季光の代になつてから父の廣元の宿恨を慰むるため三浦氏の一族と相談して、北條の家をこの儘にして置いては、天下に申譯がない、自分はわが生命

を犠牲にして、彼を撃滅しなければならぬといつて、遂に旗揚げをしたが、早くもその陰謀が露見して、忽ち大失敗に終つたのであります。けれども、季光はわが一族は北條一黨の手にかゝつて死ぬやうなことがあつてはいけないといふので、家の子郎黨四百餘人を引連れて、法華堂に入り悉く此處で自殺した。之に従ふ女から子供まで皆いさぎよく立派に自害をした。季光等は、假令失敗とは云へ、大に腹の蟲を下ろし、廣元の靈魂もこれでこそ慰安されたであります。

後世でも、南北朝紛亂時代の諸忠臣、また戰國時代の忠勇なる將士等が、如何に武士道に於ける節義の尊きかを認識し、二ツとなき大切の一命を、深く倫理の上に鑒み何の惜氣もなく打捨てたのは、わが日本の武士精神ならでは、決して他所では見られぬことである。

近來防長人の先輩も、善く忠義の道を心得て時難に殉じ、皆潔く立派に死んだので、今日まで世人より非常に尊敬されて居ります人の多い中にも、慶應年間に水井精一、山本誠一郎、高橋利兵衛、この人達が薩摩の密貿易船に乗込んで、その上乘役の大谷仲之進を斬り、其の首を提げて歸つて來た。ところが中々議論が喧しくなつた。そこで水井、

山本兩人は、よろしい、われ等は尊攘正義の爲め打捨てられぬからやつたのだから、あと始末の責任は兩人が引受けますといつて、それから兩人は、大谷の生首を提げて大阪に行き、本願寺の御堂の前に右の首を高い棒の先に懸げ晒首にして、その下に高札を書き罪状を認め、その殺さなければならぬ理由を書き陳ねて置いて、兩人とも正座して立派に腹を切つて死んだ。それが大變な評判となつて、大いに世人の感賞を博した。

所がそのことを郷里の方に残つてゐた高橋利兵衛、この人は周防の島田村の人ですが、あの時は私も一緒に行つた。水井、山本の兩人が腹を切つたのに、私が知らぬ顔をして生きて居ては、武士道に對して心に咎められて耻かしい、私も兩人の後を追ひ腹を切らなければ男の顔がないといつて、室積の朝日山に登つてその事柄を書いて切腹して死んだ。水井、山本が始末をつけたから、今更何も死ななくともいふのだけれども、その頃の人は實に義が堅いので、遂に高橋までが腹を切つたのです。

廣元の事は、老衰と病苦その他の事情で、實に残念でしたが、されど季光の勇壯なる一擧があつたので、たとひ失敗はしても、廣元の遺憤を祭して、能く北條に抗争した衷情は頗る感動を引いた處置でせう。

承久の變は、義時の何とも申譯の出來ぬ皇室に對する大不敬罪で、實に恐入つた次第でしたが、後に時宗が精練した關東武士を率ゐ、蒙古軍を粉碎して、大日本を累卵の危難から救ふた。この時宗の大功は、千古不磨の偉勳で、實に義時の暴罪を償ふに足るのである。何と申しても元寇撃滅は、この國難を排除した絶大無比の大手柄で、この大戦には防長人の祖先はいづれも義憤して勇戦したのである。

それから段々時代が移つて武士の方ばかりでなく皇室の方も御内輪がもめて、御不和があつた。これは奈良朝の頃にも、平安朝の頃にもありません。それから花園天皇は學問も深く御出來の方でありました。御位を後醍醐天皇にお譲りになるのですが、その時に皇室の御内輪が持明院派と大覺寺派とに分れ、花園天皇は持明院派の系統で、天皇におなりになり、その後は大覺寺派の後醍醐天皇がお承けになつたのですが、其の際北條高時は亂暴者で頗る我儘をした人でありましたが、皇室のお内輪が何や彼やともめるのは、昔から皆御世繼のことでございます。明治の頃、京都で湯本武比古といふ人が「政權競争史」を著作しましたが、それに古い時のことが書いてあります。高時は、皇室の御混雜に乗じてまぜくることになつたのです。

後醍醐天皇の御代になつて、高時が無理な威壓をやりましたから、どうも北條は甚だ暴戻極まるといふので、元弘年間に後醍醐天皇が北條討伐のお企をなさつたのでありますが、彼の日野資朝、日野俊基の人々は學力もあつた人で、天皇を忠良にお助けしたのであります。この二人は後に鎌倉幕府の爲に殺されてしまひましたが、彼の俊基の物語は太平記に、落花の雪に蹈迷ふ、交野の春の櫻狩り、紅葉の錦を着て歸る、嵐の山の秋の暮……といふ東下りの文句で何人にも能く知られて居ります。

それで天皇は北條を討つと仰有るものだからして、北條の方も直ぐにそのことを知つて、兵を出して京都に攻め登つた。そこで天皇は京都に御住居が出来なくなつたから俄かに笠置山へ行幸になり、その中に楠正成を召されるやうになりましたが、北條の方は日本全國に網を張つてゐるから非常に強い兵力を以て、遂に笠置山も北條氏の爲に打破られてしまつた。天皇に對し何とも恐れ入つたことであるが、迎もお思召のやうには行かない。遂に高時は天皇を隱岐の島へ遷し奉つた。これは前の承久の亂の時に後鳥羽上皇のおいでた所へ、今また後醍醐天皇が御遷幸になつたので、寔にどうも憤慨千萬なことになつたのです。

その中に、名和長年などいろ／＼の勤皇家が起つて後醍醐天皇の御附をしてゐる人等と謀し合せて、ひそかに隱岐國から御潜幸でお歸りになり、伯耆の船上山に行宮が出来てお迎へすることになつた。それより諸方から勤王の武士がぼつ／＼集つて來ましたが、その際長門の方にも正しい考を有つてゐる武士が奮起しました。厚東とか豊田の諸族等が天皇の院宣を戴いて、何でも北條を討たなければいけないといふことになりました。此頃に萩の指月山には、昔の長門探題の城砦で北條時直と申す者が居りましたが、後醍醐天皇の御味方を致さぬので、長門の勤王武士が時直を打拂ひましたが、時直は瀬戸内海の方に遁れ、京都方面の佐幕軍に合したのであります。それから後醍醐天皇の御味方の勢ひが強くなつたので、諸方から忠義の武士が出來て來ました。新田義貞は、鎌倉に行つて北條の根據地を打ち亡ぼすに至つて、天皇の御威光は大變に勢がついて來たので、船上山から京都へ還幸になり、例の建武の中興といふことになつたのです。何としても當時は、餘程武士根性の教化が浸込んでゐたので、高時の如き世間に排斥された悪人物でさへ、死ぬる時はどうです。武士は人手にかゝつて死ぬるのは不面目千萬だといふて、菩提所たる東勝寺に行つて、高時に味方をした一族郎黨八百人が、悉く首

を斬るもあり、腹を切るもあり、順逆を問はず唯に主家のために死んでしまつたのです。逆臣として非常に誹られてゐた御無禮者の北條高時でさへ、隨従の武士がかくも潔く死んで、武士たるものゝ面目を保つたといふのは、日本人と外國人とは、全く根本精神に違ふ所があると思ひます。

さて新田氏も、足利氏も、最初は同様に朝廷の爲に働いたものです。新田氏も足利氏も俱に源義家の子孫ですから、同じやうな一筋のレールを行かなければならないのですけれども、さうでなく、足利尊氏は自分がこゝで、後醍醐天皇から反いて勝手自儘に新しく朝廷を設け、別に天皇を立て、自から幕府將軍となることにした。

後醍醐天皇の御子の護良親王は、中々お偉い方でしたから、このお方が邪魔になるので、淵邊義博といふ武士を鎌倉に遣つて、護良親王を殺害したといふ話があるのです。然るに今日では、實際はさうでないとの學者の説が頻に唱へられて居ります。

これは淵邊は勤王心の厚い忠義者でしたから、親王を害するに忍びず、却て親王の御供をして遠く奥州に逃れ、石巻まで落延びて、安全なる素封家の力に依つて、親王を災難から助け、自分もこの處に遁棲した。淵邊は親王を奉じてこゝで、餘命を終つたと云ふ。

深い傳説があります。それがため石巻には今猶ほ宮。何とか云ふて、親王の御住所のあとがあり、また淵邊村と云ふ名稱もある。これは決して忘れられぬ慥なる因縁を物語る證據であります。大塔宮即ち護良親王と淵邊義博の名前が、今以て石巻の地名に深く印象を留めてゐるのは、十分認め得べき史傳の證據と考へられます。かくも長物語を致しましたのは、吉野朝の事件と山口地方の事蹟が珍らしき關係を持て居りますから、史傳の素地を求むるためです、幸に重複を許して下さい。

また、石巻には、長門の名物で川村孫兵衛重吉の記念碑が建つて居りますが、何故か川村のことは、山口縣の記録では頓とわかりませぬけれども仙臺の記録には、明細に書いてあるのです。近頃、宮城縣の全貌といふ本の中にも川村孫兵衛のことがあります。それから宮城縣人物誌にも載せてあります。それに就き申上げたいのは、嘗て伊達政宗が豊臣秀吉の存生中、近江の國で領地を貰つたことがあります、豊臣氏が亡びた後に、改めて徳川家康からその地五千石を貰つた。その時政宗が見に行つて、この邊の事情を土地の老人より聞くと、川村孫兵衛といふ偉い者がゐるから、若し貴方が領土開發の拓殖業を起されるならば、川村に御相談になつたらよからうと申した。それから政宗は川

村を呼んで、お前を召抱へたいが私の所に來て呉れぬか、祿高千石やらうといふことになつた。その時の千石は大變なありがたいものです。その時どうして川村孫兵衛が承諾したかといふと、元來私は長州の毛利輝元に仕へてゐたが、關ヶ原以後不遇の爲に自分等はお暇を貰つて浪人になつたので、かういふ所に來て流浪してゐる、千石下さればこれから更に報國の誠心を奮發して一生懸命働かせよう、十分飯が喰へて餘裕がなくては到底立派な仕事は出來ないといふので、千石の約束で連れて來たのです。この川村は、もと長門阿武郡の人で諱は重吉で通稱を孫兵衛と云ふたが、仙臺に於ての功績は非常なもので、鹽釜から仙臺に入る貞山堀を鑿通し、また仙臺附近の開墾治水、土地の埋立、總てあの邊の産業的の開發事業は、悉く川村父子の功勞でありました。

これより後ち防長人の、奥州仙臺方面に往來せる者、虎溪和尚、井上某、内藤希顔の如きは、むしろ彼地に於て、聲名を知られたる人々で、多くは本籍をその地に移して事業功績の顯著なる人々が多かつた。その今日に知らるゝ證據は防長に用ゐらるゝ方言が、遙に飛んで奥州の方に共通して話されて居る。一例を挙げれば、ほいとう、おごうその外の詞がある。また、奥州白石噺の文句の中にも書かれてある。これこそ移住文化に因

るものでありませう。私は何分老軀衰朽のため、拙話も心ならず同じ事を繰返し、うつかり前後錯誤することがありますから、その處は偏に御高恕を願ひます。

さて延元元年に足利尊氏は、どうやら自分の方の景氣が宜いから、一つ旗擧げをして、茲で天下の覇權を握ろうといふ野心を起し、兵を擁して京都に行き大いに天子様に迫つた。そこで後醍醐天皇はこれはどうもけしからぬ奴だ。何をするか判らないといふので、天皇は勤王武士がお助けして比叡山へお遷幸になつた。そうすると諸方から勤王の武士が大分集つて來たので、尊氏も油斷をしたならどういふことになるか判らないとして、一旦身を隠して、更に振出しを遣り直さぬといかぬ、味方をしつかりと拵へなければ駄目だといつて九州の方に落ちて行つた。

そこで、尊氏は遠方に遁げて居らぬからといふので、後醍醐天皇は比叡山からお下りになつて、京都へお還りになつた。その間に尊氏は九州を彼方此方と遊説して、元來源氏といふ武族は、皇室を御助けして居る、鎌倉幕府も源氏である、足利氏は源義家直流の系統を引いたものであるが、今の世の中はどうしても源氏の者が出て治めなければ治まらないといふことを巧に宣傳して味方を集めた。今日の様な、便利な通信交通等の機關

に乏しい不便な時代で、世間の事情が丸で分らずそのうへ尊氏の勧誘が餘程巧いので、皆尊氏のいふことを信認して、中國、四國、九州邊は、ずつと尊氏と握手するやうになり、遂に尊氏は九州から都を指して上つて來た。尊氏はその時に早く瀬戸内海に於て、制海權を握りこの邊にある諸船舶を忽ちその手に集めました。

そこで長門の忌の宮に參詣して、尊氏、直義、義詮三人が連署した戰勝の願文を納めました。これは神社の古文書として今に存傳されて居ります。神の權威を借りて兵氣を勵ますなど、なか／＼上手な手段を運らしたものです。

それから尊氏は非常な優勢の軍隊を率ゐて來たので、さすがの楠正成も兵庫の湊川で、苦戰の末、刀折れ矢盡きて遂に敗戰殉死することゝなつた。時に延元元年の五月二十五日でありました。楠氏の戰歿は如何に運勢の已むを得ざる所とはいへ、天下のため洵に惜しいことでした。然るに尊氏は、彼の勢ひに乗じて、いよく反意を募らせ、それ行けといつて、多大の軍勢を率ゐて京都に入つて來たのであります。

そこで後醍醐天皇は再び比叡山に、お越になりました。尊氏の策略では、皇室の御系統が彼方此方と分れてゐるから、私の方では別に新しく天子様を、お迎へして立てるこ

とにするから 後醍醐天皇には御讓位をなさるやうにといふ譯で、尊氏が頻に御還幸を願つた。餘程言葉巧みにいふたものと見へて、京都にお還りになつた。後醍醐天皇の爲にも大いに忠勤を勵みまして、天下の平和を圖りたいといふのですから、御安心になつて、その言葉を容れて御還りになつたでせう。さうすると 天皇をば擁し奉りいきなりに、花山院に御幽屏申してしまつた。今度新しい 天皇様が御世繼ぎになるので 天皇には御隱居して下さい、さうして三種の神器をどうぞ今度の 天子様にお渡し願ひたいといふ、随分粗暴不敬な話ですけれども、お側の者もそれを防ぐことが出来ないから、仕方ありません。そこで、模造の神器をお渡しになり、天子様は本當の三種の神器を携へて、吉野の方に御遷幸になつた。これが大變亂の場面となり、これから尊氏の立てた 天子様を北朝と申し 後醍醐天皇の方は南朝といふ唱方になつて、兩方に分れてしまつた。尊氏の立てた方は京都朝であり、後醍醐天皇の方は吉野朝で、吉野にお籠りになつて五十七年間續いた譯です。

これからは、南朝に盡す人は中々苦戰で、楠正行は正平四年に、四條畷で戰死をするこゝとなり、又多摩川の近郊に新田神社といふのがありますが、これは新田義興を祀つた

神社であります。この義興も、渡し船の船頭に騙されて、正平二年に死んでしまつて、楠の方も新田の方も段々戦さに敗れましたので、これからは足利氏の威勢が悪運強く、あべこべに長い間を旺盛に續いて行きましたが、尊氏は延文三年に病死し、其後三十年を経て元中九年に至り、山口の大内義弘は、南北兩朝のために御仲直りの仲裁に入つて頻に南北朝の御平和を謀つた。幸にその御話が都合能くとのひ、それで南朝の方から先づ切り出して、北朝と御和睦が出来たのであります。その後義弘は、足利氏に對する感情から、應永六年に足利氏に、敵對行爲のため反亂の姿となり、遺憾ながら遂に泉州堺で討死をしてしまつたのであります。

それから舊來北條、足利と云へば、いつも不忠者の代名詞にして居りますが、まさかに北條も足利も、上に對し決して弑逆の罪を行ふたことはない。無禮不敬は固より天下の憤慨する所だけれども、まさか蘇我、藤原の如き大逆罪は爲さなかつた。この蘇我や、藤原は、殆んど言ふに忍びざる悪いことをして居る。とても北條、足利の思ひも及ばぬ罪業を盡して居ります。然るに世間では蘇我、藤原を、私共の憎む程に誰も追撃痛論していません。今日歴史を論究する學者があるけれども、北條足尊以上の罪迹あるものは天

下國家のために、深く大倫の違背を譴責し冷く忠孝彝倫の道を訓諭しなくてはなりません。苟もそれ等逆行爲が長く國家を殘害する惡苗なりと認めたら、どこまでも芟刈し、すつかり根絶して清淨安全の好天下に建直さんければならぬ。この國體なり皇室なり國土なり民俗に對しては、億兆一致死力を以て安全に鞏固に擁護せんければなりません。世の中は善いこともあり悪いこともあり前には憎まれても、後にはまた喜ばれることもあります。世道の回轉變化はなかく妙なものです。一人の生涯がそれであるが、況や數百年を回顧すると、長い期間には果して種々の奇變があります。足利も三代義満、六代義政など、決して有難い人ではなかつたが、併し風流文學に力を盡し、今日遺つてゐる美術や工藝の方面には、室町、東山時代の努力が非常に趣味を存傳して居る。今でも當時の作品は何人も貴重してゐます。あれだけの長い間戰國時代の擾亂を経て來たけれども、今日に遺されて當時の兵燹を免がれた美術工藝の作品は、不思議にも今尙ほ澤山に遺つて居るのであります。

これはなかく珍らしいではありませんか、奈良朝以來、足利時代に至る美術工藝品が、今日まで傳つてゐるのは、この國體的國民性の恩恵でありました一つには、宗教信仰の力

により貴重藝術の調和が、非常に都合よく行はれたのであります。また例の君臺觀左右帳記を觀てもその頃の、趣味の光景が伺はれるのであります。先年美術俱樂部の賣立ての時に、國司の茶入れといふものが出ましたので、私も見に行きましたが、これは鳥渡見ては丸で泥をまぶつたやうな、粗末な品物でありました。然るにこれが非常の珍らしい名品と云ふので、誰が入札したか知りませぬが、驚くべし二十萬圓といふ高價の入札になりました。何故そんなに珍重されるかと申すに、これは君臺觀左右帳記に載つてゐる名器じやと知れました。今一つ變つた話があります。これも東京美術俱樂部の賣立のことですが、或る防長の名家の不用の書畫道具類を賣拂つたその中に小さな銀製の小箱に花鳥の毛彫りをした古い箱がありました。山口でむかし道具屋から五圓で買つた物ですが、それをこの度美術俱樂部に出したらば、二千五百圓の落札となりました。勿論二千五百圓だから喜んで手放したてせうが、その時の話がなか／＼面白い『一體あんなつまらぬ物に二千五百圓出すとは莫迦な人』だと笑つた所が、その引取つた人は却つて『こんな珍貴の大名器を二千五百圓で手放すといふ人はいかにも盲目だ』といつて笑つたから『それではこの後貴方が手放す時はどれ位ですか』と聞いたたら、『私はいづれ三萬

圓位なら手放す積りだ、盲目ばかり揃つて安く賣つたから誠に仕合せました』と申したさうです。其買主の説明に據ると、此品は藤原時代の全盛の時に出來た頗る珍らしい古い毛彫細工で、今日ではとても珍貴の稀少品で、奈良の稀寶の中にはあるだちうが、容易に得られるものではない。實に珍しい結構なものだ、私が御得意先に持つて行つてかういふ古代美術工藝品を喜ばれる方に見せたならば、きつと三萬圓はたしかに受取つて見せると申したさうです。防長の方からも五圓の品が三萬圓にもなる様な大名器が出て來るではありませぬか。大内時代に於ける山口地方は、その前よりして文學技術諸種の工藝産業が、意外に盛んでしたから、古くは京都よりして、平安朝から室町時代の珍品が澤山に參つて居つたこと、思はれます。明治初年の頃に、山口附近の寺院から、美術工藝品の持去られたのは、實にその慥なる證據であります。

それからまた、吉野朝は五十七年ほど續いたのですが、建武中興の時に、吉野朝で紙幣が出來たといふ話があります。吉田賢輔の大日本貨幣史の中にも書いてある。されど如何なる物であつたか、實物の型式が分らぬから、明かに書いてありませぬ。これは色々詮索して見ると、固より建武の時に造られ使用されたのではあろうが、決してこの時始

めてわが國の紙幣が造られた譯ではない。紙幣の創始はなかなかズツト古い時に始められたものと見えます。往々建武發行説を言ふ人もありますが、これは全く建武の頃に發行使用されたことであつて、その創製は餘程古い以前であります。日本の紙幣の前身は千年以上も昔から早くも使用されたらしい。戰國時代や江戸時代に使はれた物とは形式が違ふて居る。戰國時代には軍票式の性質であつて、權威の盛なる武家豪族がその領内に、その有力者の署名・證印を押したのが、堅い信用のために、物資の代償として安心して受授せられ、使拂はれたものであります。またそれより前のこと、なると、神佛の守札である。これは平時に澤山使用された。神佛には偽はない。神佛程正しい物はない、實にありがたいとの信仰の念からこれ程正實なる通貨はないとして、流通せられたものであります。後世の紙幣には決して紙幣とは書いてない、政府の物もあり、銀行や色々の物があるのですけれども、紙幣といふ字は書いてない、熊野三山も、高野山も、比叡山も守札を以て通貨として用ゐたものと承つて居ります。それから、建武中興吉野朝の時の紙幣はどうかと聞くと、日本銀行にも大藏省にも話だけはありますけれども、現物は一向ありません。されど防長領内に紙幣とした守札が残

つて居る様に考へられる。彼の牛王寶印の札は往々通貨の役を致したものに相違ない。江戸時代となつては、大名商人その外有力な方面では、それ／＼紙幣の發行を許されたが、その以前から威力の盛んなる武家また大社大寺また農村素封の富豪などより、土地米穀その外各種の物資に換える通貨は皆昔の紙幣である。その淵源は凡べて、これは神佛の祈禱の守札であつた。その證據には、江戸時代に遺された諸方の藩札や、商札の上部には皆世人に親しみの深い、神様か佛様の尊像が現はしてある。殊に今日の佛像ではない、印度佛や千手觀音とか、十一面觀音とか、七福神その他吉相を喜ぶ神體が、寫されてある。また龍・虎・鶴・龜・松・竹・梅・麒麟・鳳凰その外神聖なる禽獸草木の繪が書いてある。

この札を持參すれば、何時でも現金に引替へてやるといふことが、武家政治の時代の紙幣には精しく書いてある。その引替所の記名に札六兵衛とか、御札太郎兵衛とか書いてあるが、とにかく御札また札といふ字を苗字にして引換商人の署名したのがある。防長地方に參ると、上代の代用紙幣の遺物も、藩政時代の紙幣も慥にその正物が見られるのであります。

それで神佛の信仰によつて作られたものが、お札であつて、これを持つてゐれば、幸福が得られるとか、願が叶ふといふので大事にする。神様佛様位正實なものはない、一番たしかである。間違ひがない、安心じや。古い時には物々交換でありましたが、物々交換では此方の不用な物と、向ふの不用なものと互に不用の物を持つて来た時に若し兩方が同様に不用の衝突であつたら、結局換へることが出来ないの、その媒介物として、石とか貝殻を金の代りに使つたのですが、これも厄介でいけないから、後には金銀を媒介物に作つて貨幣が出来たけれども、これは後世の話で、ずつと古い時には御祈禱の御守札が、媒介物となつた。だから小さい物には無いかも知れませぬが、何處其處の土地が買ひたい、家を求めたい、山を買ひたいといふ時には、その神様や佛様の神聖な御札を持つて行つて、金銭に代へて始末をつけるといふことは、古くからあつたらしい。今日東京に居る學友また日本、支那、西洋のことをよく研究して居る僧侶に會つて聞きますと、如何にもさうだ、古い時代神佛の信仰によつて御札守を金に代へて通用させた時代があるやうだといつて居ります。

鎌倉幕府は政廳を鎌倉に置いて、出張所を京都に設けたが、足利幕府は政廳を京都と定めて出張所を鎌倉に拵へたのである。彼の執權も此の管領も、善いこともあれば悪いこともある。爲政者の眞意は、まさかそうでもあるまいが、武人政治の意地で、何も上下の行爲が通達せず、甘瓜苦蒂、物に全美なしとやらで、存外に厄介な出来事は絶えなかつた。後には應永の亂、永享の亂、嘉吉の亂、應仁の亂等随分永い間混亂があつて、爰で遂に統一を失うた爲に戰國時代となつたのであります。それからもう、足利將軍を全く侮蔑して、何も言ふことを肯かない。關東管領とか、鎌倉管領とか申して勝手氣儘なことばかりやつて、中央の指圖を用ゐませぬ。關東は廣くて飯を喰ふに困らぬ程の領地を持つてゐるから中々強い。それより、皇室はだん／＼式微を感ぜられることゝなり、幕府の方も自然衰弱した。群雄は割據して所謂弱肉強食で、ヨーロッパの今日のお話にも似たやうなものでせうが、北條早雲といふ人が出て来て色々のことをやり出す。この人は後に小田原を根據としましたから、小田原に度々おいでの方は御氣附きてございませうが、早雲、氏綱、氏康、氏政、氏直の五代の間、この所に根據を構へたのであります。

今日は諸方に水道が出来ましたので、別に珍らしくはありませぬが、小田原は古い時

から町中全體が水に困らぬやうにしてありました。されど若し早川の水を用ゐたならば、早川は人の目に着き易いから何かの折に叩き破壊されるので、外の方面から山間の清き谷水を引いて来て居ります。これは如何にも巧に考へたものであります。また小田原の近所は一帶に梅の名産地で、地名にも國府津の隣りに梅澤と申す所がありました。いづれも皆軍用食糧のために使はれ平時は藥劑染料に用ゐられた。防長でも戰國時代から諸所に梅を植え付けられ、特に慶長以來、萩の城下には、谷間や川堤に、凡べて梅を栽培してあつたが、今日では凡べてなくなつて、洵に惜いことである。

また甲州の武田、越後の上杉、駿河の今川、房總の里見、鎌倉管領山内の上杉、この上杉の家臣に太田道灌といふ名士が居りました。それから信州には村上、東北地方に伊達、葦名、佐竹、江州に淺井、朝倉といふやうな著名の武人が割據して居りました。それから武田、信玄は、更に別派の武將でしたが、嘗に武力の英雄のみならず、その領土の統治に骨を折り善政を施した事蹟が少なくないのであります。今日でも甲州に行つて御覽になると判りませうが、私の五十何年前甲州に行つた時の話ですが、路傍の人に武田信玄の遺跡はと尋ねるのに、一向返事を致しませぬ。これは信玄公或は、信玄様といふ風に

鄭重に敬稱を付けなければ誰も返事をして呉れないのです。信玄は學者間に、隨分非難のある人ですが、右の如く甲州方面に、かくも深き恩徳を残して居るのは、實に敬服の至である。

これは防長藝備に於ける毛利元就、水戸地方に於ける徳川光圀、江州の中江藤樹、相州の二宮尊徳はみな同様である。今日は世界的に、惡風俗が流行して、全く徳性の涵養が缺けて居る。政治も戦争も經濟も外交も、人間萬般の事が、道德の本性から發育されねばならぬ。いづれの國に於ても、國人がその支配級の長者に對し、必鄭寧なる敬稱を以て、是等の人の死後に於て、永久に追敬して居る様になりたいものであります。わが防長人は地方の有志と俱に、切に根本的教育に於て倫理道德の上に、深く留意しなくてはならぬ。

それから紀州より河内にかけて畠山、美濃伊勢に北畠、中國筋に宇喜多、赤松、山名、大内、毛利があり、四國には三好、河野、細川、長曾我部、九州では、大友、龍造寺、島津、伊東といふやうな人々が、互に雌雄を争ひ戦争をしたのです。

前に防長には、關東武士の系圖があると言ひましたが、已に武田信玄の娘が大和宗恕の

家に嫁したのですが、その系圖を持つ大和の家が、今でも長州の方に存續して居ります。源平大戦争の後は、關東系圖の人々が、防長に澤山參り、南朝・北朝變亂の間には、防長方面の人々も、東北に向つて、移住した者が少くなかつた。

さて織田と豊臣のことですが、信長はかくの如く騷亂が続いてはいけなから、何とかして天下の和平統一を圖らう、無論朝廷に對しては、忠勤を擢んでるが、武家を統御して平和の政治を行はなければならぬといふので、政治上の功績も相當多かつたが、惜いことには、どうも信長は餘りに短氣で痼癖の強い人でしたから、これが爲に往々人氣を失ふことが多く遂に空しく非命に斃ることとなつたのは、如何にも残念至極なことでした。

次に豊臣秀吉、これは如何にも豪邁闊達な人で、凡べて拔目がなく、深く皇。室。尊。崇に心を盡し、その他内外一般政務に、英雄の心を收攬すべく骨を折り、巧に武家を壓服し、天下の武人は、いづれも秀吉を敬拜して、到底頭を上げることが出来なかつた。實にそれは妙なものです。犬でも自分より強い犬に逢ふて向ふの恐ろしい相貌を見るや尾を捲いて後にすぎる、顔だけ見て全く畏伏してしまふのであります。まして秀吉は大なる

ライオンであるから、犬羊輩では迎も叶はない。

或る時秀吉が家康に向つて、今度新しい城櫓の普請が出来たが、俺もまだ見ないから二人であの櫓に登つて見やうぢやないかといつて、櫓の窓から乗り出して、俺はもつと下の方を見たいから、お前帶を擱んで来てくれといつて、家康が秀吉の帶を擱んでみると、秀吉はずつと身體を差出して、下の方を見て居る。若し家康が一寸でも手を放したら、逆さまに墜ちて頭が碎ける。併し秀吉は能く家康の心中を察し決して家康はとても放しはせぬと高を括つて居た。家康の方も秀吉を殺しては、自分も助かる譯はない。必ず俺も命を無くしてしまふ、下手をやると、折角の事業が、こゝで水の泡となるぞ、迎も今の所ぢや秀吉には敵はないから、さういふことをやらずに、どこまでも秀吉をちやんと助けた方が自分の利益だと思つたから、無事に櫓の見物を濟せて歸つて來たといふ話があります。

それから近い頃の話でしたが、依。田。百。川といふ學者が居りました。彼が申すのに、私は大抵の人に會つて負けたことのない勝氣の強性者でしたが、維新の際、私は佐倉藩の役人を勤めて居つたので、一日藩務を以て、兵部省に出頭し、兵部大輔大。村。益。次。郎に面謁

して種々陳情したことがあつた。然るに何とも言はれぬ大村の威力に打たれて驚いた。私は生れてからあんな人に會つたことがない。私は自分でも随分怖しい面相をしてゐるとか、怖いとか人に言はれるが、大村に面會すると、洵に態度の落付いた長者でしたが、仰見れば眼光射るが如く、どことなしに威力に壓せられ、何だか身體が縮み上りさうな氣持がした、どうも偉い人といふのはあゝしたものかと感歎しました、と述懐したことがあります。

私も子供の時に父の所で、大村先生を見ましたが、此方が子供だつた爲か、面相は和氣藹然、恰も春風の吹過ぐる様な感じがしました。また私の老友に、防長人で兒玉少介といふ人がありましたが、嘗て彼が知友竹田春風から、獅子頭の剝製にしたのを形見に貰つて持つて居りましたが、或る時自分の内の車夫に『隣家に非常に激しい猛犬がゐるか、あれを連れて来てこの獅子の頭を見せようと思ふ、そこでお前何か毛布でも被つて顔へ獅子の頭をくつ着けて庭の木蔭から出て呉れ、そうすると猛犬がお前を見てどうするか試して見るのだから』と申付けたが車夫は『それは困ります、若し飛び付いて私の顔に噛みつくといけません、そんな危いことは御免蒙ります』といふので『それでは、

此方で丈夫な大い綱を付けて一生懸命に引張つて、お前に飛びついて行かないやうにするから』『そうですか、それぢややつて見ませう』といふことになり、彼の猛犬を引出して来てヒョツと見せた。ところが意外々々、その猛犬は飛びかゝる所ではない、丸で小犬が叩かれて尻尾を巻いて尻古垂れたやうに、尻をじつと下げて、頭も下げてしまつて獅子の威嚴に撃たれ縮みあがつて動くことが出来なかつた。彼の昔の三國志に、死せる孔明生ける仲達を走らすとありますが、孔明がやつて来たぞといふと孔明は疾くに死んで居るけれども、その位牌を持つて来たのに、これは迎も堪らぬといふで、仲達は走つて逃げたといふ話です。さういふ風に秀吉はいざと言ふ時は、大獅子となるのであります。

大村兵部大輔の話で、鳥渡申上げたいことがある。これは今申すべきでない、ずっと後日に申すべきですが、話が脱線して飛離したのでせう、その邊は御許しを願ひます。大村は幕末の頃から維新當時まで擧用せられて、夙に西洋學の先覺者であり、能く海外の事情を知り、特に醫學と兵學には精通し、また維新改革の際には、征討の戰略やら、兵制の改造やら、後年陸軍や海軍に於て設備を必要としてゐた諸般の經畫を、凡べて考

案して當路者に建策したものが、いづれも採用せられ、非常に役立つたものでした。大村が西洋流の戦法を説くのは、彼としては普通のことではしたが、面白いことにはわが國の古英雄、殊に戰國時代の名將勇士等の、勝れたる軍事行爲を悦び、その戰略智謀の巧妙を感賞すると同時に、専ら武人郎黨に對し武術の鍛錬のみならず、道德の修養に力を盡し天下の人々をして、君臣主従の間に深く忠節義理を辨へしめ、實に衆心一致せば城よりも堅しとの氣持で、皆能く部下を統率した古名將の物語を、晩酌後に門下生を集めて聞かせられたが、これは古英雄が武卒を教習した智能は、悉く日本精神の眞髓を發揚せるもので、西洋人の頭腦には、トテモ了解することの出來ない無比の惠賜である。われ等苟も内外の學術に志す者は、屹度この點に注意して温故知新の名訓を忘れてはならぬぞといふ講釋である。

さて南北朝紛争よりして、天下の禍亂を捲起し、所在の武人互に節義を唱へて戰端を開くこととなり、防長のみならず諸方とも、朝野の事情形勢が分らぬので、恩李怨牛、朝に甲を去り、夕に乙に付き、徒に大節を變ずるものが多かつたため、遺憾ながら南朝方の不利と爲り、遂に御悲運を吉野朝五十餘年間の物語を聞くこととなつたが、後世に至

り、朝廷は全く南朝の御正統なるを御詮議ありて、深く後醍醐天皇の叡旨を畏みて、尊靈を吉野神宮に祀り、また諸皇子の御忠節を拜して、護良親王を鎌倉宮に、尊良 恒良 兩親王を金崎宮に、懷良親王を八代宮に、宗良親王を井伊谷宮に祀られ、尋てまた南朝のために、専ら忠節を盡くし、能く武臣たるの本面目を現はし、後世の模範たるべき諸名工のために、いづれも神社を建設して、永く後世にその勳績を信仰せしむることとなつた。その主なるものを列記すると、楠正成を湊川神社に、楠正行を四條畷神社に、新田義貞を藤島神社に、北畠親房、同顯家等を北畠神社に、また阿部野神社に、また靈山神社に、それから結城宗廣を結城神社に、名和長年を名和神社に、藤原師賢を小御門神社に、菊池武時以下一族を菊池神社にそれ〴〵祀られた等で、この忠君節義の表彰があつてから、益々天下の人々が大義名分とか忠節奉公の貴ぶべき所以を知ることとなつた。防長に於ても、藩政時代に教育家は、講學の資料として、多く南朝の事蹟を説き、維新の際は、明倫館に於て楠公祭を行ひ、青年學生の精神を訓養し、以て勤王報國の至誠を奮勵させたものです。

己篇 戦國時代の防長文化の態勢

前に戦國時代の様子を概略申上げましたが、普通に戦國時代といへば、如何にも無法な亂雑を極めたやうに思はれますけれども、決してそうでない。長い期間には随分弊害もありましたらうが、又後世の人から感謝されるべきことが、この時代に養ひ來つた面白いことも數々あると思ひます。

足利時代からずっとその末に至る間のことですが、あの武士道の教育訓練といふものは、戦國時代が一番力を盡したものであります。その前後は、あんな訓練はとも出来はしませぬ。戦國時代といはれる時程のやうな猛烈な訓練はなかつたのであります。何が爲にさういふ風の烈しい訓練をするか、武士道を深甚に鼓吹するかと申しますと、つまり偉い人間を澤山拵へようといふのであります。

群雄が方々に割據して居りますから、その割據して居ります群雄が、銘々伎倆の競べ合をして互に領土を堅固に保ち失はないやうにしよう、餘力があれば更に土地を併領し

て行くこともあるが、それよりも自分が持つてゐるものを失ふてはならぬ。それには非常な力が入る。それには智仁勇の偉い武人を澤山養ひ、死を以て忠義のために働くといふ、眞劍の道徳の本性を精練することてなければならぬ。さいふことの働きの爲にあつたらよからう、かうしたらよからうといふのには、簡単な話では逆もその訓練は出来ませぬから、先づ第一に道徳の基礎から忠孝本位の武士道を、正面に立てゝ行かなければならぬ。それから節義の觀念を重んじてはならぬ。義理といふことを忘れてはならぬ。凡べて人情に基いてやらねばいけない。それから任侠といふやうな幾分過激性を帯びたる道徳の發揮です。心の中の光明を放つ血液の彩色をうつすやうな氣分で働かせなければ氣勢が揚らない。

愚圖／＼した鈍い訓練では、到底偉い人間は出来ないからして、戦國時代の武士教育は今申しましたやうに、忠孝とか節義とか義理とか人情とかいふやうな正しい倫理の教訓を始終忘れないやうにやつたものですから、かの元龜天正時分の壯烈な行動が現はれ、武人の典型となつたのも道理であります。源平の戦の折に、奈良の興福寺や東大寺を焼拂つたけれども、不思議にも、僅に壁一重の隣地にある正倉院が兵火にかゝらず、今日

現に正倉院は千二三百年を経てちやんと無事に保存されてあるのではありませんか。現に興福寺などは火で焼けて居り、その火の手が風に煽られて燃え擴がるのに、垣根一重を隣接して居る正倉院が一向焼けてゐないのは、焼けないんぢやない、焼かなかつたので、ツマリ焼かないやうに善く護つて居つたからである。これは皇室のものである、又佛體の靈場であるからこれを汚すやうなことがあつてはならぬといふ考があつたので、全く焼けなかつたんです。何も決して、偶然に焼けなかつたのではない、いづれ神佛を信仰して大切に守護しなければならぬといふので、戦争の眞最中にもその間に散在して居た有名な神社や、寺院が焼けずに今日まで遺つて居るのが澤山あります。又軍兵は寺へ立籠つて争闘をすることがあるから、己むを得ず敵を打拂ふ爲に焼いた寺もありますけれども、立退きさへすれば焼きはしませぬ。かの有名な甲州の惠林寺ですが、織田氏の兵が寺を取圍み、快川和尚に立退けといつたけれども立退かないから、己むなく焼いた。若し快川が織田兵のいふことに従ひ腰拔坊主で頭を下げたら、焼かなかつたかも知りませんが、そこにこの時代に義勇的に訓育された快川の武士根性が現はれた譯であります。例へば奥州の方の争亂があつて、——奥州の方には北方の軍人の争ひも相當あつ

たんですが、かの平泉の中尊寺は美術品として尊重されて居りますが、今尙ほその重要な物だけは疵つかずしてそのまゝちゃんと言つて居ります。これもやはりさういふものを尊敬して保護するといふ日本武士の把持せる立派な道義觀念があるからです。

また繰返して申しますが、戦國時代の武人は斬合ばかりするのではない、頭に立つ人は深く道徳的の立場を考へて武道の訓練に務め、總ての方向を誤らないやうに心掛けた。

つまりその當時の人物を忠義の道に養成することを互に勵ました。敵もさういふことをやり、味方もさういふことをやる。雙方ともに偉い人物を澤山造つて置かぬと到底敵軍には勝てない、又自分の領土をも安全に護つて行くことは出来ぬぞといふので、互に偉い傑物を召抱へて眞劍に訓練をした。

それから又戦争をする爲に要する所の資財も勿論これに應ずるだけのことをして、方々で産業政策を起してその領内に、根本的に武士道を鼓吹して行つたのであります。

戦國時代の諸強國に割據せる武將は、深く心身を鍛錬した英雄が多うかつた。智力と兵力と財力の三ツが鼎立して揃つて行かなければ、畢竟最後の勝利者となれないと云ふことは、固より承知して居りました。武道も智能も十分の修業を凝らして強くなることが

大切なことですが、又それよりも心術義理を十分に深切に辨へ、あの人の爲ならば死んでもよいとか、あの人のいふことならば何でも従うといふ程に、心服敬念の深い人があるなれば、少々の腕力や武器より勝さつて居る。人心が集結一致して、敢然わが命を投出して働くといふやうな者が澤山出来るのですから、さういふ者を一括して精神的一致の總動員をしてかゝらうといふ仕組で、大勢の人心を集結して行くことは、既に戦國時代のお話が事實の物語を澤山持つて居るんです。武田信玄が山本勘助を抱へるためにいろ／＼の物語がありますが、實に雙方とも偉い人が出合つたので、立派なことが出来たのであります。その物語や逸話が今日澤山に傳はり、吾々どもを感激させることが多いんです。

當時の主將たる英雄は、先づ如何にして武人の心根を教養すべきやに付、深く工夫を凝らした。武道武藝と云ふだけでは、結局不足であるから、何としても精神を鍛錬するには、學問修養の力に頼らなくてはならぬ、性理學的儒學を以て頻に教習を務めたが、矢張その目的を向上せんとするには、宗教修業の効果を頼むべしとした。しかし佛教の高尚の理論も、武士の心膽を練磨するには、これまた物足らぬ心地がする。三論宗も、法

相宗も、華嚴宗も、律宗も、天台宗も、眞言宗も、凡べて戰場に勇進する武人に對しては、猶ほ適切ならぬものと考へるやうになつて、遂に禪宗の學說教化を採擇して、これを武人の決心を斷ずるために、特に適當せりと考へた。鎌倉時代に渡來せる禪僧、即ち達磨宗の人才は、頗る優秀の人格者が多く、布教次第に廣汎に涉り、それから戰國となつては、鎌倉以來の教義を受け、殊更に禪學修業が、武士に歡迎せらるゝことゝなつた。北條時頼、同時宗、金澤顯時、太田道灌、北條早雲、楠正成、大内義興、同義隆、毛利元就、武田信玄、上杉謙信、その外多くの名將が、武斷の決心を得るため、禪學の趣味を喜んだものである。碧巖錄も聽いたであらう、無門關も讀んだであらう。大用前に現はるゝときは、銀山鐵壁も、須らく透過すべし、全機活潑の處は、石火電光も、猶ほ是れ遅しと、聞いたなら、何人も奮起するであらう。況や癡人猶ほ辱む野塘水とか、一劍天に倚つて寒しとか、心頭を滅却すれば火もまた涼しとか、喝破されたならば、何人も一命を惜まず、一死を怖れないであらう。白刃を蹈み、水火に投ずるは、尋常の一茶飯事であります。禪學活用の功力は大に感謝すべきである。當時防長に於ける禪學の功績も、餘程顯著なるものがあつた。

小田原の北條等も戰爭ばかりでない。領土統治のために立派な治績を残して居る。武將も餘程努力しなければ、とてもあんな手際は揚らぬ筈です。早雲は偉い人でしたが、それから氏綱、氏康の時は、武田、上杉、その他と頻に武力を争ふたけれども、その後氏政、氏直に至り、到頭勢力が衰へたので、外の英雄と争ふたけれども到底力が及ばず、遂に天正十八年に、秀吉の爲に大攻撃を受けて、滅びましたが、さすが大英雄秀吉すら天下の大軍を擧げて半年以上もかゝらなければ、小田原城を落すことが出来なかつたのです。

小田原城攻の當時は譜代恩故の族衆が結束し、どうしても此城を潰してはならぬ、北條氏に報謝の爲に何所までも喰止めなければならぬといふ人々が多うかつたから、あれだけ長期間の持久戦を續けることが出来たのであります。

今日でも小田原方面にお出でになると、口碑に傳はる物語がだん／＼ありますが、小田原の北條の善く武士を養ひ、領土を安全に保つた政策については、中々骨を折つたのであります。後世北條流と云ふ兵學の傳へられ、築城その外幾多の遺法のあるのは、みな小田原北條から教へられたものであります。

この際北條氏の爲に堅固に力を添へて呉れたものは、制定された軍律です。これは戦時ばかりでなく、平常はその領土を治める爲にその統治に適する所の法律、規約を以て嚴重に領民を訓育したのであります。

前に牛王寶印の誓紙の事を申しましたが、起請誓紙といふ起請文を書いたのは固より主として熊野牛王の寶印のお守札でしたが、その神文として、一般に用ゐられた文句は、實に小田原北條の文例が長くその範を残したのであります。

中世の山口を物語るならば、他方に及ぶことが少くない。武家法度には、彼の貞永式目建武式目と、大内氏壁書を聯想し、外郎ならば、山口と小田原を聯想し、織物には、山口と堺を聯想し、染物には山口と京都を聯想し、陶器には、山口と瀬戸、唐津を聯想し、彫刻漆工には、山口と鎌倉を聯想し、藥種には、山口と長崎を聯想し、酒には山口と伊丹を聯想し、茶には、山口と信樂を聯想し、螢には山口と宇治を聯想し、釣柿には山口と大垣を聯想し、紙には山口と土佐、藝州を聯想するなど今日も猶ほ昔を偲ふものが澤山知られて居ります。

むかしの山口は、寺院文化の映響を傳へることが多うかつた。奈良六宗やら、鎌倉五山

やら、御話は色々ありますが、何と申しても京都五山のこととが廣く残されて居ります。今日でも山口方面で、名前の知られてゐるのは、大抵禪宗派の名刹であり、戦國時代名家の遺墨、また元明頃の舶來名畫幅などを残して居るのは、全くこの方面の好事家たる保護者の惠澤の力なりと謂はざるを得ないのであります。

むかし藤原政治の専横を恣にした頃、莊園の制を設けて、頻にその氏族の威福を肥やすことに務め、到る所百姓町人その他の庶民、これ等の苦痛は、言語に絶えたるものが多かつた。然るに莊園の制が廢止せられてから、農村は頗る安泰の舊慣に復する様になつた。固より戦亂甚しき時ではあつたが、苟もその領土の治術に關しては善績を得るために努力して、農村政治の破壊防止に務めた。併し人に依り所に依りて、往々馬を牛に乘換へたものも少くなかつたが、心ある武將は、領土民族の和順を得んとて、専ら道德的原理に基きて、法律箇條を設けた。舊來中央の權勢家が、國司莊司を使令して、苛斂誅求を恣にした遣り方も、寧戦國時代の武家の政策で、民衆を安堵せしめたのは、驟雨後の晴空を見る心地であつた。公租納税に關する徵收の制定、小作法の改正、間地開拓の獎勵、河川沼池を改修し、墾田交通に對する一般工事、また道路橋梁、それから通信旅

行等に至るまで、その時代に適應する、改善の方法には、極めて細心の注意を拂つたものであつた。

防長に於ける大内氏の文事的政治は、應永より天文に至る約百五十年間で、その精厚なる文化は滾々諸方面に浸潤し、その郷土の民衆に對する文治上の行蹟は、今猶ほ遺風を感謝せねばならぬ。町家には街區店舗の統制を定め、大年寄、年寄、觸頭、行司の諸職を設けて、商業交通その外の、運行を滑らかにしたものです。また農家には、隣保互に助け、急難相救ふの徳政を施して、専ら郷黨の和平を構成し、早くより隣組の制を設けられて、五人組も十人組も、その他郷人村民の生産的能率を進行せしむるため、民間通俗の制度を作り、上意も下意も平素エレプター式に疏通して居つたことは洵に結構であつた。

日本帝國は天地開闢以來、この大洋上に卓立せる雄偉の大。海。國。である。故にわが長防も波濤を以て環繞しその海水の流注する所は、外寇を防禦する城壁と爲り、海外交通の航路とも爲るのであつた。この事は固より太古から變はることなき事柄であるが、この戰國時代に於ては、更に航海貿易に務めた話が傳へられて居る。彼の勘合船や朱印船の物

語を列擧するならば、第一に大内氏の經畫努力を稱揚しなくてはならぬ。此事蹟を調べたなら、天下何人と雖も、大内氏またこれに従ふ防長沿海の船頭、漁夫等が、如何に骨を折つたかが知られる。

文中九年南北兩朝御平和にて合一せられ、洵に結構なことでありました。足利義滿も非常に安堵したと見え、應永四年その好奇癖を記念するため、京都の北山に金閣を起した。同八年には學僧を明國に遣り、書翰を明主に贈り、儒書を取寄せた。それから十一年には明國の使者が勘合符を持つて來た。爾來足利氏の明國交通は、次第に旺盛に赴き、支那に對する通商貿易のことは年を逐うて繁昌するに至つた。山口の大内氏も、海外交通。明。國。貿易には頻に心を用ゐた。その海上權が強大であつたから、勘合印は遂に大内氏に預けることとなり、そのため京都その外都會地より、明國に行かんとする僧侶、學生、商買、工匠、その外、苟も渡航に志あるものは、いづれも大内氏に到り、勘合符を乞得て安全に渡航したものです。大内氏も義弘、盛見より義興、義隆に至る間は、主として五山文學の學統を承け、京都や堺などより工藝美術の趣味を薰陶したものである。それ故に當時の山口市街は、小郡國道筋までは、蔓棟を並べたる家續きて、今の東津より二

島。名。田。島。秋。穂。までの灣港は、外海を走航する船舶が多數に輻輳しました。樫野川も昔は雄大でありましたから、海上より遡る小型の船は黒川、平井の邊までは、自由に荷物を輸送したとのことである。而して樫野川の水源地は北方より流出する諸川が鰐石の出合（であい）で合流し、これより巨川となり、樫野川となり海灣に注下したのですから、藏。目。喜。宮。野。仁。保。長。野。天。花。宇。野。令。その外より産出する、鑛物、木材、農産物、工業用材料などを筏に乗せ水流の便を得て容易に送出したのであります。

山口は海外交通には、京都や堺より地理上の便利に恵れて居た爲め、明國また朝鮮を経由して、支那並に東亞諸國からの圖書文獻珍らしき工藝品が、傳來したのであつた。然らば大内氏は、當時この道のために、惟一の保護者であつたと存じます。惜ひ哉、大内氏滅亡の際、兵燹のために凡べて、灰燼と化したのですが、幸に山口附近を探討なさるゝならば、今以て何か目撃さるべき懷舊品が、屹度あるに相違ない。

勘合船の創始は、應永年間ですが、朱印船の方は、天正の末期かと思はれる。織田氏、豊臣氏の時より、幕府將軍の許可を得たる、朱印船或は奉書船なるものは、支那南方の海岸のみならず、遠く南洋群島にまで、進出飛躍したものでした。その朱印状と云ふて

航海船主の受くる所のものは、幕府に執政權を有する武將または、かねて國交文書を草裁する五山の學僧より傳達せられるものが多かつた。徳川氏も先規に倣ひ、朱印船或は奉書船と書いて交付した。なかなか繁昌したものでしたけれど、寛永の中頃となつて、俄に朱印船を廢し、海外航行を停めさせ、更に外國船の渡來を禁じたのである。

むかし天文の末に、葡國人が來朝し、貿易の利貪もあつたが、その誘導者として、耶蘇教の宣布をやつたから、その權化の弊害が、漸く識者の厭ふ所となつた。幕府も外教の宣教は、やがて人心の煽動に恐れがある、海外への渡行と、異船の來港とは、いづれも何時かわが國の治安を害することあるべしと考へて、斷然之を禁止する様になつた。果たせるかな寛永十四年に、島原一揆が起つた。隨分の難件であつたが、これは外教の信仰者たる内外にある宗徒の援助が多かつたと云はれて居る。

彼の八幡船は往々海賊的行動で、支那南方沿海地に雄飛したが、朱印船は豫め十分の身元調査を経て、許可せられたので、後日の責罰なき様にと考慮し、いづれも用意して回航したのである。その船體は船主の所有に屬し、積込み荷物は、船主又は別に資本主があつて之を管理したものである。それ故とにかく船舶を動かすのは、大海激浪の險を冒

し得る船頭の権力を頼むの外はない。併しながら朱印状を得る者は、固より船主である。斯様な制度でいづれも身元、職業、姓名、年齢、その外必要と認むる諸件を取調べし後でなければ、容易に朱印状の許可は出来なかつた。

諸家の記録を見ると、船主に末次、船本、荒木、緑屋、茶屋、角倉、伏見屋、伊豫屋の名前があるが、まさかこれだけではあるまい。又渡航着地には、廣南、東京、占城、東埔寨、六昆、太泥、暹羅、臺灣、呂宋、阿媽港、交趾、塔伽沙古の地名あるも、決してこれだけではあるまい。

防長周回の灣港には、古來澤山の船舶が集まり、有力の船頭が多かつたから、當時朱印船に働いたものには、防長人としての船主か、さなくば船頭として乗込みし者は、屹度多かつたであらう。われ等の思當るのは、防長の海濱に、住吉神社や祇園社が、各所に設けられて居り、また諸方の社寺の繪馬堂の額面に、古き船舶渡航の圖繪を畫いたものが多く懸けられてあることである。此等はいづれも本件の考證に就いて思半に過ぐるものでせう。朱印船に關して、是非とも記憶すべきは、絲割符のことです。これは南方舶來の唐絲を輸入したのですが、その傳票の通券である。その絲の輸入の際に、小形の銅

印を附けて來る、之を絲印と申す。荷絲が着したとき證印を押して返へすのに、その印だけは此方に残して置いた。頼と何が書いてあるか讀めぬが、誠に雅致ある面白いものであるから、有馬、大村その外の武將は、常に愛玩して自家の印章に用ゐてゐた。

戰國時代に於て、知つて置かなければならないもので、一向今日書き残されて居ないお話がある。これは第一にお金のことだ。何か物を買はうといつても、金を出さなければ、決して賣つて呉れるものでない。さてその金ですが、金銀その他の通貨、天下を自由に駆け廻るから、お足ともいゝますし、また遠方まで飛んで行くから鳥目とも云ひます。何處へでも通貨は差支へなく行きますが、これは金銀が主で、外に銅鐵で造つた錢がある。さういふものによつて用達しをして居りましたけれども、何人もこれ等の通貨を無闇に澤山持つて歩くことは出来ない。私共子供の時は昔の名残りて皆その硬貨を腰へ付けて歩いたり、財布へ入れて運んだものですが、多額の大金を取扱ふことになる、如何にも重くて困るから、便利のため手形、切手といふやうなものが餘程古くから通用して居つたのであります。それから戰時使用としては武家の軍票が發行された。それによつて支拂をしたのであります。また土地の賣買とか米穀の値段もやはり何か賣渡しに

便なる安全の媒介物がなければやれませぬから、きつと何かあつたに違ひないのでせうが、更に書き遺したものがありません。あれだけの多数英雄どもが、彼處此處の軍さをした時に幾らの金を使つたのか、戦國時代の物の値段がどれだけであつたのか、むしろ當時の物價を書いたものはあるが、却て支出費用即ち使拂代金を書残してないのは遺憾至極である。

むかし奈良朝の時には、防長は鑛物資源に富裕なりとあつて、長門にも周防にも、鑄錢司を置いて、錢貨を造らしたのである。朝廷にて和銅開珎その他の錢貨を作りし例に倣ひ、長門の長府と周防の鑄錢司とて、澤山に鑄造した。多分天平年中と思はれる。後世藩政時代に、農夫が田圃を耕す中に、往々土中より古錢の埋れるものを掘出したそうですが、鑄造せられた錢貨は決して一種にあらず、必多種あつたものとおもふ。何とかしてその錢名を知りたいきものです。ずつと後世に至り萩の郡司氏が、藩命に依り鑄錢したことがあるが、これもみな古き昔の型式に隨へる所が多かつたでせう。また和銅年中に、元明天皇が諸國に風土記を撰述する様詔命のあつたのは、やはり資源開發のために調査せしめられたのであつた。

米穀はわが國食品中の主要なるもので、何人も一日三度の食膳に米を食はぬものはない。米飯は即ち我等の生命を保つ第一位の食餌であります。それ程に大切であるから、炊いだ米は直ちに食用となるが、未だ炊かざる粃米、玄米、白米は何時も貨幣に代用せられます。平時でも戦時でも容易に交換流通して便利に役立ちますので、身分階級を問はず、何所でも何時でも、金銀に平衡して、尊く重要視せられ、これは今日でも同様で、如何にも古今同じことである。實に米は各人の生命を養育保存する最良の要素なりと考へられたからであります。

武家政治の旺盛なりし時代には、殊更に米を大切にした。軍隊を養ふにも戦争をするにも、米がなくては一日も遣れぬ。それ故平時到る所に倉庫を設けて出来るだけ多量の米を貯藏した。それは戦争や籠城のみではない。一般人の平時職業生活を補救することも多く、又天災饑饉で不時に急を要する救濟事變が生じたならば、金より勝る貴重の效用を現はすものは米に及ぶものはあるまい。人生の非常に於て金と匹敵して貴重に使はれるものは米です。場合に依り米は金よりも先きに急使されるものです。

さても赤道直下の南洋諸島では、一年中春夏秋冬ともいつでも米が生熟する。生活状

態には何の心配もいらぬと云ふ安樂淨土ならば決して苦勞もないのですが、外の國土ではそんな夢の様な極樂生活の出来る筈はないから、いづれもその國の氣候土質慣習時運などを考へてその國情に適應する様な、最善の治術を施さねばならぬ。然らばわが日本國は、天照太御神の神勅に宣るし如く、豊葦原瑞穂の國である。肇國以來米を食ふて國性の精神を養ひ來つたからして、日本人は全く外國人の腸や膽とは素質が違つて居ります。その上に日本の米は、特に別種の精質なることを忘れてはならぬ。米ならば金銭に引換えることが出来るけれども、金銭を米に代用することは出来ぬことが多い。軍兵籠城のとき又は大饑饉の際では、金の力ではその危急を救ふことは出来ぬ。糧道を絶つとか、糧食を給するとか云ふのはいづれも米の有無を以て、その成敗をいちかばちか決すると申すのである。然らば米は人間死活の問題を一決すべき最大の權威と云はねばならぬ。

防長米は古い昔から特に勝れた性能を有して居り、その耕作法と土質氣候の宜しきとが、おのづから調和して結實收穫の上に全く良効果を見るものと思はれます。古來大阪市場に於て、防長米が非常の聲價を得て、米商の信用の厚かつたのは、全く防長人が善き米

を作るからであつた。

米價は非常に高くても困るけれど、それとて餘り安くても困る。昔は斗米三錢で太平を歌つたものだといつて居りましたが、近時私共の今に覺えて居りますのは、玄米が四斗俵で一圓五十錢しかしない。馬に二俵附けて歩くと三圓にしかならない。それぢや百姓は堪らない。それで東京では白米が一圓に二斗で、一斗の白米は五十錢で喰べられました。今日の一般物價に比べて細かに勘定したらどういふ風になりますか。それで米といふものも戦時に於ける米の扱ひ方と平時に用ひる米の値段とを、戦國時代の書附なんか詳しく調べて見たら、餘程面白い動搖の跡が現はれはしないかと思はれます。

それから米のことより次第に敷衍して歴史に見える食物のことですが、これも今日は歴史といつても口語體の平易な讀物が澤山出來て居りますから、すべて四角八面のことばかりでなく、食べ物のごとも、古い時代に遡つて深く研究したならば、戦國時代の物語に残されたものでも参考にすべき資料が屹度あることと思ひます。例へば、豊臣秀吉が天子様の御臨幸を聚樂第に願ひをして、御馳走を差上げたのですが、その時は御泊掛けで御逗留になつたのですから、すべて朝飯も晝食も晩飯も、如何なる御獻立の御料理

を差上げたものでせうか、また千利休が、秀吉を初め有名な大名を案内して、會席の御馳走をした時の献立を、書いたものがありますが、あゝいふものは頗る面白いと思ひます。利休の茶の湯の献立ですから、常食とは違ひませうが、とにかく如何なるものを喰つて居つたかといふことが判ると頗る面白いのです。今日とてもさうです。偉い人達が澤山居りますが、それ等の人達が平日どんなものを喰つて居るか、上流階級はどんな献立で食べたのか、低い身分の人は何を食べて満足してゐたかといふことを、書いたものが頓と見えませぬ。近來名家の一代の物語を書いたものが出來て居りまして、その人の平常の食べ物のことはちつとも書いてない。人間は誰でも朝晝晩に食事を取らぬ人はない。その喰うて生きて居つた事實があるならば、喰ひ物はかういふものであつたといふことを書いてあつたら、それが見られたなら非常に面白い。きつと衛生上に保健養壽のために有益の参考書と思ふのです。喰べ物は身分の上下によつて随分差別があり、また體質やら境遇やらでそれ／＼違つて居ります。嘉永六年に米國からペルリが來た時に、幕府の方から御馳走を出した。その時の献立は詳しく書遺されて居りますが、あゝいふやうなこともその時代を知つて置くべきの一つです。さうすると今は食べ物が非常に喧

ましくなつて、食餌療法であるとか、何とかいろ／＼研究して、あゝいふものを食べてはいかぬ、かういふものを食べなくてはいかぬといふことをいはれて居りますが、そこで昔の偉い人の食べたものを對照したら、昔の人が早くも案外感服するやうな料理法を承知して居つたかも知れませぬ。又今日からでも宜いから、さういふ食事の献立を書き遺して置けば、今後百年とか、二百年後の人が屹度参考として大いに喜ぶだらうと思ひます。現今でも多少閑散な人は毎日料理の献立を書いて、百年の後に遺して置いて貰つたならば、昭和時代にはこんなものをみんなが喰つて居つたのか、中々感心なことだからいふものは滋養分があつてよいとか、ビタミンがどうだとかいふやうなことで、後世になつて餘程役に立つかも知りませぬ、百年の後には屹度何か面白い批判があるでせう。

もう一つ醫療のことが昔から随分書かれた書籍はありますが、これは素人に分り易い醫療を知るべき好書がない。如何なる先生もやはり病氣に罹ることがあるから、醫者に診て貰ふことも、藥を飲むこともありますから、醫藥療病のことは奈良、平安、鎌倉、室町、桃山、戰國時代に涉り、風を引いた病人にはかういふ藥を與へたとか、負傷者があ

れば、どんな手當をしたとか、決して草根木皮ぱりりではなく、當時としてはなかなか進歩した案外感服するやうな薬用療法が、名醫の手にあつたに違ひない。それを今日に書き遺されてないからいけない。毛利元就が雲州の陣營に居られた時に、今大路道三が診察に行つていろ／＼薬を盛つたといふやうなことがあるが、さういふものでもあの處方を今の人に見せたら、中には感心して、この薬ならば今日でも丁度適當であるといふやうなことで、今大路道三もメートルを上げたかも知れませぬ。醫者の醫には酉の字が付けてありますが、酉はもと酒(さけ)の省略で酒の意味である。即ち酉は酒なり、古い時の酒の字で、これに水篇があるべきのを約されたのです。何でも薬を酒に和して飲むのです。これは今日のやうな酒ぢやありません、この頃のやうな利目の強い灘の銘酒を、風邪の病人にがぶがぶ飲ましたら堪らない。昔のは頗る稀薄な手輕なものです。餘り酔ふやうなものぢやないでせうけれども、それに和して薬を飲んだのです。

それから醫者の門前に何々鑿院と書いた看板があるが、これは醫院と書くべきである。醫と鑿とは違ふ。醫は薬を興へて治療するのであるが、鑿の方は若し重患者でもはや醫者の力では見込がない。今度は運命を天に委せ、神に祈つて治して貰はうといふんで

す。巫といふのは神に祈つて治して貰はうと願ふんですが、巫は神に仕へる巫女です。せつない時の神頼みと云へる様に神様に祈つて治して貰ふといふのが巫の字を書いた因縁です。故に病人の身體を診療し、薬の力で治術を施すのが醫であり、神様の威靈に祈り更に人力を超越せる運命に俟つのが鑿の方である。何とぞ醫と鑿を間違へぬ様に書かれたきものです。

とにかく古代の日用料。理の献。立。附。やら、醫者から病人に興へた按。薬。處。方。箋の如きものが何處からか發見されたなら、研究家の参考資料として、至極結構と思はれます。私も耄齡以後は、心氣次第に老耄して、物毎に忘易くなりましたので、同じ事を重ねて繰返すことが多いのを恐縮して居ります。拙話中に屹度重複が多いことゝ存じますから、更に御許しを願ふ。

戦國時代にあつて、防長人のみならず更に諸國人から感謝を受くるのは大内氏です。大内氏は推古天皇の時から子孫が繁榮した。殊に大内氏は山口に根據地を構へ、それから周防、長門以下六箇國を領して、統治上の功績が多かつた。その中で最も武威の盛なりしは大内義弘です。南北朝の御不和が中々永く續いたので、これは實に困つたもの

だ、南朝とか北朝とかいうて騒動のあるのを、何とか鎮靜しなければ、天下治安のために宜しくないので、山名や細川のやうな有力な武家がゐるけれども、頼と手が付けられないのを遂に、雙方の公家武家を説きつけて、南北朝を一つに纏めて、平和を謀つたのは實に大内義弘の力です。

それから南北朝の紛争も、目出度く合一したといふので、應永といふ年號になり、これが三十四年も續いたのであります。義弘は智略もあり、武勇にも優れた人でありましたが、惜むべし彼は應永六年に四十四歳で死んだが、實は同志と共に泉州の堺で、亂を起して將軍家と争ひ、その時に死んだとのことです。山口に昔の香積寺に葬つたのですが、その香積寺は今の瑠璃光寺の五重塔のある所が即ち香積寺のあつた所です。然るにこの頃また吉敷の中尾に於て、大内義興の墓所を見付けたと申しますが、それはいつこでありますか。

そもそも大内氏の名物男は、義興であります。義興は文明九年に生れて享祿元年に五十二歳で死んだといふことですが、その事蹟中に特に尊敬すべき功勳は、永正年間に伊勢の太神宮を山口へ分祀したことです。これは誠に感心極まると思ひます。我國體を尊奉

し、敬神勤王の志厚き人であります。どうしても眞劍に國體を崇敬するために、天照皇太神宮を大切に祀りしなければいけないといふ譯で、此地に分祀を願ふたのですが、今の高嶺太神宮がそれです。上古よりして防長人は、いづれも神様を祭り出雲系統の文化を受けて之を崇敬するために、素盞鳴尊や大國主命を祀れるものが多い。祭祀は國を治め、人を教ゆる根本でありますから、祭事をまつりごと、政事をまつりごと、申し、祭政一致でなければ國も人も治まらぬ。明治維新の初にも、むかしの大寶令以來の制に倣ひ、神祇官を太政官の上に置かれ、天皇の御親祭を以て大政を行はせられたものであつた。古來防長人はこの聖旨を善く傳へたものと思はれます。そうして太神宮ばかりでなく、別に多賀神社をも奉祀してあります。この多賀神社は伊弉諾尊、伊弉册尊を祀りした社ですから、戦國時代の武家としては、殊に珍らしい感心な心掛けと思ひます。

大内氏が周防の首都たる山口に於て、太神宮、多賀神社、八坂神社（もとは祇園社と稱す）を勧請して、諸册兩神、天照太神、素盞鳴尊を敬祀したのは、如何にも感服の外はないのであるが、義興は、又非常に朝廷の御衰運を嘆いて、始終いろ／＼なものを献上

したのであります。その後には續いて現はれたのが大内義隆です。義隆の最後は戦争に敗れて自殺したといふやうな氣の毒なことになつて、何とも残念千萬の最期ですけれどもそれは戦さの爲に武人としての悪運で遺憾至極でしたけれども、本來の義隆の精神、功績ともに立派な貴族であつたのです。丁度義興が、太神宮を建設したといふその少し前の永正四年に義隆は生れて、さうして天文二十年の九月に四十五歳で死んだといふことです。如何にも残念なことです。それでは義隆は一體どういふ功績があつたかといふと、先代の義興が、太神宮の御分靈を伊勢から山口の高嶺にお迎へして社殿を建て、國民は、太神宮に詣うでなければならぬといつた。そのことが早く防長人の頭腦に滲込んでゐるものだから、皇室尊敬の念が深く、いつも御内帑の御用金を献上したのであります。義隆は學問も能く出来、藝術にも堪能で、字を書くことでも、繪を描くことも上手でありました。又武術文藝ともに優れてゐた人です。それが爲に今でもいはれてゐるのは山口に一坂銀が出たといふことで、また天又銀（てんまたぎん）といふ名前があります。これは大内氏のことにも毛利氏のことにも大關係があります。さて銀といふ名の附いた銀は、大内氏の時に始終朝廷の御用に献上したといふことがあ

りますが、今でも金山道といふ地名がありますが、あれは黄金ではない。山口にて「かなやま道」と云ふて居るのは、黄金を意味する金の字を指すのではない。これは金屬を汎稱したもので、銀や銅或は鐵を採つた鑛區であつたに相違ない、銀銅鐵は出たのだが、黄金は出なかつたでせう。

義隆は皇室の御援助はもとより、國家的事業にも多大に貢献したもので、自分から金を出していろ／＼な仕事をした。又學問、藝術等の保護者でもあつた。それが爲に、山口は義興、義隆の時代には諸方から有名な人物が澤山集つたものです。又外國に渡航する僧侶、學者、藝術家、商人などが皆山口に来て居ります。例の桂庵、絶海、雪舟、策彦を始め工技に勝れたる幾多の名工どもが山口に往來して居りました。それは大内氏が足利將軍から勘合符の印を預つて居つたからである。この印は海外渡航券に必要な證印であるから、これを得んとて澤山の名人巨匠が山口に出入したのである。山田祥瑞も山口に竈を築いて陶器を焼き、それから相當學問もあり、何か不平を懷いてゐるやうな京都の公卿僧侶などが、山口に来て文學や工藝の方面に力を盡したことも何ほもあります。でありますから、山口にはむかし大内時代の名物が相當澤山に残されて居りました。

時勢の方は妙なものです。右等の名物が却て戦亂の折には禍にかゝらず、むしろ後年平和の時に於て皆なくなりしました。これは山口ばかりぢやありません。明治三年になつて中央政府から、舊物廢棄の嚴命があつて、兩部神道を廢さるゝことゝなり、これ迄神社内に設けられた、佛教式の建物や佛具に混入したものは、すっかり破壊された。その際山口方面にあつた。全国的に歴史上の因縁ある大切な寶物を、悉く失ふことになり有名なる古い美術工藝品も皆二束三文で叩き賣られてしまひ。金銀の附いてゐるものは皆古金屋に安價で目方にかけて賣つたといひますが、特に山口は非常に甚しき災難を蒙つたものでした。これは眼睛咫尺を辨せざる俗吏輩が、漫に中央政府の命令なりとて、俄に官府、學校、神社、佛寺より、大切の貴重品を廢棄させたもので、彼等の言ふことは眞に無法でした。徒に昔のことばかり考へてゐては、人智が遅れて、進歩しないからとて、愚策にも西洋の眞似をして、容易に得難き古い寶物を惜氣もなく叩き潰ぶしてしまつたものです。

それから戦國時代には、戦争があつて、非常に大混雜があつたけれども、山口は學問や美術工藝の保護者が居つたので、いろ／＼なものが澤山あり、外國へも秀才を送つて研

究させたことも、大内氏の時には餘程多數にありました。彼の刀劍の如きもの、それから焼物、塗物、織物、染物のやうなものは山口の名物でありましたが、今日でも幸にその名残を存して居るのは御承知の外郎です。山口の外郎は、今日よりは昔の方が非常に繁昌の名物でした。古い時の薬は煎薬、煉り薬、丸薬、散薬、水薬、膏薬ですが、右の外郎は煉り薬から來たものであつて、山口からは有名な醫者が、支那に醫術の修業に行つたものです。今日では反對に、日本から醫者が支那に行つて此方が先生となつて教へるといふやうな時代ですが、大内氏の時代には凡べて支那に行つて、醫術、薬法を修習して來たんですから、その頃の薬の名前または處方、治療法といふやうなものを調べて、昔の跡を知つたならば、随分今日の好い参考になることゝ思はれます。

むかし山口は鑛山と温泉で、多くの人氣を聚めたが、大内氏が最高の趣味を以て、名聲を世間に博したのは、美術工藝である。陶工、漆工、彫刻、織物、染物、その他の工人を奨励して、多數の名作を出し、また音楽と繪畫に於ては、更に一層の愛着を深からしめたものである。當時の遺留品も今は餘程少くなつたが、音楽は主として舞樂、能樂に屬するもの、並に織物また彫刻に於ては、今に往々稀世の珍品を留め、若し好古鑑賞家

の手に入らば、必巨萬の價額に上るものがあると思はれる。

戦國時代は、中央政府の威力が漸く衰微して、社會の秩序も、おのづから紊亂することゝなつた。大内氏より毛利氏を通じて、地方政治の上には、國民教養に意を用ゐ、武人教育の外に、農工商諸階級のため、萬事倫理道德の修養に力を盡した。民心の教養は、専ら通俗的にして、何人にも解し易く、更に趣味を以て感受せらるゝ様でなくてはならぬから、向三軒兩隣、隣組五人組相集まり、互に和合結束する團欒氣分を勧め、日待月待、甲子待、庚申待を農家に設けて、家庭にも社會にも、必要な教課を教へ、惠比須講にも閻魔講にも、その集合の郷人に、みな有益の訓話を與へたものである。大道村小俣の笑講も、美禰郡長登の喧嘩講も、つまり相互に和睦して、深交を結ばんとの方法と申すべきであるが、今でも民間に残されて居るのは、當時の壁書である。これは一年中かねて心得置くべき事、また一生涯決して忘れてはならぬ大切の箇條を一紙に書付け、銘々の家の居間の壁に貼付けて、朝に晩に誦讀したものでありました。鳥渡考へると剛柔その教旨を別にする様ですが、畢竟行く先きは文武合一で武人も平人も悉く一括して絶大の國力を作り上げた譯であります。

文永弘安の時に元兵入寇の事があつてからは、外交も暫く絶えてゐたが、南北朝の頃に至り、わが邊民粗暴の徒が屢々朝鮮を侵した。正平年中彼方より、海寇を禁じ、舊好を修めたき次第を申來つたので之を許された。それより元が亡びて明の世となり、足利義満は明主と書翰使節を交換して頻に通商貿易のことを謀つた。日本人即ち防長人が、航海の技能に勝れて居つたため、海外への渡航も盛んであり、また外國船の渡來も多かつた。それ故に、わが國の特志者も澤山に海外に行つたが、外國人もまた此方に參つた。明人もあり、歐人もあり、或は國籍の知られぬ異人もあつたでせうから、當時の文化に何かと補益したものと思はれます。

惟ふに大内氏の遺留記録に徴すると、明人や葡人の齎來つた諸品の中には、繪畫も織物も、屹度名品があつたに違ありません。その時からまた遡つて考ふれば平氏滅亡の際も防長特に下關方面にて惜むべき名品が兵火に罹つたり海底に沈んだものが、澤山あつたこととせう。

平氏や大内氏の遺留せる貴品も、アチアンターやトンガウの如くならずとも、中には當時の戦禍を免れて、今猶ほ誰人の手中に流落し居るかも分からぬ。彼の三韓退治の時の